れば、内外相響應して一種の悲聲となり、孰れも臥し轉ばまほしき思ひなりけり。

阿闍梨は言ふべき程は言ひ盡しつ。今はここに在りて何かせんとばかりに、徐ろに榻を離れて、枯木の如き身を運びつゝ、方丈の方に去らるゝに、晩冬の衰陽雲を破つて光りを落せども、力弱くして老軀を養ふ影もなく、却つて刄の如き奇寒を來して、並み居る龍象も其の肉の縮まるを覺え、掩ふものなき冬木立の身の上をのみ、只顧に痛み歎かるゝなり。

寔に阿闍梨は尊き權者にて在しましけん、定命を能く前知し給ひて、かりそめの微恙に罹られしと見えつるものゝ、日に添へて肉落ち氣衰へ、素より藥水を口にし給ふ事なければ、只第頼み少くぞ見え給ひける。牀上に在ること十日ばかり、十二月十五日となりしに、自ら牀上に起き直りて、

『いでや、今より蘭湯に浴して躬を淨めなん』と、俄かに左右を促がし給ひぬ。

蘭湯に淨め畢れば、淨衣に改めて、右脇北首、西に向つて臥し給ひ、手に大毗盧遮那の印を結ばるゝと見る間に、怡然として圓寂を示し、春秋六十、臘夏四十にして、

法眼既に固く閉ぢ畢んぬ。

五更の鐘は意あり氣に、いと長く響き來れり。今や命終の御別れぞと、うち集ふ一山の門侶は、涅槃の枕に悲しみ叫べども、四大空に歸し終つては、今將た如何とも施すべからず、泣く泣く遺骸を東塔院の道場に奉安して最後の營みを勤むるのみ。中にも空蟬は末資の外僧として、いかなる宿緣なりけん、拔群の寵遇を被り、八世嫡統の瀉瓶を受けたる師恩の、忘れんとしても忘るゝによしなく、此の夜單身持念してありしに、忽然として和尚は吾が前に立ち給へり。

『呀！』

思はず聲を揚げて仰ぎ見れば、和尚は莞爾として微笑し給へり。

『汝は未だ知らざるや、吾と汝との宿契の深かりしを。多生の中に相共に誓願して密藏を弘演し、彼此代る〳〵師資と爲ること、只だ一兩度のみにあらず。是故に汝に遠渉を勸めて、我が深法を授けつ、受法云に畢んぬ。吾が願ひ足れり。汝は西土にして我が足に接す、吾は已た東に生じて汝が室に入らん。久しく遲留すること莫れ、吾

前に在つて去らん』

其の言容在りしに毫差ふことなければ、空蕪は其の詞骨髓に徹し、其の誨心肝に切にして一びは喜び、一びは悲みつゝ、胸裂け腸斷えなんばかりに、謹しんで之れに答へ奉らんとして、涙を拭つて面を仰ればあな口惜し、和尚の温容は在さずして、前に炷きたる香の煙のみ、夢の如く立ち騰りたり。

同法同門喜過深。遊空白雲忽歸岑。
一生一別雖再見。非夢思中欲數尋。

第十四　墨池の香

殊勝に響く梵唄の聲を耳にしながら、春寒猶ほ去り難なる西明寺の客院に、書寫せる新譯の秘卷より眼を轉じ、牕を排いて天の色を仰ぎ瞻たるは、橘秀才逸勢なり。

『蕪師、彼れほどの大部の卷數を、はや卒業せられつるか。寫經生等は後れたり。彼等いかに心ばかりは競ふとも、飛ぶが如き筆の運びには、及ぶべき力なきこそ効なからめ』

今は卷を案上に擱きて、頰杖つく〳〵空蕪が口に眞言を誦しながら、細楷を以て寫し行く『瑜伽念誦儀軌』の一卷を、飽かず目護り居たるなり。

空蕪は唯だ微笑を以て答へしのみにて、少しも筆を止めず、目と心と腕とを卷と紙とに注いで、油斷なく書寫の功を積み行くにぞありし。

逸勢は尙ほ眼を移さんともせず、一心に落筆の妙を見てありしが、卒かに想ひ起したらんやうに、快心の笑みを浮べぬ。

『大德は付法傳燈の素志を果して、二十年の學法を一年に遂げ得られにき。加旃文章、書道、長安の儒林を壓して、日本の聲譽を中華に輝かせしは、空前の偉績ぞかし』

苦笑しつゝ筆を走らせし空蟹は、毫しも手を休むることなくして、輕く言ひ消したり。

『詩文の淵叢たる大唐の儒林に伍して、應酬唱和に鬼才を現はし、橋秀才の名聲を馳せたる卿に比ぶれば、月の前の辰星なるべきを、何どては爾か宣ふぞや』

『唱和は唯だ酒に依つて發するのみ、如何ぞ才藻を上下するに足らん。夫の龍原の碑文を見給へ、青龍の門下緇素幾千ぞや。其の內傳法の和上も在るべし、一世の學匠もあるべし、文に、書に敢て其の人に乏しかるまじきに、大德は異境の末賚として擢でられて此の選に當り、滔々數百言、情至り、理盡し、師德を千載に傳ふるに、些の遺憾なきのみならず、妙文の名を文學の國に留め、能書の蹟を輪池の源に遺し、萬人仰いで絕妙を稱ふるが如きは、全く凡事に絕したる奇蹟ならずや。昨日も柳宗元の帖

を還さんため、韓方明先生が方に赴きしに、先生も孟村の碑文を見ては、愁に我等が如き拙書にして、授筆要說なんどを語り、書法を授けたりと思ひしは、心愧かしき限りなり。寔に王右軍が再來なるべしと白されたり。大德が譽れは我等が譽れなり、留學生の譽れは日本國の譽れなり、日本國の譽れは、是れ乃て延曆帝の御稜威なり。中華の大も大ならず、東海の小國も小國ならず。道を行くに人讓り、相遇ふて禮を敦うするは、皆な是れ大德が賜にこそ』

逸勢はいつしか席を改めて、襟を正して肅然として話るなりき。空蟹は尙ほ筆を運びつゝありしが、此時既に後題を書き了りて、筆を筒に收め、紙を揃へて他に移したり。

更に座を牕の下りに進めて、逸勢と案を隔て相對しぬ。

『二十名の經生を得たれば、是だけの大部の經疏も、思ひしよりは速かに卒業れり。改めて卿の御校合を謝し侍らん』

『さやうに言るれば、我等よりも謝すべき事あり。入唐以來偶然柳宗元の書風を愛

して、間ある毎に習ひ試みたれど、北碑風の楷書は、殆ど試むるよすがなかりしを、此の秘策の勘合に依つて、大いに謹嚴に手習ふことを得たるは、是れも亦大德の賜なるは』

『夫れに就て面白き話しあり』

空雅は何かは知らず微笑を含みて、少しく態度を寛げぬ。

『和朝にありては、六書八體をも學びて、正楷は朝野宿禰魚養の敎へを受けしも、筆は羊毫と兎毫とに限られ、其の製も皆な雀頭なれば、正楷にも自から肉を生じて、一種寫經生が型に入るを覺えたるなり。然るに此の長安に來りてより、偶々狸毫の筆を得て、細楷を試むるに、稍や心に應じ手に得たらん思ひありき。さりながら、卿はいかゞ在りつらん、貧道は餘りに古くより二王(羲之獻之)を習ひし爲めにや、南帖の温豐なる處殘りて、筆とかくに意に隨はず、方明先生の執筆法を聽き、また虞世南、歐陽詢、褚遂良等の、北方の碑板を見て、始て顏眞卿が楷書の妙を知り、大いにこの風を揮はんと思ひし折柄、此の秘策書寫の願を發して、幸ひに其の機を得たり。尙ほ

幸ひにして卿の御校讐を得て、心頻に勵みけるが、試みに卿の筆力に比ぶれば、貧道の太く劣れるを悟り、夫れより筆に丹精を籠めて、一心に力を蓄ひしかば、少しく楷書の極致に近きたるを覺え、この中一二帖は、後年に至りて誤つて卿の書と鑑するものあらんかし。是れぞ正しく秀才が策勵の賜ならずや』

手を拍つて放笑するに、逸勢も大口開きて高笑ひしたりき。兩人が笑ひ聲の自から鎭まる時、逸勢は愁然としてうち奏れつ。

『大德は既に詔命を果されしかば、只今にても錦を故國に飾らるべし。我等は不幸にして漢音に嫻らはず、山川兩鄕の舌を隔て、未だ槐林(學校をいふ)に遊ぶに遑あらず。唯だ習ふ所を温ねて、兼て琴書を學ぶとも、日月は荏苒として資生都て盡きなん。殊に此國より給ふ所の衣服食糧は、僅に以て命を續ぐのみにて、束修を納れて書を讀むの用には足らず。かくしていかで廿年の期を待たるべきぞ。大德少しく察し給へ』

一書生として留學の班に列なれども、逸勢は實に王孫の末なり、其の妹は二の宮の

妃として世に榮え、逸勢自身も才氣横溢して、現に大唐の儒林に於てすら、秀才の名を博せしに拘はらず、常に大學に出入する能はざるは、實に給する所の資金の乏しき爲めなり。空海は夙くより之れを察するからに、自ら奉ずるの薄き沙門の身とて、其の剩し得たる物を割て、今までは逸勢の衣食を補ひ居たるなり。空海は常にもなく力ある顏色を示して、力ある聲態にて慰めたり。

『惠果阿闍梨滅後の法海に、棹すべき筏のあらぬが如く、儒林に於ても卿の學ぶべき碩儒はなきにあらずや。韓退之とやらん、較や氣骨ある學匠とはいへど、潮洲とやらんに左遷の身なれば、有れども猶ほ無きが如けん。速かに本國に還るべし』

『何に日本に歸れとや』

『然り。貧道も今日は歸らんとぞ思ふ』

『大德も廿年の期を待ずして、直ちに立ち歸らんと白さるゝや』

『師の遺命いと重し、貧道には疾く歸つて、國家の奉爲め、四衆の爲め、法を布く大任あり』

逸勢はこれに應へんともせず、深く深く嗟嘆したりき。

『太夫もこの三年が程に、心に得られつる智識、目に睹られつる政道の總てを、事毎に施すべき務めこそ在さめ。來ること我が力に非ざる如く、歸ることも亦我が志に非ず。卿に在つては、去留唯だ勅のまに〳〵なるべく、貧道に在つては進退一に師命に隨ひなん。聞くべき道、求むべき法、剩す所幾干もあらねば、之れだに果さば、即時に本鄕に歸り去なん』

かくと聞きて逸勢は、殆ど一條の活路を開きたらん心ちしたりき。

『然らば我等も歸國すべし。大德は定めて遣唐使高階眞人に就いて、歸國を請はんとはし給ふならん』

『然り。若し委ねらるゝに於ては、卿の事は不肖ながら我等にてともかくも申請ひ置くべし』

『そは我等よりこそ願ふ所なれ』

兩個は期せずして面を見合せしまゝ、うち釋たる笑ひを交うるなりき。

逸勢が激賞して止まざりし龍原の碑文といへるは、故し惠果大阿闍梨を葬りたる、長安城東孟村の龍原なる大師塔の側、即ち阿闍梨の塋側に建てたる塑碑なり。元和元年正月十六日、阿闍梨の遺骸をこゝに送りて葬り奉つり、四衆合會して悲感天を動かしゝが、中にも空海に在りては、瀉瓶の洪恩を思へば、胸裂け腸斷ちなん悲痛あり、遂に同侶相謀つて墓碣を作り、大いに德を表はしたり。其の文、其の書ともに空海にして、『日本國學法弟子忠芻空海撰、並書』と署し、大いに唐人をして、其文其書に感歎せしめたるより、遂に儒林の評嘖々として、逸勢をして己を慮しうして喜悅に堪えざらしめたるなりけり。

是の日逸勢の助力せし寫經の校合も業を卒へたり。空海はこれを三十帖に合して冊子に製さしむる事とし、直ちに西明寺を出て、宣陽坊の官舍に、高階太宰大監を訪問したり、己並びに逸勢が歸國を請はん爲めに。

空海が出たる後にて韓方明は訪ひ來れり。逸勢は直ちに己の房に延いて、好める途とて筆を採つて書法の問答を始めたり。方明は自分の書法は決して自分の書法にあらず、自分が空海に授けたる書法は、初め蔡邕が神人より得て、崔瑗に授けたるまゝのものなれば、衛夫人も王羲之も固より此の書法の外には出ざるよしを話れり。方明はまた自身の系統を說いて、知永、虞世南、歐陽詢より、二陸（東之、彥遠）、張旭、李冰陽を經て二徐に傳へられたるものにて、徐璹は即ち余が師なりと云へりき。

また逸勢が執筆法を問ふに對して、筆と書とに應じて單鈎と雙鈎との別あることを說き、方明は五筆の法を明かにして、第一執管、第二族管、第三撮管、第四握管、第五搦管に別ち、執管以外は書家流の用うる所に非ずといひ、尙ほ執筆は便穩に在り、用筆は輕健に在るよしを言ひ添へて、詳しくは空海和上に尋らるべしと結びたり。

折しも空海の歸り來りしかば、方明は逸勢との筆談を止めて、威儀を正して空海に接したるなり。

『和上、龍原の墓碣は日に添へて藝苑に名を傳へ、遂には天闕に達して候ふぞ』

空海は駭きの目を瞠りつゝ、肅しまやかに對へぬ。

『そは眞にて候ふやらん』

『仰せらるゝまでもなし。余は和上を僞るものに非ず』

『先生の僞らせ給ふとは覺えざれども、中華は文學の源にして、長安は秀才の府に候はずや』

『去りながら此の事は極めて正確なる沙汰にして、既に拓本も叡覽に入りしとなり』

空雟は愈々謹嚴の態度となりぬ。

『若し誤つて天覽の榮に入りしならば、そは阿闍梨大師の德の、九天を動かしたるものにこそ候はめ』

『惠果は三朝の國師なり、上にも御歸依淺からざれば、固より其德は忘れさせ給ふまじ。されど、叡感在らせられしは、國師の法德にはあらずして、其の文と其の書となりき』

『そは思ひも依らぬ御戯れを承はるものかな。文には一代の名家星の如く、書には當代の二王雲の如し。海外の學法僧の文墨など、一掃して棄つべきものを』

空雟は笑つて耳をも傾けざりき。逸勢は兩人の一語一句、更に心に解するものなけ

れば、句毎に空雟に尋ぬれども、是れにも同じく笑つて答へざりき。

方明は手を扛げて空雟の注意を呼びつゝ、

『僞りならぬ證據には、或る內官の勅命を奉じて、余が方に內意を探りに來るものありき。勅諚の趣きは他にあらず。長安宮の殿上に三間の壁ありて、王右軍之れに書を揮はれしが、幸ひにして、晉末の亂にも壞たれざりしを、歲月を經るまゝに、いつしか土落ち壁崩れて、今は書憶もおぼろげになりぬ。其內二間は破損甚だしく、處々新たに塗り更へられたり。而も當代一人も羲之に似たる書風に堪能なる者なければ、其の壁の見苦しきこと言語の外なりとぞ。日本の僧空雟は羲之の書に巧みなりと、夙に叡聞に達し居たるに、今正しく墨碣の拓本を御覽せさせられ、是なる哉と思召させられしより、是非彼の僧を召して、羲之の筆跡を接がしめよとある勅諚なり。余は其の內官と師弟の因あれば、貴僧の內意を承はりてよと賴まれしまゝ、此の事を告げ申すなり。いかで勅に應じ給はんや』

方明は慇懃に說き出して、『向に慫慂るなりき。空雟も亦慇懃に耳を傾けて、一什

を謹聽してありしが、恭しく其の厚意を謝したる後、更めて我が意のある所を演べ聞えぬ。

『空巢は元學法の沙門、身の四大を觀ずるに急にして、思を精しうして書を學ぶの暇なく、先生に就て口訣は承はり候へども、心こゝにあらざれば、被に書して表に穿つの妙に達せず、唯だ徒らに道林の餘花を摘むに過ぎ候はず、何とて王右軍の名跡を補ふことを得候ふべき。この大命は所詮空巢の拜すべき道とも存じ候らはず』

『謙退の德は余も深く感ずる所ながら、こは固辭すべき事とも覺えず。今大唐の文筆、決して其人に乏しからざれども、正しく右軍の流れを掬む者なきを、日本國の僧空巢あつて、能く其の闕けたるを補ひしと言はゞ、其の譽は決して和上のみならで、正しく國の光りならずや。貴國はこの光譽を專らにし給ひ、我朝は損じたる壁を完うするの益あり。一枝の毫、半斛の墨、兩國の得る所は、實に千載の後に垂れなん。枉て大詔を奉じ給へ。余は切に和上に勸むるなり』

されど、空巢は固辭して受けざりき。方明は熱心に勸說に勞したるが、所詮屈すべ

き氣色の見えざりしかば、直ちに筆を援いて逸勢を說き初めたり。

逸勢は師弟の問答の惱める模樣は心得ながら、其の談判の事柄に通せざれば、如何とも施すに策なかりしなり。さるを今初めて方明の筆話によつて其の意を知りしかば、快く融和の任に當らんことを引受けたり。方明は殆ど蘇息りたらんばかりに悅びて、竊かに逸勢を摹拜たり。其の一事にて既に方明の詔命を快諾したる情を察し得たれば、逸勢はこの方面よりして、諄々として空巢を說き動かしたりき。

空巢に於ては、義之の書を補修せんことを、さまで至難の業とは思はざりしなり。されども、三衣を纏つて宮闕に出入し、法を說き行を脩するならば、進んでも命を奉すべけれども、墨池の餘技を以て紫禁に上り、徒し名を異境に留めんことは、其の志にあらざりしかば、固く執つて動かざりしが、逸勢が煩ひを師の身に及ぼさんことは、大德の志にもあらざるべく、既に墓碣を留めて文書ともに萬目の觀睹に委ねたる上は、宮殿の壁書を厭ふべき理由なし。王羲之何者ぞ。長安宮何者ぞ。成敗何かあらん。毀譽問ふ所にあらず。宜しく一揮して先生の意を安ずべしと說くに至つて、笑

つて、總かに之れを諾ひたりき。

方明は立つて逸勢を再拜せり。

『橘秀才にして在しまさゞらんには、方明は忽ち天譴を避くるによしなかりけんを』

『さる推尊は無益なるべし。夫れよりも壁書は別に摹本にても候ふやらん』

『夫れもこゝに携へたり。和上の意氣に驚きて、出すべき機を失ひたり』

初めて笑ひを含みながら、錦の帛に包みたる二葉の紙を展ぶるに、一葉には草書の詩をうつして、其の剩れる『樹』の一字を、一間の壁に大書したるもの、殘れる紙に唯だ一字ありき。書は雙鈎に摹して、巧みに塡墨したるものなりしかば、宛然に羲之の眞蹟に對する想ひあらしめたるなり。

空雅は息を凝らして此の書を熟視したり。逸勢も眼光鋭く字の一點一畫を射たり。兩個の熟識なる態度を見つゝ、韓方明は獨り喟然として歎ずるなりき。

第十五　馬の餞別

長安城中に醴泉寺となんいへる淨刹ありき。空雅の曾て草履を著けて城中を歷訪せる時、この道場の房を敲きて、梵僧般若三藏に進謁したるより、常に膝歩接足して彼の甘露を仰ぎたる靈場なりき。

陽春三月、城中の楊柳翠條風に弄ばれ、桃李爛熳霞に咽ぶ頃、人は家を忘れて春光に醉ふ中を、空雅は寂然として聖敎の笈を負ひ、心靜かに崇福醴泉寺を訪れ、直ちに般若三藏の璽下に參したるなり。

三藏は黑き面の目を掩ふ長き眉を動かしながら、嬉しげに空雅を視たり。

『和僧には近きに本土に還ると聞く。信なるにや』

空雅は恭しく長揖しながら、携へたる經卷を、三藏が前の案子に置けり。

『七八月の頃には歸國せまほしく、本國の大使に就て請暇の表を上つりて候ふ』

『求法に暇なき身を以て、能くも勉めて梵音を學びつる哉。授くる所の悉曇は、略

ば領解したりしならん』

『文字微妙にして文意深重なる悉曇を學せんことは、所詮專修ならでは慨ふべくも候らはず。去りながら御敎へのあらましは、少しく記憶に留まりて候ふ』

空雉はこの年頃學び得たる、梵字梵音の師恩を謝して、彼の經卷に目を注ぎぬ。

『曩の日恩借を辱けなうしつる聖敎、新譯華嚴經一部四十卷、大乘理趣六波羅密經一部十卷、守護國界主陀羅尼經一部十卷、造塔延命功德經一卷、右四部六十一卷、辛うじて書寫の功を卒へ候ひしかば、こゝに携へて還納仕つりて候ふなり』

『和僧遙かに東海に歸るとならば、衲も更めて付屬すべきものあり』

言ひさして座を立ち、三口の梵夾を將ち來りて、六十一卷の經典とゝもに、卓上に並べ置きたり。さて徐ろに言ひ出るやう、

『吾が生緣は罽賓國なり。少年にして道に入つて五天を歷たり。常に傳燈を誓つて此の間に來り遊ぶ。今桴に東海に乘らんと欲すれども、緣なくして志願遂げられず。我が譯する所の新華嚴、六波羅密經等、更めて汝に付屬すべし。斯の梵夾とゝもに將

去つて供養せよ。伏て願はくは緣を彼の國に結んで、元々を拔濟せん。繁を恐れて一二せず』

乃て經典と梵夾とを取つて、懇ろに之れを空雉に付屬し畢りたり。

般若三藏は付屬し果つると共に、案上に肱を突きて、うち解け貌に微笑せり。

『和僧、近き頃勅を奉じて宮中の壁に字を書したる事ありや』

この問ひに對ふるには、空雉も何等の謙辭を用うるの要なかりき。

『然り、大師よ。書きたりと言はんよりは、塗りたりとこそ申すべけれ、固より古人の筆蹟を補ひたるのみなれば』

『皇帝殊に叡感在らせられ、和僧を尊んで五筆和尙の名を賜はりしとや』

『仰せの如く、大師よ』

三藏は愕然として空雉の面を見つめつゝ、

『吾は悉曇の巧拙こそは鑑別すべけれども、漢字の能否には一隻眼をも有せざるが、さるにても、左右の手足と口とに五枝の筆を持ち、五行同じく書き下しつる手際はい

かなりけん、文珠菩薩の化身にあらずば、正しく惡魔の業なるべしとぞ思はれぬる。低き處は兎も角も、高き處はいかにして揮灑せられしぞ、後學のため語り給へ』と、自から膝を乘り出したり。

空雟は却つて怪訝の面色にて、倒まに問ひ詰りぬ。

『空雟がさる怪行をしたりと仰するにや』

『吾の言ふにあらず、長安城裡は此の噂に滿ちたるを知し召さずや』

『さては空雟を幻術の妖僧と申すにや、聞き棄て難き噂にこそ』

姑らくは苦笑ひしてありけるが、間もなく嚴然として威儀を正せり。

『空雟は御覽せらるゝ如く、父母より受けたる一塊肉の身にて候ふに、左右の手足と口とに筆を持たせ、之れを同時に動かすさへ至難なるを、況て一間の壁に向つて、五行別々の字を同時に書き下さんことをや。一考するまでもなく、そは出來得べき事なりや否やは、明白なるべき次第ならずや』

『人間の力にて出來得ざる事を成したればこそ、朝野擧りて驚歎せるなれ。人は言

ひぬ、是れ正しく大權の垂跡、入木の神なり。斯る不可思議を現する事は、人間の能くすべき所にあらずと』

『孔子は怪力亂心を語らずと申して候ふ。空雟よしや右の如き神變不思議の幻術を有するにもせよ、大唐の天子が勅を被りて、勅使臨檢の間、禁闕の壁書を勤むるに、何とてかかる暴慢無禮の所業に及び候ふべき。且又書は是れ筆道の神能として、常に尊崇する王右軍の遺蹟にては候はずや。空雟は之れに對して滿腹の敬虔を傾け、一點一畫全身の力を注ぎ、口に眞言を唱へ、心に陀羅尼を持し、熱血を以て補書したるに由り、勅使の奏聞を聞食すと同時に、直ちに臨御ありて天覽を辱なうし、執筆の五法に精通したる者にあらずば、いかでか此の精妙を見ん。宜しく彼の外僧をして五筆和尙と號せしむべしとの勅諚を賜はりたるなり。忠孝彝倫は此の國の立敎にあらずや。況んや日本國に在つては、日の神の神裔萬代に君臨し給ひ、天子を以て無上の至尊とす。殊に古へより君子の國と稱せられて、禮儀を立國の要となせば、三歲の童子と雖も、君に對して忠を存せざるはなく、皇家に對して禮を重んせざるはなし。空雟は日

本國の僧なり。大國の天子の詔を奉まはりて、いかで不義の行ひを爲すべき。與國の朝廷に參して、いかで無禮の墮を爲すべき。足を以て筆を握るは、是れ筆を穢すなり。是れ書を穢すなり。是れ王右軍を辱しむるなり。是れ唐宮を呪ふなり。不肖ながら空雅に於ては、三年の恩遇を被りたる唐宮に對して、誓つてさる呪咀がましき妄舉は仕つらず。輪王も照覽あれ、空雅は誓つてさる邪慢の僧にては候はぬぞや！」

言々皆な血なり、而も熱したる血なり。語々皆な火なり、而も心を燒く火なり。指を觸るれば指は朽ちなん。手を支ふれば手は焚けなん。三藏も深く空雅が溫順なる平生を信ずるより、痛く其の言の理あるに服して、自らは此の意を以て、汎く世の惑ひを解くべしと誓ひたりけり。

この般若三藏といへるは、中天竺摩伽陀國那爛陀寺の僧なりしが、南印度に至つて達磨枳栗底（本師子國の王子にして、一名を達磨掬多といひ、唐にては法稱阿闍梨と稱す）に就て曼陀羅に入り、瑜伽五部の契印、三密護身金剛頂を受け、住すること一年を經て、唐に來りて佛法を弘めんことを誓ひ、醴泉寺に住つて、四部の梵經を翻譯

したるなり。

空雅が悉曇を問ひ、諸法を質したる梵僧は、般若三藏の他に、慈恩寺の寂默あり、南天の波羅門ありき。寂默は梵名を牟尼室利三藏といひ、神宇高爽、量度眞率の老僧にして、中天竺那爛陀寺一萬僧の綱錄たりしが、德宗の貞元九年（延曆十二年）に那爛陀寺を發して、錫を擁して東の方震旦に來り、自ら北印度より此寺に往きて出家し、戒を受け法を學べりと言ひ、遂に長安に入つて大興善寺に住りしは、貞元十六年の事なりき。其の十九年に徙つて崇福醴泉寺に入り、梵本の翻譯事畢りて、今は慈恩寺に老を養へるなり。

牟尼室利三藏は侍童に助けられて訪ひ來れり。越州龍興寺の內供奉十禪師順曉阿闍梨も期せずして來り訪へり。南天波羅門と曇貞和尙と、亦幷び會せり。曇貞和尙は空雅が悉曇相承の血脈を得たる師家にして、不空三藏の弟子なれども、他は皆な善無畏三藏に因緣を同じうする大德名師のみなりき。

順曉阿闍梨は自ら大法輪を付屬したりし寂澄が事を語り出て、和國の名僧輩出を頌

し、且つ徐ろに空巢と語りぬ。

『聞く所に據れば、貴僧は越州の節度使に書を送つて、廣く内外諸典を求められしと申すにあらずや』

空巢は阿闍梨の聰聞に駭かざるにあらざりしも、固より秘すべき事ならねば、

『仰せの如く、越州の節度使は故惠果大師に參せられたる俗弟子に在すれば、書を呈して經律、論疏、傳記乃至詩賦、碑銘、卜醫、五明、所攝の敎、以て蒙を啓き物を濟ふ書を、請ひ得て將來せまほしく思ふまゝ、偏へに遠涉の惑みを乞ひて候ふ』と、少しく其の意を補ふて對へぬ。

『三敎に忠なる感するに餘りあり。さりながら青龍和尙の付屬は貧しからざりしやにこそ承まはりしか』

『さん候ふ。故阿闍梨には悉地付屬を辱なうし、當山の大師よりも稀有の付屬を受けて候ふ。殊に兩界大曼陀羅の尊容を始め、力を竭して書寫し、財を涸して圖畫し候ふものから、人劣にして敎廣く、未だ一毫を拔かざるに、衣鉢疾く竭き盡きて、人を

雇ふこと能はず、食寢を忘れて書寫に勞すれども、日車返り難うして忽ち歸期に迫りぬ。此の心の憂ひ誰に向つてか紛りを解き候はん。仰ぎ願くは、大王の助けを得て、虛しくして往き實ちて歸らんことをとこそ』

『さあらんには夫の節度使、忽ち感を發して貴僧の需めに應ずべし。吾も聊か心ばかりの餞けを參らすべきか』

『謹んで高意を拜受致しなん。吾が本鄕は東海の絕島、碧落波に接はつて、來往に萬死の難あり、石室の見難く、貝葉の聞くこと罕なるは、一に路の險しきが爲めにて候ふ。一片の咒、隻卷の文も、將ち歸らば萬人を拔濟すべきに、いかで吾に惠ませ給へ』

『法は人を得て行はるゝと聞けば、かゝるものも貴僧の如き大德に持さるれば、則ち濟民利生の實を擧げなんに。そは他の事にあらず、大乘開文の法に依て、病人を治するに鹽酒を許す事なり』

順曉阿闍梨は一條りこの法を說きて、仔細に空巢に付屬したりき。

かくて五大德交る〳〵密教東漸の嘉瑞を語りて、空海が前途を祝福するに、梵漢の國師が說として、一として空海を益せざるはなく、其の說の稍や盡るを俟つて、辭して山門を出れば、孤雁高く北に飛んで、晚鐘の聲徐ろに暮春の別れを告げわたれり。

◎◎附言　『興越州節度使求內外經書啓』は、『元和元年四月日日本國求法沙門空海啓』とありて、三月ならざるは明白なり、こゝには此事ありし事を知らしめんがため、願曉の口を假りて戲きたるのみ。看者諒せよ。

疾ひに輕重あれば、藥に强弱あり。障りに厚薄あれば、教に淺深あり。……秘藏寶鑰

第十六　かへる岸

滄溟坻極なく究むべからず、海外の緇侶我が唐に朝宗す、即ち日本の三藏空海上人なり。梵書を能し八體を工にし、俱舍を繕し三乘に精し。去秋にして來り、今春にして往く。反掌雲水、扶桑夢中、他方の異人、故國の羅漢、蓋凡聖以て測り識るべからず、亦智を以て知るべからず。勾踐相遇ふ口に對して程を問ふ、那ぞ此情に堪えん。離思增遠し、願くは珍重せよ、願くは珍重せよ。元和元年春沽洗之月、聊か當時少留の詩に序すと云ふ。

諷詠する朗聲は千里の風に送られて、遂に萬里の波に漂ひなん。岸遠く海濶き處、舷に靠つて高吟する者は、留學の儒生橘の逸勢なり。船首に當つて大聖不動明王の尊像を安置し、壇を設けて風波の安穩を祈念する者は、學法の沙門傳法闍梨位遍照金剛空海なり。中央の正席に安坐して、齋らし歸るべき種々の方物を、下僚どゝもに處理する者は、遣唐使判官正五位上兼行太宰大監高階眞人遠成なりき。

仲秋八月の天は一碧水の如く晴れわたり、蒼波漫々として海亦天の如く澄みぬ。廣に快き風に滿帆を膨ませたれば、船はさながら席の上を辷るに似て、看る〳〵明州の岸は遠く視界の外に沒し、瀰望崖際なき洋中には漕ぎ出したるなり。

『禪客祖州より來る。中華帝に竭して回る。空に騰つて猶ほ錫を振ひ。海を過ぎて素と杯を浮ぶ。佛法人に逢ふて授け。天書國に到つて開く。歸程三萬里。後會信に悠なる哉』

逸勢は猶ほ詩を朗吟するなり。此の詩は進士朱少瑞の空海上人朝謁の後日本國に歸るを送ると題したるものなりき。

『歸程三萬里。後會信に悠なる哉、嗚呼悠なる哉、悠なる哉』

再三再四悠なる哉を繰り返して、顧みて大唐の山を望むるに、白雲漠々として波に浮んで、既に山河を見るによしなし。慨然として來し方を懐ひ居たるが、再び一詩を執つて聲朗らかに吟誦したり。

『禪居一海隔つ。鄉路祖州の東。國に到りて周禮を宣し。天に朝して僧風を得たり

山冥うして魚梵遠く。日正うして蜃樓空し。人至つて徐福に非ずんば、何に由て信を寄せて通せん』

こは沙門鴻漸の、日本國使空蕉上人橘秀才朝獻の後却還するを奉送す、と題したる五律なりき。逸勢は吟じ來つて今は情に堪えざるもの〻如く、詩の卷をそこ〳〵に卷き收めて、急ぎ船樓に登り去れり。

空蕉と逸勢とは、遣唐大使遠成と倶に歸國の勅許を受けしかば、大唐を辭し去らんとしたるに、忽ち入謁の寵命に接したり。乃ち唐の禁闕に參して、進んで憲宗皇帝の謁見に入りしに、皇帝には空蕉に對して親しく恩勅を賜ふて宣はく、今賜ふ所の菩提實の數珠、仁は此れを以て朕が代りとなし、永く忘る〻勿れ。朕初めは謂ひき、公を留めて將に師とせんと。而して今遙かに東に還らんと欲するは、惟ふに道理なり。後紀を待なんと欲するに、朕が年既に半を越えたり、願くば一期の後、必ず佛會に逢なんかしと、深く別離を悲ませ給ひて、念珠の外に種〻の恩賞ありき。

か〻りしかば空蕉は一期の面目を施して朝を退き、猶ほ韓方明を始め翰墨に遊ぶ詞

客の祖道を受け、其の行を壯んにして、纜を明州の濱に解きたるなり。其の交遊の道俗に渉りて夥多しかりしと、其の行李の五車に餘りしとにて、當に虛往實歸の素懷を遂げ得たるを知るべきなりき。

唐にては憲宗の元和元年なりしも、我が朝に在りては、柏原聖朝の延曆廿五年は既に盡て、今は安殿天皇の大同元年と改まりしなり。されども、船中の人はさる事を知るべきやうなく、此の海路無事に歸ることを得て、疾く闕下に伏して復命をもし、夢寐にも忘れぬ龍顏を拜し奉つりて、微臣が懷を安らげんとのみ祈りけり。翰て空海に在つては、二十年の歲月を三年に縮め得て、却つて得る所は夫れにも倍したるものあれば、此の航海の安全を祈る心は、人に勝れて切なりしなり。

幸ひにして好晴はうち續けり。夜陰は風清く月白く、船天心に逢し、月海上に浮ぶの奇勝を縱まにしつゝ、船擧りて平穩の航路を樂しみ合へりき。

遠成は杯を人々に巡らして、陶然として樂しめるなり。

『橘太夫、一昨年の船路には不慮の難風に遭れしと聞く。いかに其の光景の凄然かりけるよ』

逸勢は滿を引いて高く笑ひつ。

『凄然なんどは心ありて思ふ事なり。大使を始め斯くいふ某すらも、生たる心なかりしかば、搖上げ搖下す間、咒はれたる死の來ることの遲きを恐るゝばかりなりき』

『さしも恐ろしき難船に、能くも人々の命を全ふしたまひけん、夫も亦不思議なり』

『そは空海の大德が一百八十七所の天神地祇に祈りて、恙なき事を得たるなり。判官も此の渡海の安全を願ひ給はゞ、蟹師を賴みて祈願を凝らさせ給へ』

『實にそれよ、某も今宵より潮垢離をとりて、丹念に明王を祈り奉つらん』

さすがに微醺の快味も消えたらん面色なれば、空海は氣の毒になりて、

『判官よ、御心平らかに在し候へ。是に安置し奉つる不動明王といつば、大阿闍梨惠果和尙の、秘密微妙の法を求め得て歸朝せん時、險浪の上に漂蕩し、危殆の中に勞劬し、波に隨つて昇沈し、風に任せて掣々たらば、いかばかりか惱亂せん。不動明王の像を造りて、彼の擁護を得て、此の障難を除くべしと仰せられぬ。少僧恭しく師

命を奉じて、大阿闍梨の指導を受け、時刻を移さず一刀三禮の信念を以て、自ら彫刻し奉つり、大阿闍梨の開眼加持を受けて、今この船の本尊をし崇めたるにて候ふ。かかる靈像の守護し給ふを、何ものゝ龍神か、得て犯し奉つるべき。少僧また船出の日より少願を起して、諸天の威光を增益し、國家を擁護し、衆生を利濟すべく、一禪院を建立して、法に依つて修行せんことを誓ひて候へば、などか感應在しまさゞらん。人々も御心安く思召さるべし』

巨細に說き聞かするに、判官は言ふに及ばず、下官郎等、船人等に至るまで、孰れも空蟬を伏し拜みたり。

此の時、いつしか雲月を呑んで、天の色漸く險しく、船中卒かに溽暑くなりて、風の力漸く重く、人々のそれと心着く頃には、船人は逸く帆を下し、舵を繫ぎて難風の防禦に奔勞したりき。

所謂八月の暴風月なれば、一朝天氣の變ずるや、五日にして領るか、十日にして熄まざるかは、逆め知り難ければ、今空蟬を拜みたる人よも、胸は恐しさに跳り初めたり。さる中にて空蟬はいかにと見るに、猶ほ尊前にも進まずして、緩やかに逸勢と語り合へりき。

やがて一天は墨を流したらんやうになりぬ。あなやと見る間に電光一閃浪を燒き、霹靂のはためきは、却つて海の底より起れり。朦然たる颶風と、澎然たる波濤と、彼此同時に起りて、船は看る〳〵九天に飄へるよと思へば、倏忽として急轉直下し、地軸に中つて碎けなんかと危まれぬ。

空蟬は明王の前に端坐せり。手に契印を結んで、目を瞑り口を閉ぢたり、風浪次第に猛り狂はんとして、閃電雷霆須臾も小歇なく、船は宛然木葉を弄ぶが如くなり。逸勢は我にもあらで阿ッと叫んで、忙はしく遠成が袂を引きぬ。

『見られよ。明王は威力を振ひ給へり』

言はるゝまゝに目を刮りて靈壇を拜するに、明王は御首を斜にして、天の一角を一睨し給へり。はッと思ひて再び拜すれば、持せ給ふ利劍は縱橫に波濤を切り給へり。遠成は信心肝に銘じて、合掌して頭を船板に叩け着けたりしが、幾ほどもなく業壽の

風定り、無明の波涸れ、蒼海大月を浮べて鏡の如く暉き、碧天秋清を照して水の如く明かなりき。

爾來已順風船を送りて、海上極めて平らけく、滿船益安くして、既に日本の海に乘り入るゝを得たり。然る時に、船中にして奇しき事を言ひ罵るものありて、人人またもや不安の念を抱き初めたり。

その言ふ所を聞くに、日本國の天皇崩じ給へりとぞいふなる。不祥なること言ふばかりなかりければ、何れの津に碇舶したる時、何者より聞きて何者の言ひ傳へしぞと、其の口の本を尋ね糺すに、船中の諸人互ひに首尾を論じ爭ふのみにて、都て一定したる事もなく、とかくする程に恙なく、筑紫の博多の津に船を入れて、十月二十日といふに、めでたく上陸するを得たりしなり。

此時太宰府より出迎へたる官人の言へるに、先帝は年の三月十七日崩御せさせ給ひて、桓武天皇と諡し奉つり、皇太子安殿親王立て天津日嗣を承け給ひ、五月十八日に卽位の大禮を擧げさせられ、是日延曆廿五年を改元して、大同元年と仰出されたるよ

し詳らかに告げ知らせたり。

さては海上の人々の言ひ罵りしは、徒言にてはあらざりけりとて、孰れも喪服に改むるに、空海は初めて長安に入るや、忽ち順宗の崩御に會ひて國喪に籠り、今また萬里の波を凄いで、槎を本朝に歸せば、勅を銜ませ給ひける我が天皇の升遐に遭ふて、悲懷哀情例ふるにものなしとて、追慕の涙止め難く、身に素服を纒ふて、獨り觀世音寺に留住する事とはなせりき。

空海既に歸朝しぬ。遣唐使とゝもに入京して、學法の復命をせんとするに、勅を受けたる天皇は登遐在しましたり。今は新請來經の目錄を製して、遣唐使に託して上表以聞し、心ゆく迄先朝の奉爲に冥福を祈り奉りて、寛かに佛像、曼陀羅、經律、論疏、法具の類を整理し、勅准を得て入京するには及かじと考へしかば、乃ち筆を援いて二通の上表と、請來新譯經等の目錄一卷とを製し、大同元年十月廿二日付を以て、高階眞人遠成に附して奉進したりしなり。

其の表は、命を留學の末に銜んで長安に到り、師依を歷訪して惠果阿闍梨に遇ひ、

師主をして三び受明灌頂に入り、阿闍梨位を受け、兩部の大法、諸尊の儞伽を學習し、一百餘部の金剛乘教、兩部大曼荼羅海會を請來見到す。波濤漢に沃ぎ風雨舶を漂はしたるも、鯨海を越えて聖境に平達せるは、陛下至德の力なり。陛下新に旋機に御するを以て新譯の經、海會の像、遠く海を過りて來る、聖に非ずんば誰か測らん。空蹤闕期の罪は死に當るも、難得の法を生て請來せるといふ上表と。藤原葛野麻呂に隨つて第一船に上り、福州に着岸したるより說き起して、惠果阿闍梨付法の次第を詳叙し、般若三藏梵夾附屬の順序に至り、無畏三藏が王位を捨たるも、代宗皇帝の北極を屈したるも、龍智和尙の八百にして老ざるも、崇惠禪師の邪を摧き傾くを支ふるも、法の不思議豈斯藏に過んやと結びて、六韻の銘を加へたる復命書との二なりき。

かくして空蹤は、遠成の歸路を博多の津に送ると同時に、三年已還手を携へて異境に遊び、同じ廡下に起臥して、儒佛趣きは殊なれども、意氣相投じて同胞の如く交りし、秀才逸勢とも、勢ひ袂を分たざるを得ざるに至りしなり。

情過れども順風は船を追へり。小春の空は遠くを照らせども、海の中道は互ひの心

の關となりて、青松の斷續する處、時に白帆の點綴するをば、彼れかとばかり眺むるの外なく、夫すら須臾にして影を喪ひ、茫々たる孤影を夕づく日に落して、いと寂しげに觀世音寺にぞ錫を回らしける。

貴き人も賤き人も、惣て死去りぬ。死去り死去つて、灰・塵となりぬ。歌堂舞閣は野狐の里となる。夢の如く泡の如し電影の實。君知るや否や。
君知るや否や。人此の如し、汝何ぞ長からん。

性靈集

第十七　葬生が門

府牒觀世音寺三綱
入唐廻來學問僧空海

右件僧、負笈遠藩、耽嗜大道、空往滿歸、優學可稱。今及歸朝、暫住彼寺、宜至于入京之日、准借住例、宛供養牒、件狀如前、故牒

大同二年四月廿九日　　正六位上行大典大村眞繼麻呂

大貳從四位下藤原朝臣藤嗣

筑紫觀世音寺は、齊明天皇の奉爲に天智天皇の御誓願に基きて剏創する所の、鎮西第一の佛刹なり。孝謙天皇の天平寶字五年、新たに戒壇を築きて、西國僧侶の授戒の聖地となし、即ち平城東大寺、下野藥師寺と丶もに、日本三戒壇と勅定せられてより、伽藍の美、龍象の盛、比ひなしとぞ傳へらる。一山四十九院、朝暮の梵唄兜率に

達して、殊勝なること言ふばかりなりければ、空海は請來の寶荷をこの一院に納めて心靜かに整へ理めんとはしたるなり。

請來したる所の密敎諸經は、夫の三十帖の冊子に合編したるものを除いて、新譯經一百四十二部、梵字眞言讚四十二部、論疏三十二部、三種總計二百十六部、四百六十一卷の浩翰にわたり、外に大悲胎藏大曼荼羅、大悲胎藏法曼荼羅、大悲胎藏三昧耶略曼荼羅、金剛界九會曼荼羅、金剛界八十尊大曼荼羅、金剛智阿闍梨眞影、善無畏三藏の影、大廣智阿闍梨の影、青龍惠果阿闍梨の影、一行禪師の影等都合十鋪、五鈷金剛杵、五鈷鈴、三昧耶杵、獨鈷金剛、羯磨金剛、五寶輪、金剛槌、金銅盤子、金花銀閼伽盞都合九箇十八口、並に阿闍梨附屬の佛舍利八十粒（內金色舍利一粒）、刻白檀佛菩薩金剛等の像一龕、白綵大曼荼羅尊四百四十七尊、白綵金剛界三昧耶曼荼羅尊一百二十尊、五寶三昧耶金剛一口、金銅鉢子一具二口、牙床子一口、白螺貝一口は、金剛智阿闍梨天竺より持ち來つて、不空三藏に轉付し、不空また惠果に附屬せる傳法の印信なり。尙ほ惠果阿闍梨附屬の健陀穀子の袈裟一領、碧瑠璃の供養鏡二口、琥珀の供

養鏡一口、白瑠璃の供養鏡一口、紺瑠璃の箸一具。般若三藏附屬の梵夾三口の巨額なれば、之れを調べ之れを整ふるに、意外の日子を費し、大同元年もいつしか暮れて、同じき二年の春も、二月の花を迎へたり。

時に大宰府の小貳に、田中朝臣八月麻呂といふ官人ありて、深く母上慈育の恩に感じ、告面の孝を竭さんとする所に、かりそめの疾病より空しく玉を朝の露に害ひしかば、火を呑み鴆毒を服する思ひして、偏へに心肝を摧きたりき。然るに漏鐘は矢の如く過ぎて、一周忌は忽ちに臨み來ぬ。いかで深く厚く極り罔き德に報せばやとて、心を丹精に凝らし、薰沐して千手千眼觀世音菩薩、四攝八供養摩訶薩埵等十三尊の影を圖繪し奉つり、恭しく妙法蓮華經八軸、般若心經二軸を書寫したりしが、空棄の新に唐より歸りて、觀世音寺に錫を留むると聞きて、自ら來りて圖し奉れる佛像を開眼し、寫し奉れる二部の經を展讀して、先妣が小祥忌を供養し給はんことを乞ひたるなり。孝子の懇念寔に棄て難きものあれば、空棄は快く承諾して、二月十一日を以て、荒庭を掃ひ清めさせてこゝに齋席を設け、香華を供して願文をさゝげ、懇ろに尊前に供養

し、勤行法の如く修し了りしかば、八月麻呂は感涙に咽びつゝ、勝福の疑ひなき事を悅びたり。

此時にして空棄はまた少願を發起せり。歸航の海上に於て發したる難風は、決して尋常のものにあらざりしが、幸ひにして難を免れ得たるは、明王の威力と、自身の誓願とに由るとはいへ、一つには載せ來れる微妙の聖典、神秘の圖繪、幽玄の寶器を加護する法の不思議たらずとせじ。思へばこの博多の津は、日本最初の密敎渡來の聖地なり。神變不可思議經王の東漸したる第一の靈跡なり。茲に伽藍一宇を建立して、密法東漸の記念を留め、經王の來際に傳はらんことを占ひなんとぞ念ひ發したるなり。

然るにこゝにいと不思議なるは、鴻臚館の記錄を見るに、大唐より一人の梵僧渡來して、此津に便船を待つ間、海邊に一宇の家を賃して、暫らく遠海の勞れを休らへたるよしを記し留めたり。其の年月より推し考ふるに、紛るべくもなき善無畏三藏なりければ、愈々此津の密敎に機緣淺からざることを信じて、其家の在りし處を索むるに方境もさまで狹しといふにあらねば、空棄は伽藍建立の念愈々牢く、彼の田中八月麻

呂に、密々この事を議りたりき。八月麻呂は深く空海を崇信する者なれば、一も二もなく此の議を讃して、專ら伽藍建立に力を用ひたるが、寔に密教流布の奇縁やありけん、思ひの外に造營の巧も進みたる折から、符觀世音寺の三綱に到りて、空海の淹流もいと如意になりけるなり。

頓て日本最初の密教道場は成りぬ。空海は落慶の日にあたりて、惠果阿闍梨より金剛智傳來として附囑せられたる佛舍利一粒、並に五寶獨鈷杵一口を納め、密教東漸最初の伽藍なれば、此れを東長密寺と號して、自らこゝに住み留り、請來の聖典寶具を整修する傍ら、眞言を說き拔濟を試みしに、行藏は法にあらずして、人を得ざれば藏れ、人を得れば行はるゝ道理に差はず、四衆遠近より集り來りて、頻りに醍醐味を嘗みんことを求め、觀世音寺の沙門も日毎に通ひ來たりて、偏に密機を窺はんことを請ひぬ。されども、上表して目錄を進獻したるのみにて、未だ廣宣流布の勅准を得たるにもあらねば、容易く秘帙を開くべきにあらず、唯だ眞言陀羅尼を說くのみに過ぎざりき。僧侶等はいと物足らぬ心地して、何とて此の上人の遠慮し給ふやらん、既に叙

山の寂澄大法師は、和氣太夫が高雄山に灌頂の壇を設け、南都七大寺の高僧に旨を傳へて、灌頂三摩耶を授けたる今日なるに、勅允なしとて躊躇し給ふやうやある。上人が得度の師主大安寺の勤操和上の如きも、現に入灌頂の一人にて在するぞかしなど、喞語がましく論らふ輩もありけり。

かゝりし程に觀世音寺の三綱に對して、太政官の符は下りぬ。即ち入唐學法僧空海をして、遠かに請來の經具を隨身して入京せしむべしとの宣旨にてぞありし。空海も今は猶豫すべきにあらねば、特信者たる大宰少貳田中朝臣八月麻呂を招きて、懇ろに後事を委ね、一向に東長密寺をして、長へに法燈を揭げしめんことを賴み聞え、件の行李を宰領しつゝ、初めて博多の津を開帆して、上洛の行途には就きたるなり。

平安京を辭してより、既に四年を經たりき。今枕を都城に立てゝ見れば、長安の大都を見熟れたる眼にも、都の姿は際立ちて美しくなりぬ。さる中に、東寺西寺の伽藍朱雀の南北にありて、王都の鎭護に具はれども、寺觀の壯麗は所詮長安に及ぶべくもあらず、西明、慈恩、青龍、醴泉、興善の五大寺に比ぶべき名刹のなきのみにあら

で、自餘の寺院に肩を接すべきものさへもあらぬなりけり。唯だ獨り、是等の大寺に例ふるとも、過ればとて遜るまじきは、比叡山國昌寺にこそありけれ。尙ほ大唐の高僧名師に配して、卓然として之れを凌駕すべきものは、唯だ獨止觀和上、寰澄にこそありけれ。嗚呼斯の山にして斯の僧あり、以て我が朝の佛敎を語るべきなり。嗚呼比叡山！嗚呼寰澄師！

空雞は比叡の崇高に心を引き着けられつゝ、直ちに應天門を過ぎて、大內裡には參入してけり。蒼龍白虎の二樓より、太極殿の碧瓦丹楹に對すれば、太和殿の丹墀にも讓らずして、崇嚴なる光輝に滿ちぬ。空雞は進んで內裡に誘はれ、仁壽殿に於てして、今上天皇の內謁には入りたるなり。

天皇は遠く異朝に留學せる勞を慰め給へり。空雞は天恩の優渥なるを拜謝して、前に進獻せる目錄の如く、請來せる經律論疏、曼荼羅、影像、道具、梵夾の一切を獻じたり。天皇は和氣太夫弘世をして、請來の法文等、普く天下に流布すべき旨宣下せられ畢んぬ。實に是れ如來滅後一千七百五十六年にして、兩部の大敎創て日域に弘まれるなりけり。

復命は旣に畢りぬ。布敎は旣に允されぬ。空雞は無上の光榮と無二の滿足とを抱いて、欣然として退朝したりき。直ちに平城の古京に赴きて、勤操大德を訪はんかと思へりしが、京に入りて外舅を訪はざるは禮にあらずと思ひ回して、阿刀太夫大足を右京の舍に尋ねたるなり。然るに家は離ゝたる荒草に塞ざゝれて、徒らに狐兎の棲むに委かせ、園は茫々たる寒烟に蔽はれて、投足の地だに莫し。古き家の傾きたるとは異りて、家の構へ築土のかゝりなど、新らしきまゝに荒果たるは、一層物のあはれの勝るめり。

空雞は唯だ心目を駭かして、有爲轉變の速かなる人の世を、今更のやうに觀じたるなり。主なき舍を訪へばとて、其の効あるべくも思はれねば、人に就いて大足が所在を質したるも、この秋の騷動にて、何れへ行き給ひしや、其の行方までは誰も知らずといふ。愈心もとなきこと限りなければ、其の騷動のいかなる騷動なりしかを尋ぬるに、皆な堅く口を噤みて、それに答ふるを憚るものゝ如し。空雞はいやが上に胷安か

らずなりて、誰にか聞かんと思ひ煩らひしが、偶然心に思ひ當る事のありしかば、晝も霧けき外舅が廢宅を後にして、小一條の方に急ぎ行けり。

訪ひつるは藤原葛野麻呂が邸にてぞありし。葛野麻呂は歸朝以來御信任殊に厚く、今は式部卿を以て、東海道觀察使を兼ぬるに至れり。されども、空雄は同舟の友として、また道の師として、いと尊信する法師なりしかば、三位の高位にある身を忘れて、膝を交へて親しく語らひたるなり。

空雄が大足の所在を尋ぬるに方りて、葛野麻呂は天を仰いで深く嗟嘆しつゝ、口重たげに話り出たり。

『語らば君の非を訴くに似たり。語らねば道の師を謗るに似たり。語るもつらし、語らぬもつらし。されど、眞佛は夙に照覽ましますべし。人もあるべきに、師の如き權者を謗らんこと、來世の業も恐しからん、いでいで物語り參らすべし』

かく言ひつゝも語り出る所を聞くに、思はずも悚然として戰慄せらるゝ事のみなりけり。

伊豫親王は桓武天皇第五の宮に在しまして、御母は故の右大臣藤原是公が女、大納言雄友の妹、從三位藤原吉子なり。親王天資閑雅にして、殊に管絃に堪能に在しましかば、天皇深く愛させられ、平安奠都の後は、北野に山莊を營みて、こゝに親王を置かしめ給ひ、御獵の折々には、此の山莊に臨御なりて、供奉の臣下を置酒高會し給ふこと屢なりき。現に崩御の前つ年の秋の如きは、日昏れ燈火を呼びても、猶を還御仰出されざりしかば、親王は夜暗く道遠くして、還幸の御路たより惡かりなんと諫め申されしかど、天皇は御杯を納め給はず、

今朝能朝氣鳴豆布鹿能曾能聲乎聽嘉須婆行嘉之夜波更氣努止毛

と御製ありけるほどに、後の山に鹿の鳴きしかば、天皇御感斜ならず、群臣をして之れに唱和せさせ給ひ、龍顏勝れて麗はしく、夜を冐かして還御在せられけり。

當今（平城）御位に即かせ給ひて後は、中務卿を以て三品宮に在しましゝに、此秋の初つかたなりき。藤原宗成といへるもの、深く思ふ處ありて、親しく親王の御殿に出入したりけるを、師の外舅阿刀大足、進講の序を以て、宗成が如き小人を親昵し

たまほんは、御身を保ち給ふ上に妙ならず。當今登極日猶ほ淺く、天下の人心安からぬ折なれば、愼むが上にも愼みて、世の視聽を聳かせ給ふべからずと諫め申したり。然るに宗成はいかにして此の事を聞き出しけん、潛かに親王に對つて大足を讒したりければ、親王の御心較や動きて、遂に大足を遠ざけ給ひけり。大足は親王の御行末のいたく心にかゝるものから、今は是までなりとて、大納言雄友に親王の御上を賴み聞えて、飄然として平安を立ち出しまゝ、誰あつて其の之く所を知る者なし。

大足既に斥けられぬ。宗成は時をうつさず、親王に不軌を勸め參らせたり。雄友の大納言は大足が言に少からず不安を感て、親王邸の近狀を探り試むるに、大足斥けられて、宗成非望を逞しうするよし聞えければ、大きに驚きて右大臣藤原内麻呂に内告したりき。此の事また逸くも親王に告げ參らする者ありしかば、急ぎ參内し給ひて、宗成の己に謀叛を勸めける狀を、逐一に直奏し給ひぬ。當今に於せられても、事なか容易ならざれば、左衛府に命じて宗成を捕へしめ、謀叛の次第を檢問せられしに、宗成は詭辯を設けて實を覆ひ、宗成いかで不軌を圖り申すべき、親王こそ先朝の

恩寵に狃れさせ給ひて、窺竊の念を蓄へ給ひ、宗成をこそ憑み聞えさせ給ひしなれと誣告したりき。天皇一什を聽せ給ひ、赫として震怒せさせられ、宗成を左衛府に繫く繫がせ、即時詔して伊豫親王の親王を削り、左近衛中將安倍足雄、左兵衛督巨勢足をして、兵百四十人を率ゐて親王の山莊を圍み、執らへて川原寺に幽し參らせ、尋で御母藤原夫人吉子の方をも同じ寺に徙し、固く一室に幽閉して、飲食をも通じ給はざりけり。安倍足雄、こは其の罪を惡んで其の人を惡まずの本文に差へり。さまでに御憤り思召さば、盡ぞ有司に付して刑罰は正し給はざる。飲食を斷たせ給ふは、人君の德に非ずと苦諫し參らせしが、忽ち旨に忤らひて、果は何人も爭ひ諫むる者なかりしかば、御悼しくも親王御母子には、人の情に露命を繫ぐことの、いと恃なきを思召されてや、いかにして得給ひけん、九月の上旬に毒を仰いで、相擁いて薨じ給へり。無殘なりける御最期にこそ。

さて宗成は誅に服し、雄友までも坐せられて伊豫の國に配流せられ、南家（武智麻呂の裔の藤原氏）は悉く祟られて、中納言乙叡の三位は官を解かれ、緣に繫る秋篠安

人の朝臣も、造西大寺長官には左遷せられぬ。

空猟は聞く事毎に驚きと憂ひとに、強く胸を打たれたり。さるにても、外舅太夫が諫めを遺して身退き、深く韜を晦ましたることの清く勇ましきを、切てもの慰めとはするなりき。

葛野麻呂は滂沱たる涙涕を拭ひて、重ねて聲を低くして語り續けぬ。

『この事は宗成、良繼、百川が甥（式家、即ち宇合の孫）として、先朝以來深き由緒を有しながら、却つて内麻呂（北家、即ち房前の孫）雄友の下風に立ち、世に出る時なきを憤りて、南家の出たる親王により、事を擧げんとしたるまでなれど、先帝の御愛子たる親王につらく當りしには、尙ほ別の仔細こそあれ』

そをいかにといふに、當今の尙侍に藤原藥子といふ者あり、贈左大臣種繼の女、參議仲成の妹なるが、初め中納言藤原縄主に適きて、三男二女を生みぬ。其の長女當今の東宮にて在します頃、選を以て宮中に入りしに、藥子亦東宮坊の宣旨となりて皇太子に近侍し、いつしか娘を排けて自ら之れに代り、深く皇太子の御寵に與りたりき。

柏原天皇この事を知し召して、藥子が淫にして義に悖るを憎ませ給ひ、斷然宮中より驅逐して、嚴に皇太子を戒飭させ給ひたりしが、當今九五に登らせ給ふや、更に徵して尙侍とし給ひ、恩遇並びなしと聞えつるなり。藥子深く先帝を恨み參らせしかば、適〻この變あるに方りて、主上の聰明を昏ましたてまつり、先帝の御愛子と、寵妃とを虐げまゐらせて、宿仇を報ひし事、是れ其の裏面の消息なるべし。

葛野麻呂は少しく含羞みながら、

『かくいふ麻呂は北家の裔ながら、藥子とは姻戚の關係あり、唯だ毒に中られざらんことをのみ、旦暮に祈り居るなり』

かく說來つて葛野麻呂は長大息を禁じ得ざりき。空猟も勢力に渴する人の妄執に就て、さすがに太息を吐きたるなり。

第十八　三寶の聲

想ひ出多き新都の時雨を遁れ出でゝ、落葉に埋まる古京の路を踏み分けつゝ、經王の笈を背負ひ、一笠一杖に身を任せて、空龕は先づ平城の冬を訪ひ、勤操大德の住まります御院を索めて、遂に大安寺の中院に笈を下したるなり。

先づ第一に出で迎へたるものは、懷かしき智泉なりき。彼は空龕が別れに臨んで、懇ろに下したる訓誡を體して、此年十六歳にして登壇受戒したれば、今は道行增進し四儀殊勝に、六和冥合せる沙門とはなりたり。空龕は手を把つて悅びたり。智泉も膝に伏して喜ひたり。勤操大德は肉身の情味の、かばかり溫かなるを見て、欣然として笑の溢るゝを覺えず、只願智泉が自行化他の智德の高きことを稱えて、其の喜悅に油を灌ぎたるなり。

中一日を隔てゝ、室生の賢慧は山を下つて訪ひ來れり。空龕が密敎の悉地を受了して歸り、今また天皇に謁して布敎の勅允を得たりと聞き、手を拍ち足を踏んで太く慶

び、少衲は約の如く、今より師の法弟となりて、密敎を學修せん爲めに來れるなり。この兄弟とゝもに、今日を師資の初めとすべしとて、勤操大德を介してこゝに師弟の契りを結びたりき。然るにまた一人の新弟子を得たり、そは池上氏の愛子にて、眞紹といふ十歳の童子なり。自ら俗を厭つて道を慕ひ、智識を索めて身を託さんとする折から、大安寺の空龕上人は、近ごろ入唐して新らしき妙敎を請來したりと聞き、是れぞ我が履を取るべき大師なりとて、意を定めて其の門に投じ來りしなり。空龕も一見して其の器の凡ならざるを知り、快よく弟子に加へて、暫らく勤操大德に付して、其の侍童たらしめぬ。

十一月八日、久米寺の大塔に於て、賢慧智泉を隨へて、初めて大毗盧遮那經の疏を開講したり。是れ實に我が邦に於て此の經の第一聲なりしかば、南都諸寺の龍象いづれも法席に參じて、謹んで傾聽したりしが、中にも大安寺の泰基和尙の徒弟實慧は、一聞にして唯識の壺奧深からず、密敎の玄機神妙なることを悟りし、即坐に名刺を獻げて其の資たることを誓ひたりき。この實慧は同じ讃岐の佐伯が一族にして、書博士

佐伯直葛野酒麻呂が儒學の教子なりしが、長ずるに及んで佛理を慕ひ、出家して大安の泰基に唯識の蘊奥を授かりぬ。今茲二十二歳とぞ聞えし。

乃ち空海は暫らく山住して、密教流傳の法を講せんがため、實慧、賢慧、智泉を拉へて、和泉の國に赴き、剃髮得度の緣を求めて、槇尾山寺には住する事とせり。此の事朝廷に聞えしかば、翌大同三年六月十九日を以て、太政官符を賜ひ、課役を免除すべき旨を達せられぬ。空海時に年三十五なりき。

この山住山修の間に於て、空海は學び得たる教、行、法に就いて、順序を正しくすると同時に、いかにして之れを本土に布かば、最も多く利濟の功を擧げ得べきや、最も博く廣益を與へ得べきやに就いて、深く思ひを凝らしたるなり。印度に在りては印度に應すべき傳教の道あれども、夫れを以て直ちに震旦を度せんことは不可能なり。されば、入唐の梵僧は、皆な漢文を學修し、周孔の道を究めてのちに於て、梵經を翻譯し、之れを基として漢僧に授くるを常とす。本朝と漢土とは、同じ文字の國なれば、教典翻譯の必要は見ざれども、立國の創めに於て既に國體を異にするのみならず、本

邦には本邦の大道ありて、祖先の神に由つて行はれ來れるなり。厩戸皇子の法輪を轉じ給ひてより、行基菩薩に至つて本地垂迹の說を唱へ、初めて印度の佛法をして、日本の佛教たらしめんと試みしが、其後の僧は、徒らに高遠なる法の理義に拘みて、更に融和の途を知らず、法相、三論、倶舍、成實、華嚴、律の宗義を確執し、機に處し變に通ずることを爲ざれば、法は僧の法にして、國家の爲の法にあらず、四衆の爲めの法にあらざるものとはなりぬ。斯の如くんば、唯だ如來の本旨に差ふのみならで、教法の根本を誤るものなり、宜なる哉、教法は徒らに高妙幽玄の理義に趨りて、衆生は空しく轉迷開悟の機緣に遠かり、壯嚴愈耀々として、妄想愈無邊なることや。彼等は此の衆生盡ずんば吾願も亦盡じの大悲本誓に住することなく、攝化利生の導師たる務めを思はず、我獨高しとして、巧に諸法唯心を談じ、八不中道を說き、一心三觀一念三千の妙理を語り、十玄緣起法界無礙の極旨を唱ふれども、轉じて鎭護國家、天下泰平、息災安穩、疾疫息除を祈禱することを思はず、恬然として出世間の聖境に住するを誇るに似たり。畢竟是れ法教の罪にあらずして、法教を殺す僧の罪なり。深く

蹈み遠く虚からずんばあるべからず。

空海は此の如く切りに思ひを致すと丶もに、愈〳〵密教の人生に適切なるを深く感せり。即事而眞は眞言の極意にして、即身成佛は密教の玄底なり。以ふに佛法は彼の法師等の說くが如く、決して遙かなるものに非ず、吾人ともに心中にあつて、即ち近し。されば眞如も外に非ずして、身を棄て何くんか求むべき。迷悟我れに在れば、發心だにすれば即ち到る、明暗他に非ざれば、信修するときは忽ちに證す。一意に來世の佛果をのみ說くが故に、人生は朝の露の如く脆く、夕の電の如く儚なきものとは悲觀するに至れども、若夫れ生佛不二の理を觀ずれば、自身即ち無邊の法性身にして、生を愛し、世を樂しむこそ、正しく天地の惠みを聚めて、生を國土に得たる人間の要務なる事を覺るに至るべけれ。群生をして暗瞑の苦境を脫し、此の本覺の光明に住せしむるぞ、即ち法師の如來より任せられたる本務ならずや。世を離れて法なく、人を離れて佛なし。嗟乎、吾が法海は無邊無際なり。思ひのま丶に掉さ丶んには、世を濟ひ民を利すること、決して勢少にはあらざるべしと、思ひ決むるには至りしなり。

山居は遂に三年にわたりぬ。實慧、賢慧、智泉等が學德も、驚くばかり上達せり。

空海この蘊蓄を傾けて、大いに法海に乘出さんには、南都の諸高僧に聲息を通ずればとて、能く爲すあるに足る者ありとも思はれず。如かず北嶺の大法師寂澄と手を握つて、顯密二門相駢んで前まんにはと思ひ定めたり。

寂澄和上とは同舟入唐の因緣なきにあらねども、浪速の津を發する時より、寂澄は第三船に上り、空海は第一船にありしかば、既に相會ふ機を失ひしに、松浦の田浦を船出してよりは、風濤に隔てられて着岸の地を殊にし、寂澄は直ちに天台山に入りて長安に來らざりしかば、互ひに一堂に相會したるは、田浦に在りし時の一夕に過ぎずして、竟には雲樹千里を隔つるの思ひをなしにき。この意を以て智泉に旨を銜め、彼を使僧として遙々比叡山に登らしめ、法の爲めに敬意を表して、恭しく左の名刺を投じたるなり。

奉上　僧空棄

大同四年二月三日

右爲天台傳燈奉向比叡大禪師謹捧名刺敬白

是時、主上の御惱とかくに勝れさせ給はず、さしも勵精して御親躬萬機を決裁し給ひける政務にも、今は已びなく遠かり給ふには至りぬ。されば在位僅かに五年にして、遂に四月朔日を以て御位を皇太弟賀美野親王に禪り給ひにき。夫の尙侍藥子はいと口惜しきことに思ひて、强て諫め奉つりしかども、寢膳だも安からぬ御惱なれば、奈何ともするよしなかりけり。新帝はかゝる際の御受禪なりければ、特に先帝を尊ばせ給ひ、太上天皇の號を奉つりて厚く仕へさせ給ひ、尙ほ太上天皇第三の皇子高丘親王を立てゝ皇太子とし給ひ、中納言藤原葛野麻呂を攝んでゝ、皇太子傅には兼任せしめられたり。

新帝には中務卿宮大伴親王を始め、夥多の皇弟在しましけれども、先朝の御威を軫念在らせられ、御幼年の高丘親王を儲貳に立て給ひしかば、口善惡なき京童は、東宮を號して蹲踞太子とは綽稱し奉つりぬ。心あらん者は、不祥の言を傳ふるものかなとて、竊かに眉を顰めあへりとぞ聞えける。

かゝる世の態を知るよしもなき山住の空棄は、聊か祈念する事ありしかば、一夏を靈山に送らんものをとて、實慧と智泉とを伴ひて槇尾を出で、山を北東に越えながら、河內國石川郡平石の嘉字下山に抵り着きぬ。この嶺は葛城山の山脈の西北に流れたる一角にして、翠松天を蓋ひ靑苔地を被ふ淨境なり。土の民に問へば、北の方に大和河內兩國の通路ありて、山かくの如く茂りたれば、下自から蔭を成すより、俗に蔭路と呼びけるを、いつの程にか向下路に訛り、轉じて嘉字下とも神下ともいひ來れるなり。此の山葛城の支脈なれば、役の優婆塞この奧にも住みたる事ありて、今も其の古にし跡を留めたりと物語りぬ。實にさもありぬべき地勢の奇異、山氣の幽玄、空棄もこゝに夏籠の草堂を結ばんことを思ひ立ちたり。

草堂結構の間、空霽は獨り山を下りて、磯長なる上宮太子の聖廟に參籠し、密敎廣布の祈願を凝らして、一期を彼の靈窟に過し、還りて心靜かに草堂に修練したりき。

一夕懇念の心を澄して徹宵修禪したりしに、既に四更も過ぎて、曉明にも程遠からじと覺しき頃、この山の木隱れに怪しき鳥の啼く音聞えたり。聞き熟れぬ鳥なれば、耳を欹てゝ尙ほ能く聽き定むるに、其の聲佛、法、僧を一聲に唱ふるものに似たりき。惟ふに此の山の靈氣に感じて、かゝる靈禽を生じたるならんかしと、感興の連りに催すに委せて、座右の筆を執りながら、忽ち七言絕句一首を記し留めたり。

閑林獨坐草堂曉。　三寶之聲聞二一鳥一。　一鳥有レ聲人有レ心。　聲心雲水俱了了。

同じこの曉の事なりき。智泉は憶なくも故郷の事を想ひ浮べて、寢苦しき枕に呻吟してありしが、身は是れ佛門に歸依して、既に世間の俗緣を離れたるものを、かゝる心にて何かはせん。善く諸の情根を接して、五欲を厭離するを、出家の第一義とはするなり、斷じて雜念を芟つて淸淨心に住すべしと思ひつゝ、連りに噪がるゝ胷を壓へては、眞言を誦してありける程に、氣倦み神勞れて、我にもあらで睡眠たりけり。

幾ばくならずして惡夢に驚かされて覺めたり。身は盜汗に浸されて、動悸は宛然に跳るが如く、慈親の面影眼前に散見として、心の噪がしさ前にも倍せり。强て眞言を誦して目を合すれば、また覺ること前の如し。かゝる事再三に及んでは、心甚だ切にして、少しも自ら持すること能はずなりぬ。智泉は殆ど無意識に跳ね起きて、手早く法衣を一着したり。戶を開けて天の氣色を仰ぎしに、雞明には尙ほ少時間のあるにや、星の光り麗はしく輝くを見たり。

何思ひけん頭陀袋を首にかけて、草鞋に足を拵へつゝ、檜笠を手に提げたるが、空霽師に謁して暇を乞ふこともせず、實慧を覺して仔細を語ることもせず、其のまゝ颯然として嘉宇下山を降り去んぬ。

飢うれば食を乞ひ、勞るれば山野に臥して、日ならずして浪速の津に出たり。折しも渡海の便船ありしかば、これに助けられて讃岐へ着するとゝもに、屛風ヶ浦なる佐伯氏をも訪はずして、急ぎ瀧の宮の家に歸り着きたり。家人の訝り驚くにも關はらず、足を洗ひて直ちに奧へ駈け入りしに、果せるかな、父公は重き病ひの蓐に臥し

て、枕頭に看護り給ふ母上の面にも、憂ひの色は深く刻まれたるなり。

『父上、智泉の只今歸りて候ふぞ、御心地いかに在し給ふ』

膝行り寄つて顏さし出せば、父は其の法師姿をつく〴〵と見て、且は欣び、且は悲み、無手とばかりに手を握つて引寄せぬ。

『噫、吾が命は旦夕に迫れるぞかし、儞の今日歸り來れるは、是れ恩愛の感せしむる所ならずや、生あるうちに儞の道相を見ることを得て、吾が願ひ已に足んぬ。吾が精靈は儞に憑つて、永に道心を守るべきにこそ』

言訖つて、一息苦しげに吐きたるが、一心に智泉の面を諦視めたる眼は、いつしか白く掩ひ被さりて、晏然として覺めぬ睡りに就きたるなりけり。

智泉は幾と絕えなんばかりに慟哭しぬ。緣あつて偶歸省しながらも、唯だ一日の看護をもする事か、僅かに語を交しゝのみにて、却つて永き訣れを促がしたるを、悔み泣くより外なかりき。

『察し參らするに、父公にも儞に一目會ひ給はんとて、此れまでは存らへ在しけんを、不思議にも儞の歸り來たりしかば、御佛の迎ひを受け給ひけんやうに、今はとて逝き給ひしにぞあらんずらん。さらば儞は善き知識の引導なり。悲むべき事かは。速かに御經を奉りて、後生の福ひを薦め參らせよ』

母上の語を盡して勵まし給ふに、始めて僅かに涙を斂めて、是れより追善供養の營みに他念なく、一百日を喪に籠りて、一心に法事を薰修したりしなり。

既に其の日も滿じたれば、今は師の許に歸らばやとて、母公にも辭し奉つり、佐伯氏の人々にも別れを告げて、再び河内に立ち歸りしに、師は草堂を神の護るに委ねつつ、槇尾山寺に歸錫ありし後なりしかば、殘炎秋暑の苦熱を冒して、山より山を槇尾には歸り參りぬ。

時に太政官より符を和泉國司に下して、空雜をして入京せしめらる。

太政官符　和泉國司

僧空雜

右被二右大臣宣一偈請三件僧一令レ住二京都一者。國宣三承知一依レ宣入レ京。

符到奉行。

春宮亮從五位下兼守右少辨　小野朝臣峯守
從七位下守右少史勳七等　佐忌守豐長

大同四年己丑七月十六日

佛は忍辱の鎧と、精進の甲を着て、持戒の馬に乘り、定の弓と、慧の箭とを以て、外に魔王の軍を摧き、內に煩惱の賊を滅ぼす。……大日經開題

第十九　雅づかひ

召命天より降りぬ。今は久しく山林に住るべからず。空棄はやがて橫尾山を下りて、直ちに平安京には上り參りぬ。隨ふものは實慧と智泉と眞紹とにして、賢慧法師は辭して平城京に赴き、東大寺に入つて、夫の善無畏三藏阿闍梨の古院を温ね、暫らくこに秘密の經論を修ひる事とはしたりき。

入京の日に於て、空棄は治部省にまで出頭したりしに、內殿に於て謁見を賜ふべしとの恩命を拜して、初めて今上天皇の龍顏に咫尺し奉つる事を得たり。天皇は柏原天皇の皇子あまた在します中にも、御幼少より聰明の聞え隱れなく、好みて書を讀ませ給ひ、やゝ長せさせ給ふに及びては、博く經史を御覽せさせられ、善く詩文に長じさせ給ひ、特に草隸の書體を巧みに遊ばさるゝこと、左右能く及ぶものなしと聞ゆ。其の神氣岳立して人君の量を蓄はへさせ給ふと稱して、尙ほ立坊の宣下すら在しまさぬ程より、百官はこの皇子に望みをかけ奉つりたるなり。空棄は方外に遊ぶ緇徒なれ

ども、心に君國を忘るゝ者にあらねば、かゝる天資の英敏なる后に在しますよしは、詳らかに聞き知り居たれば、今闕下に伏して戰る〳〵天威を拜し奉つるにも、謹んで聖明の玉容を仰ぎ奉りしなり。

天皇も夙に空海が緇林の巨材たるに止まらず、文章に於ても、輸墨に於ても、大唐の朝野を震撼したりし俊傑なることを知し給へり。今膝行拜跪して朝見に入る風丰を御覽ぜらるゝに、飾なき唐風の香の法衣を一着して、手に菩提子の念珠を持ちたるのみ、一點の裝ひなき間に、燃るが如き信念と、玉の如き温情とを藏して、深沈なる態度、懷重なる擧措、自から節度に適ふの高風、實に法海の眞龍にこそと、深くも感在せられけり。

一天萬乘の至尊と、山林練行の一沙門と、人界の位は霄壤萬里の差あれども、叢林には貴賤の高下を問はずして、其の意氣は自から相投合したり。天皇は一二例外の詔旨を下し賜ひて、天意のある所を仄かし給ひ、空海は恭しく君德を頌し奉つりて、衷心の赤誠を披瀝したり。かくして內謁見の式は畢りて、空海は光榮を荷ふて退出し、

直ちに和氣氏の同胞が請ずるまゝに、洛の西なる葛野郡高雄山寺に入住したりき。

高雄山寺は、去じ延曆十八年に薨去せる和氣朝臣清麻呂が建立しゝ山院にして、寂澄和上の天台を立宗するや、國子祭酒和氣弘世、河內守眞綱等、和上を屈請して天台の妙旨を講ぜしめたる靈地なり。又、近くは延曆廿四年の冬、寂澄和上勅を奉じて灌頂の壇を築き、南都の名僧道證、修圓、勤操、正能、延秀、廣圓等に、灌頂三摩耶を行ひたる、本朝最初の灌頂道場なり。寂澄和上は、空海が眼中に唯だ一つありて二つとなき緇林の畏友なり、法海の盟朋なり。今其の舊跡に來つて新たに法幢を建つる空海が心には、果して如何なる感をか作しけん。

この山に來りて未だ幾ばくならざるに、憶なくも橘逸勢の訪問を受けたり。同舟同學の友なれば、固より揖禮を修むるの要もなく、談は直ちに要點に入れり。

其の言ふ所に據れば、いかにして雲井の奥深く聞えけん、橘夫人(嘉智子)の智泉が年少くして修行の殊勝なるよしを知し召し、私かに御祈願の筋ありて、賴み思召すべき御氣色なりとの事なりき。空海は少き沙門の得たる行力もなければ、いと覺束な

しと辭ひたれども、逸勢はつや〳〵肯なう氣色なく、是非に智泉に命せよとぞ逼りける。空蟬ゟ智泉が學識と智德との尋常ならぬを知れば、强ては辭ふ事なく、乃て智泉を招きて逸勢に紹介せたりき。

逸勢は膝を進めて、一段と聲を低うしつ。

『知り給ふ如く夫人は吾が爲に異母の妹なり。今は三位夫人に陞りて、御寵とても淺からざれば、吾とても常に天恩には感泣するなり。さりながら、內親王を擧げまゐらせしのみにて、未だ一柱の皇子をも擧げ奉つらねば、あはれ親王一柱をとぞ思ふなる。こは女子の情として、さもあるべき事ならずや』

空蟬が首肯くを見て、逸勢は更に次を語り續けぬ。

『皇子を授かり奉つらんには、所詮神佛の冥護に埃ねばならじと、爰に大誓願を發して、相樂郡當尾の岩船といふ處に一院を建立し給ひぬ。此に智識の僧を請じて、皇子受胎の祈念を凝らさんとするに、適〻智泉師の法德を聞召され、吾と大德との俗契淺からぬを知し召せば、かくは密事の使命を負はせられしなり』

空蟬は委曲を聽き果て、智泉の方を顧みるに、智泉は連りに頭を掉りて、其の任にあらじとの意を示したり。

『眞言の法を修すれば、さる奇瑞をも招くべしとはいへ、智泉は尙ほ二十一歲の若輩なり。一部の灌頂にも入らざるに、何とてかゝる大事の勤まるべきや。こは古京の大德に命せらるべきにこそ』

空蟬が語を半だも聽かず、逸勢は双手を擧げて押止めぬ。

『言ひ給ふな。七大寺の僧徒に、誰か藤原氏の緣を引かざる者やある。橘夫人にかゝる願ありと聞かんには、逆まに調伏の法をこそ行ふらめ。吾は氏族の爲にのみ言ふにはあらず、天下國家の爲なるは、いざ起ち給へ、智泉師よ、起ち給へ』

逸勢は强て請ふて已まざるに、空蟬も多少心に恃む所ありけん、遂に俱に智泉を說いて、彼の新院を慶せしむる事としたりき。

この山院は、加茂の里の南、笠置山の西なる起伏間なき丘陵の內にありて、中之川を隔てゝ大和國に境する處に建立せられぬ。こは井出の大臣以來、橘氏に屬する地な

ると、僻遠にして藤原氏の猜疑を避け得べきとの用心とぞ聞えし。智泉はこゝに住してより、念持佛を奉じて勤行してありしに、何處よりともなく飄忽として墜ち來れるものあり。智泉は手に取りて披き見るに、是れなん一軸の法華曼陀羅なり。怪しみて直ちに高雄に將ち往き、師空海に示したりしが、斯の經は是れ普賢菩薩の護し給ふ所たれば、須らく靈木を用ひて菩薩の尊像を造り奉つり、そを本尊として祈り奉つらんには、必らず其の驗あるべしとぞ敎へられける。

山院に歸りてのちも、其の靈材を得べき方法に思ひを繫いで、日夜祈念したりしに、一夜の夢に奇異の暗示を得たりしかば、曉を冒して三里ばかりの南方に尋ね行きたり。このあたりは一體の深林なるに、中に一株の老樹ありて、そよ吹く風にも異香を落し來れば、果して之れ有りけりと思ひて、人を雇ひて伐り採せたるが、其の木理麗はしくして、思ひ做しにか、寶威德上王佛の六字を自然に現はしゝと讀まれたり。智泉は大いに驚きて、欣然として靈木を奉じ、急ぎ山院には歸り來にけり。

學法に暇なき身は、固より彫像の技を修むる間を有せざれど、智泉は性來書を好み

て、大安寺に在りし頃、勤操大德の許しを得て、平城の古京に名ある佛畫師に就き、深く丹青の要訣を究めたりしかば、今彫り奉つらんとする普賢菩薩の尊像を圖し奉つり、之に基きて刀を下さんとは思ひ立ちたり。斯くして木取をなさんとする處に、此の鄰村なる佛師椿井の雙法眼といふ者、この事を傳へ聞きて來り、强て工を助けたしといふに、智泉は悅んで之れを諾したりき。

かゝりしかば、彫工思ひ外に捗取りて、今は半工を卒りける時、突如として智泉が母の來訪に接しぬ。智泉ば且つ驚き且つ喜び、見れば已に飾りを落して、淨き比丘尼とはなり給へり。何故に讃岐の故郷を後にして、遙る遠き山寺へは來給ひしぞと尋ね參らするに、妾もかく姿を變へて、智緣尼と法號を呼ばるゝ上は、同じ御佛の徒弟なり。雲水に行住する身には、故郷もなく家もなし。這たびは佐伯の兩親より、今茲九歲になれる幼弟の、父母を辭して京に上り、兄の阿闍梨に師事せまほしと望むに任せ、これを都に伴ひてよとの頼みを受け、高雄山寺に伴ひ來りしなり。阿闍梨の言はるゝには、智泉は今岩船山寺に在りて、造佛の最中なれば、行きて工を補け給へとあ

りしに、急ぎこゝへは訪ひ來つるなり。いで此の尼にも刀を借し給へとて、智泉を助けて彫像に從事し、左右の耳朶を彫り奉つりしが、刀痕極めて妙なりしかば、法眼も只願に歎異したりしなり。

相儀も今は全く成りぬ。智泉は自ら高雄に抵りて、空海に開眼を請ひたり。空海は悅んで之れを諾ひぬ。逸勢も竊かに夫人の內意を受けて、夥多の施物を携へて法筵に列なりぬ。開眼供養は斯の如く莊嚴に修せられぬ。智泉はこの尊像を山院の本尊佛として、嘉智子夫人のために皇子を授けさせ給へと、咒願に誠實を盡したりけり。

智緣尼は大法養の滯りなく了れるを見て、深く智泉の爲めに慶びたるが、是れより祈念する事ありと稱して、一室に坐禪しながら、堅く穀食を斷ちて、觀心すること一七日に逮びたりき。是時靜思の眼を開きて、空海と智泉とを招き寄せ、徐ろに永訣を叙しぬ。

『幸ひに兩師の在すれば、妾の得脫を憑み參らすべし。特に空海阿闍梨に賴み聞ゆべきは、妾熟々泉子を相るに、或ひは夭折の哀しみを留めやせんと恐るゝなり。親の

子に先つは順なれば、徒らに存らへて逆さま事を見んよりはとて、かくは死を決めたるにこそ。あはれ阿闍梨よ、妾に代りて泉子を戒めてたび給へ。のう智泉よ、廣大無邊の佛德を布かんとならば、身を健かに保ち給へ』

言ひ訖つて、一わたり吾が弟と吾が子とを、嬉しげに見てありしが、頓て其の眼を固く閉ぢて、空海が誠心からなる慰めをも、智泉が斷腸の謝言をも、弗に耳に入れずして、合掌の手を緩めず、決定の瞼を開らかず、坐禪の牀安らかに、彌陀の來迎を待ち奉つること一晝夜にして、怡然として化に從ひたりき。

智泉の慟哭はいと切めて哀れなりけり。彼父の葬りを行ひて未だ半載ならざるに、今また母を哭すの不幸に遭ひ、悲痛心に餘りて幾と身を傷らんばかりなり。空海も孝子の哀悼さもありなんと憐れむものから、かくて身を傷らんには、慈母の悲愛は其の効なきに至るべきを以て、故らに智泉に警策を與へつゝ、相與に厚く其の冥福を修して、懇ろに葬儀をぞ營みける。

智泉は後に此の山院を請うて、智緣尼の冥福を薦めんために、岩船山報恩院となし、

空雅はまた大和國平群郡鳴川の邊に塔を樹て、永く菩提を弔ひしなり。

智泉は哀しみを轉じて更に御修法の壇に上れり。空雅は再び高雄山寺に歸り來りしに、今春名書を捧げたる叡岳の寂澄大法師よりは、上足弟子經珍を使僧として慇懃を通じ來り、併せて眞言、華嚴、梵字悉曇等の經論十二部五十三卷の借覽を要められたり。空雅は法門の爲めに篤志なる大法師の誠意を喜みして、少しも惜む所なく貸し與へたりき。

尋でまた宮中より大舍人山背豐繼を遣はされ、麗はしき御屏風一雙を齎らして、これに世說の中より特に翫味すべき章句を拔いて、揮毫して進獻すべき旨を宣せられたるなり。豐繼の語る所を聞くに、主上には双びなき御筆の妙を得させ給へるに由りて、書を伺ひ給ふ御心深く在しまし、常に太宰府に內勅して、晉唐の墨蹟を徵させ給へり。近き頃橘太夫逸勢に仰せて文選を書しめ給ひしかば、今また阿闍梨の名蹟を徵さるゝなりといへり。

勅命は嚴かに拜辭する事を許されざりしかば、謹んで命を奉じて、其翌る朝、席を

淨め筆硯を洗ひ、龍管を染めて揮灑し、左の表とともに謹しんで進獻したりき。是れ乃て空雅の書の、主上の聖鑒を賜はりし濫觴にぞある。

世說書屏風兩帖

右伏て今月三日大舍人山背豐繼が奉宣の進止を奉はるに、空雅をして世說の屏風兩帖を書かしむ。空雅は緇林の朽枝法海の爛屍なり。但鉢錫を持して以て乞を行し、林藪に吟じて觀に住することを解れり。寧ろ現鬼墨池の才、跳龍返鶴の藝あらんや。豈圖らんや、燕石魚目謬つて天簡に當り、天命逭れ難く敢て珍繪を汙さんとは。既に人を驚かすの拔劍なくして、遐つて目を穢すの死地を繞へり、之れを慄き之れを慄れて心魂惘然たり。謹んで豐繼に附して敢て以て奉進す。謹んで進る。

第二十　即身成佛

大同五年三月十五日、天皇の召命を奉じて參内したりけるに、直ちに清涼殿の御座所へは召させ給ひけり。空海は廣縁の末に拜伏して、恭しく天機を候ひ奉つりける に、龍顏殊に麗はしく在しまし、平城の太上天皇、讓位せさせ給ひてのちも、玉體尙ほ勝れさせ給はざるにより、先つ年弓削の法師が僧綱を統ぶるを慍りて、一族の中よりかゝる法師を出しゝを愧ぢ、韜を伯耆の山中に晦ましたる玄賓僧都の事を思召させられ、柏原の朝にも鉢囊を負ひて參内し、立どころに御惱平癒あらせられたる例もあれば、僧都を請じて清風を御覽せられんには、或ひは聖心和らぎて、玉體の平生に復らせ給ふ事もやとの叡慮を以て、優詔を下して延召し給ひしかども、僧都は深く京洛の風を厭へるにや、

外津國廼水草清之緯支蘖岐京乃字知波棲萬努佐滿奈理

と一首の歌を奉つりて、詔に應せざるのみならず、更に遁れて備中の湯川寺に潛みたりと聞えぬ、いかにせば彼の僧都を起しめ得べきかとの御下問を拜したるなり。

玄賓僧都の高風は、此の一首の歌に徵しても知るに難からず。其の浮華の名利を惡み、三界の火宅を厭ひて、深く鷲峰薬嶽の山住を愛し、懸羅細草を衣となし、荆葉杉皮を茵となし、曉風朝月に情塵を洗つて、一杯の澗水に命を支え、松石清流に法身を託して、一枝の時花に眞を證せんとするものなり。吾と其の志を同じうせざれども、菩提の妙果を摘まんとする心は、則ち一つなり。輪王と雖も起すべからずと思惟するまゝに、空海はこの意を以て奏問に及びたり。

折から東大寺の道雄法師を始め、興福、大安の大德等、天機伺ひとして治部省にまで出頭したりけるを、特に内殿に召して謁見を賜りたり。期せずして密敎の阿闍梨空海を首として、華嚴、法相、三論の龍象、殿上に集へりし事とて、主上にも此上なき機と思し給ひしかば、同じ如來の敎法にして、顯密二門に分るゝさへあるに、七宗八宗の敎流を派ちて、各法幢を建て、互に法鼓を鼓ち、更に相諍り相下らざる所以に就いて、各宗各派の玄底を御諮問あらせられたり。こゝに集ひし龍象のうちにも、寂

澄の一乘止觀を提げて天台の一宗を立し、今また空海の四種曼荼羅を將來して、眞言密教を唱道するを慨し、機がなあらば自家の宗議を彰らかにして、彼等の新宗門を折伏せんと思へるものありし事とて、目前その法敵ともいふべき密教護持の空海を置きて、かゝる得難き勅問を下されしに感奮し、此の好機逸すべからずと信ずるの餘り、法論の態度を以て、滔々と吾が奉ずる宗義こそ佛法の眞趣なれと論ずるものを生ずるに至り、圖らずも論戰に火華を散らす勢ひとはなりしなり。

興福寺の大德は盛んに法相の宗義を論じて、其の有、空、中の三時教を立て、一代の聖教を判ずるが故に、五部の大論、十支論の源極は、總て吾が宗に盡せり。內に三界唯心の眞理を證し、外に無緣の大悲を起し、有情を度して涅槃の彼岸に到らしむるもの、是れ如來立教の本旨にして、吾が宗の秘奧なりと說きぬ。

大安寺の大德は、三論の教旨の中道を得たる所以を論じ、吾が宗門の教義は、こゝに空無師のあるありて、既に壺底を盡さるれば、別に說くの要なけれども、菩薩藏、聲聞藏の二藏を立て一切の教を攝め、不生、不滅、不斷、不常、不一、不異、不去、

不來の觀法を以て、無所得中道の眞理を覺るが故に、大乘の妙極此れにありて他にあらずと說き、例を引き證を擧げて、有空の眞俗二諦を論述したりき。

東大の道雄も勢ひ默すること能はず、徐ろに華嚴の妙諦を說き出しぬ。

『甚深なる麼唱、峻高なる蘇迷、廣大なる虛空、久遠なる芥石よりも、近くして見難きは我が心なり。細にして空に遍きは我が佛なり。我が佛は思議し難し、我が心は廣くして大なり。聲緣の識も識らず。薩陲の智も知らず。奇哉の奇、絕中の絕なるは、只其れ自心の佛なる歟。自心に迷ふが故に六道の波皷動し、心原を悟るが故に一大の水澄淸なり。澄淸の水影萬像を落し、一心の佛諸法を鑒知す。衆生此の理に迷ひ、輪轉絕すること能はず。蒼生太だ狂醉して、自心を覺ること能はず。大覺の慈父其の歸路を指し給ふ』

此れを開口として滔々數百言、眞如法界不守自性隨緣の義を明かにし、色即ち是れ空なり、衆生即ち涅槃なる所以を論じ、五教、十玄、六相、華嚴三昧の至要を說き、大乘の至極は、華嚴にあらずして何ぞと論斷したり。其の辯は巧妙にして、其の義は

幽玄なり。一向華嚴の教理の深遠高尚なるに感ずれども、眞如生滅二門の釋に至りては、日中に天日を仰ぐが如く、五彩の耀光赫々たるに眩めきて、更に眞光を見ざるの感を生じたり。

空海に穩和忍辱を以て體とし心としたれば、かゝる際に於て密藏の秘鍵を開示せんことを、好ましからず思ひたるなり。されど、殿上の公卿より切に請ひ申さるゝのみならず、やむごとなき勅問を辭ひ奉つるべき語を知らねば、唯だ僅に其の一二を說く事とせり。

『佛に三身あり、教は則ち二種なり。應化の開說を名けて顯教と申し、法佛の談話を密藏とは申して候ふ。顯教とは、他受用應化身の隨機の說にして、密藏とは、自受用法性佛の內證智の境を說き給ふなり。是れ病ひに應じて藥を授け、根機萬差なれば針灸も千殊なる如來說法の妙とこそ稱ふべけれ。若し夫れ顯密二教の差別淺深と、成佛の遲速勝劣とを知らんとならば、金剛頂發菩提心論を御覽せらるべし。云く、諸佛菩薩昔因地に在して是の心を發し、勝義行願三摩地を戒と爲す。乃し成佛に至るまで、時として暫くも忘るゝことなし。惟し眞言法の中にのみ即身成佛するが故に、是れ三摩地の法を說くと云々。是の三摩地の法とは、自性法身所說の秘密眞言三摩地門是れなり』

說いてこゝに至るや、三論法相の二大德は、手を擧げて語を遮りつゝ、

『諸經論の中に皆三劫成佛と說く。今即身成佛の義を建立する、何の憑據かある？』

『金剛頂經に、此の三昧を修する者は、現に佛菩提を證すと云へり。又、若し衆生あつて此の教に遇つて晝夜四時に精進して修すれば、現世に歡喜地を證得し、後の十六生に正覺を成すと說けり。又、若し能く此の勝義に依つて修すれば、現世に無上覺を成することを得ると說けり。されば、佛も六大を說いて、法界體性と爲し給ふ。六大は人體の根元にして、地、水、火、風、空、識をいふなり。此の六大法界體性所成の身は、氣障無碍にして常住して變せず、頌して六大無碍常瑜伽といふ。六大をして悉地に住せしむるには、四曼を離るべからず。四曼とは、大曼荼羅、三昧耶曼荼羅、

法曼荼羅、羯摩曼荼羅の四種曼荼羅にして、印契には、大智印、三昧耶智印、法智印、羯摩智印といふなり。此の威儀を具して三密加持すれば、則ち法身眞如觀に入るを得べし。三密とは、身、語、心の三密にして、即ち若し眞言行人あつて、此の義を觀察し、手に印契を作し、口に眞言を誦し、心に三摩地に住すれば、三密相應して加持するが故に、早く大悉地を得、法界體性智毗盧遮那佛の虛空法界身を成ずるなり。加持とは、如來の大悲と衆生の信心とを表はす義にして、佛日の影衆生の心水に現ずるを加といひ、行者の心水能く佛日を感ずるを持と名づく」

夫れより經を引き論を採り、横に即身を說き、縱に成佛を釋きて娓々數萬言、辯は五智の淨水の滔々として流るゝが如く、義は圓明の心鏡高く法界の頂きに懸るが如し。寂かに一切を照破する處、今は一人の破折する聲とてもなかりけり。

東大の道雄は深く其の說に耳を傾けて、佛身即ち是れ衆生の身、衆生の身即ち是れ佛身なりと說ける、不同にして同、不異にして異なる妙趣を味ひて、其の敎理の現世的なるを歎稱するなりき。

主上はこの即身成佛義を聞食され、叡感淺からず見えさせ給ひしが、頓てまた親しく勅問を下されたり。

『空海が說く所、義は誠に玄極なりと雖も、朕は其の證を見んことを望む』

此の大詔を承はりて、各宗の龍象は始めて夢の覺めたる如く、空海が果していかに勅答すべきかを、息を凝らして待ち設けぬ。

空海は謹んで聖旨を拜受せり。

『臣弟子不肖の身を以て、至尊の御前に三摩地觀に入らんこと、天威を顯し奉つるに似たれども、大命は輕からず、三密は不可思議なり。いで〳〵法の神秘を叡覽に供へ奉つりなん』

座を移して南面に趺坐したるが、霎時く袖の內に印を結び、目を瞑りて口に呪文を誦し、心に三摩地に住する程に、看る〳〵威容赫如として、面上一道の靈光を放ち、五體に陸離たる光明を輝かすかと疑はれぬ。忽ちにして菩提心金剛堅固の體を獲、忽ちにして灌頂地の福衆莊嚴の身を獲、忽ちにして佛の智慧身、忽ちにして佛の變

化身。遂に法界體性智咄盧遮那佛の虛空法界身を成じて、現下父母所生身を解脫し、超絕したる事を示したりき。

崇高なる相好、端嚴なる威儀、主上も靜かに御榻を離れさせ給へば、公卿は大床に拜伏し、龍象は念珠を繰みて頂禮するに、即時本座に復りたるを見れば、溫乎たる一個の僧空海なりき。入我我入の實證今は爭そふべくもあらず、東大の道雄の如きは、自身の同じ國同じ郡同じ姓に生れたるを得難き譽れとして、遂に師資の禮を執りて、親しく密敎を習ふには至りしなり。

是事ありしより已還、空海は深く主上の御歸依を忝けなうしたり。然るに、空海は高雄の山居を愛して、輕々しく山を降ることなく、專念に眞言道を修し居たり。道雄は常に東大寺より通ひ來て敎へを受るに、こゝにまた杲隣大德といへる學匠あり、何處の人、何姓の出なるを知らねども、久しく東大寺に掛錫して性相兩宗を精研し、其名四方に播く、都鄙推崇して細林の獅獅となしゝ者なるが、曾て堅慧坊によりて阿闍梨の高風を聞き、今また道雄によりて非凡の法德を知り、是れ我が師なりと稱して、

山に來りて弟子の禮を執るに至りぬ。其の夏臘は僅かに四年に過ぎざれども、齡を問へば四十を超ゆること四歲にして、空海阿闍梨に長すること方に八歲の兄なりき。

是歲、實慧は年紀長じて二十五歲になりぬ。學修する所大いに進みて、今は玄底を極むるに至りしかば、空海も速かに灌頂の壇に入らんことを命じ、初めて資の爲めに壇を立て、順次に兩部の灌頂に入らしめ、遂に五瓶を灑いで灌頂の職位を授けぬ。是れ空海歸朝の後、最初に行ひたる灌頂にして、實慧はこれより壇儀、印契、經軌の秘訣を盡すことを得て、日本最初入壇の弟子、第二の阿闍梨とぞ稱えられける。

眞言は不思議なり、即身に法如を證す。……心經秘鍵

第廿一　法の威德

秋も九月に入りぬ、曉の露漸く冷やかに、夕の風膚を冒かす頃となりて、右京左京の人心洶々として安からぬさまなりき。彼方に走せ此方に趨り、口々に言ひ罵るを聞くに、千代萬代の末かけて動ぎはせじと据ゑ給ひつる平安京の礎も、今は平城の古京に徙さるべしとて、驚き噪ぐにてぞありける。長岡京はかりそめの都なりしかども、平安京は、柏原天皇の末代の都とし給ひし聖地なるに、僅かに十七年にして、再び平城の古京に復されんこと、所詮桑平の兆とは思はれず、いかに成行く世の季にかと、都人は惑ひ歎きしなり。

兎角するほどに、正三位坂上田村麻呂、從四位下藤原冬嗣、同く紀田上を造宮使として、愈平城京を營まるべしと聞えしかば、平安京の紛擾は一方ならず、公家に於ても、今は不問に措くことを許さゞる事態となりぬ。

抑平城遷都の議は、いかにして起りしかといふに、是れなん太上天皇の寵幸し給

ふ尚侍藤原薬子が叛反なりける。太上天皇の御惱も諸所の御幸によりて御平癒あらせられ、去年より平城の古京に遷らせ給ひ、平城の宮御造營の間、故の右大臣大中臣清麻呂が邸に在しまし、攝津、伊賀、近江、播磨、紀伊、阿波六ヶ國の貢租を以て、造平城宮の料とし、二千五百の傭工を督して、專ら造宮を急がせられ、當今の太上天皇に奉じ給ふこと、いと厚く在しましゝかば、薬子は言ふ所として聽かれざるなく、夫の造長岡宮使の折、大伴佐伯の族に喪ばれたる父贈左大臣種繼に、太政大臣の贈官をさへ容れられ、己は正三位朝臣となり、兄右兵衛督仲成さへ常に寵眷を辱なうして一門の榮華譽ふるにものなかりき。

されども、薬子は尚侍としてのみ仕ふるを屑とせず、何とかして太上天皇を今一度重祚させ參らせ、己皇后宮となりて、威福を恣まゝにせまほしと思ひ立ちにしかば、兄仲成と謀りて、さま〳〵に太上天皇を動かし奉つり、既に御位を禪らせ給ひしにも拘はらず、平城より詔勅を發して、參議の職を復せられ、尋で平安京を停められ、平城京に復されんとて、造平城宮使をも任命せらるゝに至れり。正しく是れ重祚

の御催しとぞ聞えける。

平安京にて驚き噪ぎしは、全く是れが爲めなりき。高丘皇太子の傅たる藤原葛野麻呂は、かくと聞くより心連りに噪がれて、こは容易ならぬ世の亂階なるべきに、苦諫して叡慮を翻へし奉つらばやと、急ぎ平城の古京に赴きけるが、此の時は既に太上天皇重祚の御心動きて、諸司百官と宿衛の兵とを隨へ給ひ、今しも川口の道より東國に御幸在せらるべく、藥子と御輦を同じうしつゝ、出御の折からなりしかば、葛野麻呂は軏に縋りてはら〳〵と涙を流し、皇太子に御慈しみの在しまさんには、かゝる無謀の御企ては思し止まらせ給へ。東國を憑み思召されて、幾干の兵をか召させ給ふべくや。かくて京を攻め落し給ふまで、平安京にては手を束ねて待ち給はんや。遂げさせ給ふべき御望みありとも、事は正しく非望なり。況てや遂げさせ給はんこと思ひも由らぬに、御躬を苦しませ給ひ、皇太子を窘しめ給はん事、智者を待ずして明らかなるをやと、血を吐くばかりに諫め申したり。左馬頭藤原眞雄も、葛野麻呂に語を添へて、固く諫め進らしゝかど、藥子が冷かなる一笑の下に、更に納れさせ給ふべき御氣

色もなく、强て御進發在らせられぬ。實に是れ大同五年九月十一日の事なりけり。

主上は遷都の御催し紛れなく、中納言坂上田村麻呂すら既に造平城宮使に拜したりと知し召させられ、いと深く宸襟を惱せ給ひ、田村麻呂を大納言に進めて其の心を轉せしめ、其外左右衛府、近衛府に任官して、をさ〳〵麗に應じ給へり。然る處に、大外記外從五位下上毛野朝臣頴人、平城京より走せ歸りて、太上天皇出御の情報を奏しかば、素破とて田村麻呂をして文室綿麻呂を將て美濃より之れを邀へしめられ、一面は伊勢、美濃、近江三國の府に勅して關を固めしめ、人を遣はして右兵衛督仲成を捕らへて、之れを右兵衛府に繫がしめ、藥子の官位を解きて宮中より退け、仲成を佐渡權守に貶黜せられたり。

宣に云く。尙侍正三位藤原朝臣藥子は、掛まくも畏き柏原の朝廷の御時に、春宮坊の宣旨として仕ひ給ひき。然るに其人となりの善からぬ所を知し召して、退け給ひ去り給ひてき。さるものを百方に趁遂げて太上天皇に近き奉つる。今太上天皇の國を讓り給へる大なる慈しみ深き御志を知らずして、己が威權を擅になさ

んとして、御言にあらざる事を御言と云ひつゝ、褒貶を心に任せて曾て恐れ憚る所なし。此の如き惡事くさ〳〵あれども、太上天皇に親き仕へ奉るに依りて思ひ忍びつゝ御坐ます、然るに尙ほ飽足らずとして、二所の朝廷をも言ひ隔て、遂には大なる亂起るべし。また先の帝の萬代の宮と定め給へる平安京を棄給ひ、停め給ひてし平城の古京に遷さむと勸め奉りて天下を擾亂り、百姓を亡ふ。また其兄仲成、已が妹の善からぬ所をは敎へ正さずして、却て其勢ひを恃みて、虛詐事を以て先の帝の親王夫人を凌ぎ侮りて、家を棄て路に乘りて東西辛苦せしむ。此の如き罪惡數へ盡すべからず、理のまゝに勸へ給ひ罪なへ給ふべくあれども、思しやる所あるに依りて輕しめ給ひ宥し給ひて、藥子は位官を解きて宮の中より退け給ひ、仲成は佐渡の國權守に退ると宣り給ふ、天皇が詔旨を衆聞しめさへと宣る。

尙ほ此の宣旨を齎らして、桓武天皇の山陵にも奉告し、やがて左近衛將監紀朝臣淸成、右近衛將曹住吉朝臣豐嗣等を遣はし、仲成を禁所に射殺さしめ給ひたり。

太上天皇は藥子と丶もに、葛野麻呂等の諫めを卻けて、大和國添上郡越田村まで御進發在らせられしに、夥多の兵前途を遮り奉つると聞し給ひて、幾ど行かせ給ふ所さへも知し給はず、明る十二日に急ぎ駕を還して平城の宮に入らせ給ひ、御髮を剃ちて入道せさせ給ひしかば、藥子は事の成らざるを見て、毒を仰いで立どころに自殺を遂げ、さしもの亂も須臾にして治まるを得たり。

是れより前つ方の事なりき。主上には此の亂を甚く軫念あらせられ、かゝる折にこそ眞言秘密の神變不可思議を信じて、天下の大亂を靖んじ、實祚の長久を祈禱せしめなば、いかに利益あらんも知るべからずとの叡慮を以て、內々密使を遣して空海阿闍梨を高雄山寺より召させ給ひけり。

空海は何事とは知らざれども、密勅を畏みて、時を移さず山を出て參內したりける に、主上殊の外御喜びあらせられ、今朕が代となりて國家に亂れの出來んこと、誠に憂慮に思し召さる。殊に夫が爲め實祚を危うする事もあらば、いかにして皇祖皇宗に謝し奉つるべき。願はくは阿闍梨が不思議の法力に依つて、事を未然に鎭め、實祚を

長久に維持せんことを、深くも賴み思し召すよし、御親躬ら仰せ付けられけるなり。事態なか〳〵に容易ならず、捨て置く時には天下大亂の基ともなるべく思はれしかば、空龕は慇ひに辭讓謙退すべき時機にあらざる事を思ひて、言下に大命を拜受し奉つりたり。主上は阿闍梨の快諾を聞食されて、斜ならず宸襟を安んぜさせ給ひ、さらば、東寺に壇を築きて、疾く寰祚長久國家鎭護の懇念を凝すべき旨、即坐に宣旨を下されたるなり。

法の奇特を現はすためには、誠に願ふてもなき好時機に際會したりしなり。此の御祈禱にして成就せんか、密敎の光明は自から海内を照被して、濟世利民の宿願を立どころに遂げ得ること、宛然これを掌に指すが如けん。若し之れに反して一朝靈驗の現はれざらんか、神變加持經の威德は、永劫に地に墜るに至るべく、空龕阿闍梨の生命は、悠久に法界より葬らるゝに至るべきこと、鏡にかけて見るが如けん。平城の太上天皇がよしなき御謀叛は、曾に平安京の浮沈のみならで、吾が敎法の存廢の瀨戸とはなりにけり。

末資末弟の沙彌等は、傳へ聞くと等しくかゝる杞憂を抱きて、今にも乾坤轉覆の活地獄を現出するが如く慎れしが、この至大至切の際に臨んでも、空龕阿闍梨は只顧護持する敎法に信賴して、聊かも踏跙逡巡する色なく、泰然として御修法の準備を指揮する沈靜なる態度と、温乎たる相貌とは、大阿闍梨の心中既に十分の成算あるものゝ如く、最も人意を强からしむるものあり、實慧、堅慧、智泉、眞紹等の上足は、心に頓て來るべき榮光を望みつゝ、師に隨つて八條大路大宮の東寺には赴きたるなり。

東寺は桓武天皇の御願に依つて、去じ延曆十五年、新都鎭護の爲めに建立せられたる名刹にして、王城の坤に位せり。金堂を以て御修法の道場に宛てられたれば、空龕は先づ大行事、承事、驅使等の諸役を命じ、之を指揮して壇場を裝置せしめ、自ら之れが大阿闍梨として、息災護摩師を實慧に、增益護摩師を堅慧に、咒頭を智泉に五大尊供、十二天供、聖天供、神供、舍利守の諸役を夫々に命じて、嚴かに各種の壇を築かしめたり。

今その槩略を伺ふに、外陣の北の廊には、東北の角に向けて神供の壇を設け、外陣

東南角の出入口より、第三重の内陣に進めば、四方に白晒布の帳を垂れたる第二重の内陣ありて、先づ人の心をして清淨ならしむべし。第三重の内陣は、東北の一角を明屏風に劃つて、此處に聖天供の壇を建て、東の格子には南向きに十二天の尊像を掲げ列ね、一天毎に高卓を置きて之れに供物を奉つりぬ。南の格子には白木の案を列ねて、これに一帖の疊を一列に敷き、以て供僧衆の座となし、西南の一角には、北向に護摩壇を建き、禮盤脇案式の如く繕へたるが、其の火爐の圓形なるは、即ち息災の護摩壇なり。北西の一角にも亦、東向に方形の爐を有する護摩壇建かれたり。是れ即ち增益の護摩を修すべき壇なりとす。東南の一隅なる帳を褰げて第三重の内陣に入れば、正面北の帳には不動明王を、中央に東へ降三世明王、金剛夜叉明王、西へ軍荼利明王、大威德明王の順にて、五大尊の影像を掲げ列ね、一尊毎に高卓を置きて、火舍を中央に、其左右へ閼伽、塗香、華鬘、食供、燈明の順に配列し、食の前に瓶を安排して莊嚴せり。此の次に、金胎兩部の大壇は建かるゝなり。西の帳には金剛界九會大曼荼羅を掲けて、之れに對して建きたる大壇には、四橛に白布を繩ひて是れより五色

の線を引わたし、四隅に羯磨を置き、中央に中瓶、次に金輪を安置し、其前に鈴を中に獨鈷、五鈷、三鈷の金剛杵を排置し、四方には火舍を中心として、左右に閼伽、塗香、華鬘、色佛供、白佛供、色佛供、瓶の順序にて莊嚴し、禮盤の右の脇案には、金と打捧と、箱入の柄香爐とを備へ、左の脇案には、灑水、散杖、塗香と、据箱とを備へたり。之れと相對したる東側にも、大悲胎藏曼荼羅の大壇は築かれたり。其の莊嚴は凡て金剛界と同一なりき。

御修法は即夜を初夜として行はれたり。大阿闍梨空雙供僧を率ゐて堂に入り、進んで金剛曼荼羅の壇に登るや、舍利守は恭しく如意寶珠を捧げて、之を大壇の上に安置し奉つり、供僧全く着座し了れり。時に大阿闍梨鈴を把つて一振すれば、聖天供師は徐ろに座を立つて明屏風の内に入り、慇懃に花水供を修す。次に大阿闍梨は承事の捧ぐる表白文を披きて、謹嚴に壯重に之れを捧讀するに、吐音朗々伽藍の隅々にまで反響して、神明雲際に遙降し、菩薩壇上に出現して、詳らかに聞食すべくぞ思はれぬる。夫れより五悔、勸請五大願を普く供養し、三ケの金を鳴らせば、智泉は咒頭ど

して眞言を唱へ始め、供僧之れに和して同音に唱ふる聲、鬼神も爲めに感奮すべく、異香芬芳として薫じ、鈴聲鏘々として響き、諸天も爲めに靈驗あるべく、恭敬の心肺肝より湧き出づる時しもあれ、實慧は靜かに座を立つて、息災護摩の壇に登れば、堅慧も增益の壇に就き、五大尊供師、十二天供師、孰れも其處に立て、一齊に供養を行ふ。其の儀式の嚴肅なる、其の修法の悽愴なる、是れや密敎本來の面目にして、我が邦未だ曾て有らざる所なれば、其の光景は刻一刻に內裏へ奏上せらるゝなりき。

かくて護摩の世天段に入る時、承事は之れを神供師に通じたり。神供師は報を得ると丶もに、座を立つて、內陣を出で、外陣に設けたる神供壇に就て法を行へり。頓て護摩の火滅し、實慧、堅慧の本座に復する時、五大尊供、十二天供の兩師も順次に復座す。此の時大阿闍梨の一字の金は聞えぬ。智泉は嚴かに、一字金輪の咒を誦して、是れにて初夜の供養了り、大阿闍梨禮盤を下るを見て、舍利守は如意寶珠を持して之れに隨從し、別所に之れを奉安するなりけり。

次の日よりは、日中初夜の二座づゝ、之れを修し來りて、既に結願の初夜となりぬ。二座の護摩全く了りて、一字金輪の咒に移りたる時なりき。空海は火舍に燻らす塗香の烟の朦朧と立ち騰る處に、渾身の血を漲らして秘印を結び、一心に咒を誦しつつ、吾にもあらで香の烟の搖めきたゆたふ末に目を迚らするに、香烟は長く灣曲して、其處に人影の如き輪廓を繞せるを見得たるなり。奇しとばかり更に目を凝らして仰ぎ見るに、あら尊しや、八幡大菩薩の武內宿禰を具させ給ひて、香烟模糊たる間に、畏くも神影を出現せさせ給ひしなりき。

空海は思はずも身を振はせぬ。更に香を炷いて神影を禮拜しながら、心に深く御影を銘り着けし時、淸風來つて香烟を吹き拂ひ、神はかくして上らせ給ひてけり。

御修法結願と丶もに、空海は壇上遙降の神影を謹寫して、之れを携へて參內したりき。此れと同時に仲成は獄に斃されぬ。藥子は毒を仰いで自害しぬ。太上天皇は皇太子ともに御落飾在らせられぬ。さしも天下の大亂となるべかりつる御謀叛も、互ひの鋒に衂らずして、事全く熄むことを得たりしは、偏へに空海が祈禱の感應なりとて、叡感殊に深厚にわたらせ給ひたり。

傳に曰ふ、東寺鎮坐の八幡宮は、此の神影を靈木に刻み奉つりて、皇祚長久、天下安穩の鎮護のため、これを神體として祭祀せるものなりとや。

既にして亂は平らぎぬ。天皇は勅を下して、須らく流罪に行ふべしと雖も、朕が兄たるに依て之れを免除す、早く元の如く大和國に住ましむ可しと宣せられ、高岳親王の皇太子を廢し、皇弟中務卿大伴親王を立て皇太子とし、大同五年を改元して弘仁元年とし、かくて加美野天皇が御宇は、動ぎなき礎の定まりたるなり。

天皇深く空海を德とし給ふより、擢でゝ東大寺の別當に補されしが、空海は官職に意なきを以て、依然として高雄の禪關を閉し、請ふて國家の爲めに仁王經の大法を修しなどしつゝ、深く法力の修養にのみ努めたりしなり。

第廿二　入木の道

東寺に於る神壇の修法は、空海阿闍梨の法德をして中外に顯揚せしめ、眞言秘密の教風をして朝野に宣傳せしむるに、最大偉覺の靈驗を著したりしなり。再來已還歸依の道俗踵を接して、密教の宗義漸く天下を靡かすに至り、皇家の恩寵將に他宗を凌がんとするの光榮に浴せり。されど、阿闍梨は超然として四衆渴仰の外に立ち、餘妨を排けて仁王の大法を修したるより、深く高雄の山陰に隱棲して、更に院外に出ることなく、東大寺の寺務を執るにさへ、僅々の日子を限りて、急行往復するに過ぎざりき。矧んや、蓮帳錦茵に意なき身は、帝王數〻優詔を下して、召して道風を覽はさんとすれども、固く禪關を閉して、絕えて白雲を出んとせず、幾ど一身を獻げて法を講じ、弟子を養ふの外、一の望みだもなきもの丶如くなりしなり。

主上は深く憧憬の御感に勝へさせ給はず、小内記大伴をして空海の唐より齎らし來りし劉希夷集を書寫せんことを命じ給へり。阿闍梨もさすがに文雅の命は拒むによし

なく、乃ち命を奉じて集四卷を謹寫し、猶ほ蔡邕の曾て門下の史の聖帝を以て字を作るを見て創めしより、大唐にては往〻其の體を用ふる者ある飛白の書（散隸とも）を試みて之れを献じ、別に王昌齡詩格一卷、褚遂良書貞元英傑六言の詩三卷をも寫して、實慧を使者として進献したりき。其後、德宗皇帝眞蹟一卷、歐陽詢眞蹟一首、張誼眞蹟一卷、大王（羲之）諸舍帖一首、不空幷に岸和尙碑文、徐賓郎寶林寺の詩一卷、釋令起が八分の書一帖、謂之行草、鳥獸の飛白各一卷を献じて丹誠を表したりしかば、叡慮聊か慰むよしなきにあらざりしかど、其の筆迹を御覽せらるゝに就けても、慕しきは阿闍梨が高風にぞあると思召されつ。遂に有司に命じて、宣を下して强て空海を して山を出るの餘義なきに至らしめ給へり。

太政官符　僧空海　治部省

右檢二案内一〇太政官去十月廿七日、下二彼省符一偈。件僧住二山城國高雄山寺一而其處不便。省宜三承知令レ住二同國乙訓寺。者。今被二右大臣宣一〇偈。令下別二當彼寺一永預二修造事一者。省宜二承知依レ宣行レ之。寮宣二承知依レ件施行。

弘仁二年十一月九日

符は既に下りぬ。阿闍梨は今は坐禪の房を開らかざるを得ず。乃ち杲隣と實慧とに山寺の留守を託して自らは東大寺に赴き。南院の工事を董し、寺務を處理してのち、明る弘仁三年正月を以て、件の乙訓寺には入住したりしなり。

この寺は、故の長岡の京の西、今里といふ處にありて、聖德皇太子の開基し給ふ淨刹、推古天皇の勅願寺なり。近く崇道天皇を幽し奉つりてのちは、寺域自から荒廢したれば、かくてぞ阿闍梨を移し住ましめて、修造の事に預らしめよとは宣せられるなり。空海は命を拜してより、直ちに修造の箇所を檢して、其の事に當りしかば、日ならずして輪奐の美前の日に倍し、寺觀の規模面目を一新して、洛西の一大寺とはなりてけり。

主上のかく空海を崇信し給ふには、東寺御祈禱の立どころに靈驗ありし外、猶ほ壓

へ難き叡感の發動に因るなり。橘夫人嘉智子は、父清友は未だ顯はれざるに歿し、兄逸勢は官位ともに尙ほ高からざれども、御寵勝れて深く在しましゝに、三年前の冬皇子一柱この腹に降誕あらせられしかば、三千の粉黛顏色なく、天幸は一向嘉智子夫人と、この若宮の御上に集りたり。夫人はいと畏き事に覺えて、正良親王（後に仁明天皇）の御健やかに育し立せ給ふにつけても、普賢菩薩の冥助こそ難有かりけれと、偏へに彼の菩薩を信心してありしを、主上訝かしみて其の所以を勅問あり、夫人も今は包むべき事にもあらねば、いかで吾が腹に一柱の皇子をがなと願ふ心の切なりしを、逸勢のそれと推して、竊かに談合の上、高雄の阿闍梨に歎き聞えたり。阿闍梨も實祚長久の爲なればとありて、弟子智泉をして當の尾の山院に住ましめ、靈木を以て普賢菩薩の尊像を彫み奉つり、こを本尊として懇念を凝らしゝかば、菩薩感應ましまして、遂に宿願成就せしめられ、この皇子を授け給ひしなりとぞ奏問に及びける。主上も菩薩の德の炳然なるを知し召すと共に、智泉といふ若僧の法力の侮り難きをも叡感在らせられ、弟子にすらかゝる名僧を有する其の師空海は、決して人の胤にはあ

らざるべしとぞ崇信在せられけるなり。

正良親王の御愛らしく御成人まします程、主上の御寵はこの皇子ここの夫人とに專らになりぬ。この皇子この夫人に御寵の高まる程、阿闍梨とその弟子との非凡なる法德を深く崇めさせ給ひぬ。かくて數々空海を延いて、篤く信じ思召す大御心を、阿闍梨の心に彫り着けまほしく思ほし召して、幾たびとなく內使は乙訓寺に賜はりつれども、兩寺に別當たる身は、寺務を視るに閑なきが上に、二院の修造に日も亦足らざるの故を以て、固く命を辭しまつりしが、互ひに落慶の式も果しゝかば、今はとて遂に召しに應じて參內するに至りしなり。

主上は御感斜ならず、淸涼殿に召して謁を賜ひぬ。殿上には東宮大伴親王在せり。東宮太夫閑院參議冬嗣祗候せり。皇弟にして今人臣の列に在す左衞門督良岑朝臣安世侍せり。玉座の此方には山科大納言園人も勤仕したり。遙かの末には橘太夫逸勢、小野大內記美材も侍りて、主上も公卿もいとうち釋けて見え給ひ、玉座の下にはくさぐさの墨蹟、拓本の類、卷に、帖に、いと衆に散亂されてあり。中には過る日寫して

奉つりたるものさへも雜れるを認めたりき。

宣旨とてはなくて、玉音は晉唐の書によりて發せられたり。東宮も斯の道には堪能に在しまし、良岑朝臣また能書の聞え高く、園人大納言、冬嗣參議又詩に文に書に達せざるなく、逸勢と美材とは臨池の爲に才能の蔽はれたる名家にぞある。申すも長けれども、主上は文學に於て列聖に超えさせ給ふのみならず、宸翰の超絶に至つては、殆ど本朝無二と稱せられ給ふ。されば、敎行の高邁にして、修法の神變に於ては、深く空海に歸依し給へども、墨池の妙技に至つては、をさ〳〵此の僧に讓るべしとは思召さゞりしなり。素より深く好ませ給ふ藝能なれば、漢、魏、六朝の碑板より、晉、唐の劇蹟に至るまで。序ある毎に彼の國より徵させ給ひて、御鑑識に於ても誰れ及ぶべき者なく、實に希代の名筆にて在します。今視させ給ふ所の書に對しても、主上の御甄別いつも正皓に中りて、唐人の間に交はつてさへ、輕々しく下らざりし逸勢すら、常に一歩を後れて、主上に先を讓り奉つるの已むなきに至れり。

主上は園人の奉つる一卷を採らせ給ひて、之れを阿闍梨に視させ給ふ。

『公は唐朝に於ても五筆和尚の名を得たる能書なれば、定めてこの書を鑑するは易かりなん。抑〳〵誰どか鑑する？』

阿闍梨は膝行り進んで、視させ給ふ卷を拜受し、恭しく繙きて一見したるが、事の奇異に驚きて、思はずも首尾に眼を走らせたり。

其の遽だしき擧動には、明らかに駭目驚心の歎美を現はしたるにぞ、祗候の公卿は申すも更なり、皇太子にも空海がいかに之れを鑑すらんとて、いと樂しみて待ち受け給ひつ。別て主上には、此の鑑定によりて、入木道に於る空海が鼎の輕重を定めんと思召し給へば、そゞろに御膝の前むを覺えさせ給はず、

『唐にてもかばかりの名蹟は、其例多かるべしとも思ほへず、晉人としては紙の質較や新らし。公はいかに鑑しやらん』

重ねて問はせ給ふ御唇には、微かながらも御笑みをさへ漏し給へり。

空海は謹んで卷を收めて、恭しく還し奉つりしまゝ、何事をも奏上せずして、退いて故の座に就きたるなり。

主上は更に御手に繙かせ給ひて、いと飽で眺めさせ給ひしが、

『垂露の點、懸針の畫、甚だ歎美するに堪えたれども、惜むらくは無名氏なるを』

とて、深く御目に其の卷に落させ給ひき。

餘りに劇賞せさせ給ふに、空海は少しく紅顏みて伏し居たるが、恐る〳〵面を擡げて、

『御戯れとは存じ候へども、古今の御賞美は却つて深く愧ぢ入りて候ふ』

『否とよ、空海。かばかりの名蹟に名の無きを恨みて、逸勢に諮ぬれども、彼も知らずといふ。此の上は公ならでは誰か鑑せんと思召し、此の程より參朝の折を待ちにしなり』

『畏けれども、陛下には誠に其の筆者を知し給はん叡慮に在しまし候ふにや』

『さればとよ、空海』

『然らんには何どて奉答を辭ひ申すべき。是は臣僧の長安青龍寺に在りし時、書く所の筆ずさみにて候ふなり』

『いかに此の書は公が墨蹟とや』

『いかにして天覽には入りにけん、誠に恐懼の至りに候ふかし』

主上は再び書を御覽じて、叡慮太だ懌ばせ給はぬげに拜されけり。東宮を御始め御前に侍ふ公卿も、聲を飲み口を噤みて控ゆれば、殿上殿下寂として人なきが如く、微風にそよぐ漢竹吳竹の葉ずれさへも、荒海の御障子に濤たち騷ぐかと疑はるめり。

主上は重ねて阿闍梨を御覽じて、

『是書公の作る所ならば、疑ふべくもあらざるべし。去りながら、何を以て公の書たるを證すべきにや』

『恐れながら、軸の尾を解かせて御覽せさせ候らへ。そが縫合せの處に、自から臣僧の落款こそ候はめ』

主上は御手づから軸を脱させ給ひて、紙中と裝潢との間を解き放ち給ふに裝潢の絹の剝るゝに隨つて、

貞元元年某月於二長安西明寺一日本學法沙門空海書

の款字は、遺子なく顯はれ出でたるなりき。

主上は赧然として龍顏を染めさせ給ひ、人君として、須臾にても世外の聖人を疑ひし事を耻ぢ思されたるなり。殿上の人々は、今更ながら阿闍梨の筆蹟に精妙なるを歎稱して、少時はどよみを打ちたりけり。

主上重ねて御下問に及びぬ。

『此の書を見れば、朕が如きは遠く及ばざる所にこそ。さるにても、今日の書風といかに斯くは絶異たるやらん、問はさほしさよ』

空雟は少しく席を改めて奏問しぬ。

『書は其の地の宜しき所に從ふて、其の勢ひを異にすべし。唐國は四百餘州の大國にして山河の姿も亦隨つて悠々たり。されば、唐に在りては此の如く書かざるべからず。本朝は四面海を環らし、島は八洲、國は六十餘州、其の書の勢ひも亦富にかれの如くなるべし。臣僧の書に對する愚見は、略しかくなん候ふ』

主上は深く聖心折れて、始めて書に於ても此の阿闍梨には及び難くやに思召しけん、殊の外天顏も和らぎて見えさせ給ひ、尙ほ筆によりても書體の變ずべきよしを諮ねさせ給ひき。

『そは誠に叡慮の如くにて候ふ。本朝には羊毫、兎毫を以て、雀頭に結ひたる筆のみに候へば、字に肉多くして骨は自から裹まれ候はん。彼國にては專ら狸毫を用ひて、長鋒に作りたる筆あり。其の製も精しくして、大小あり、長短あり、强、柔、齊、尖いづれも其用を殊にし、眞書、行書、草書、八分、小書、寫書、踊書、隔書の式、各別に備はりて候ふ。臣僧少しく製筆の法をも學び得て歸り候ふ程に、いつかは献納仕つるべき心得にて、陛下の御爲には、筆生坂井清川に、東宮の御爲には、筆生槻本小泉に敎え授けて、良工を選んで謹製中にて候へば、聖愛に入るや否やを知らず候へども、不日にして進獻仕つらばやとこそ存じ候へ』

『阿闍梨に於ては、筆道の如き瑣々たる末技にこそおはすべきに、書法に精通し給ふのみならず、製筆製墨の末までも究め給ふ事、唯だ驚くの外は候はず。我等も好んで墨書を弄ぶ一人にて候ふが、庶幾はくは阿闍梨の指道を得て、自ら樂しむの境ひ

に到らばやと存じて候ふ』

かく言ふは良岑安世なりき。空海は兄帝にも並ばるべき安世が筆跡を稱へて、さて逸勢を顧みたり。

『橘太夫が書れたる加茂の齋院の御願文を御覽ぜらるべし、行書の秘訣悉く備りて、張旭の鋭鋒、柳宗元の骨肉、實に本朝には無二の寶簡とこそ存ぜらるれ』

逸勢はいつもの關はりなき調子にて、

『そは大德が言ひ損じなるべし。有智子内親王が天來の御名文をこそ、本朝無二とは稱ふべけれ。書は文の臣ならずや』

呵々としてうち笑ふに、主上、東宮を御始め、一同興じて笑ひ崩れたりき。

> 飛禽もまた恩と義とを識り、猛虎もなほ惠と仁とを知れり。……性靈集

第廿三　二星の會

滿園の柑橘は枝もたわゝに果を結び、其の果熟して黃金の色を照らし、累々として青葉を掩ふ所、既に八分の霜氣を看るべし。初冬將に盡きなんとして、僅に四日を剩したる廿七日の夕なりき。乙訓寺の本坊の一室に、爐を隔て相對したるは、今東瀛の佛敎界に日月と光を爭ふ、顯密二敎の大威力なりとす。即ち一は一乘止觀の座主、妙法蓮華經の護持者、天台圓頓の高祖、叡山の寂澄和上にして、一は三密四曼の阿闍梨大毗盧遮那經の傳燈師、眞言秘密の八祖、雄嶽の空海大德なり。

久濶は既に叙し了りぬ。款情は方に緘を發きぬ。新佛敎の二大棟梁が眉宇の間には、無私の淸笑の湛ゆるを見るなり。

寂澄和尙は薦められたる一盞の茶に、渴きたる咽喉を濕して、香ばしき氣を吹きぬ。

『こは珍らし、茶の味を覺えてより、既に幾歲にかなりけん。當に忘れんとして、圖らずも甘露の惠みに値ひけるものかな。久しき歲月を香味ともに變ぜずして、善く

も貯へ給ひけるよ』

『是れとても今は殘り少になりつるかし。彼地にて初めて味ひたる時、既に我が國にも傳へんものをと、心を籠めて栽培の法より、煎茶に製する順序まで、大凡は習ひ得て候ひしも、歸朝のゝちは法務に逐はれて、種子を播くに遑なく、齋らしたる製茶すら、多くは不用に屬して候ひき』

『さるにても、阿闍梨は多能多藝にて在するよ。法弟は在唐僅に九ヶ月にして、天台の玄底を叩くのみならず、順曉阿闍梨に善無畏相承の密軌を享け、また翛然禪師に南宗の禪を聽きたれば、習ふ所多くして得る所却つて少きに似たり。今日に及んで悔うる所は、密教の造詣の邃からざりし事にこそ』

和尚は廣す所なくして自己を告白しぬ。此の澹きこそ水の如きには、阿闍梨も只顧に推服を禁ぜざりき。されども、最澄が各宗を包括して、之れを顯密兩部の天台に打成せんとするには、いかにしても贊辭を呈するの勇氣を有せざりき。空蟹とても固より唐の密教をそのまゝ、廣布せんとにはあらず、能うべき限り我が國體と同化せしめ、

古來の歴史を堙滅せず、傳來の民情を破壞せず、渾然たる新密教を建設せんことに腐心し、夫れが爲めには、一たび聖德皇太子に由つて試みられ、更に行基菩薩に由つて紹述せられたる本地垂跡、即ち神佛一體の說に基きて、神道者流と手を握り、兩部習合を絶叫するをも辭せざるの決心を有したりき。併ながら空蟹は南都七大寺の大德とも爭ひたることなきが如く、最澄に對しても別に論爭すべき意志を有たぬば、こゝに自說を主張することはせざりしなり。

『貧道常に思ふに、貧道の和尚に於る、膠漆の交りは松柏と與に凋まず、乳水の契りは芝蘭と將に香しかるべく、共に多寶の座を分つて釋尊の法を弘めんに、何事か成らざるべき。さりながら、顯教一乘は、公にあらずんば傳らず。秘密の佛藏は唯だ貧道の誓ふ所、彼此法を守つて互ひに境ひを侵さゞらんには、天下の事なぞか難からん。公は何とか思ひ給ふぞ』

和尚はこの一語に太く心を衝動かされけん、夥多たび點頭きてさて言ひぬ。

『兩家の傳方其の境ひを正さんことは、詢に貴論の如くなり。されど、今の世の人

を心より敎へんは甚だ難く、度するには自から法あるべし。但だ遮那宗と天台とは、融通疏宗する所も亦同じければ、彼此志を同うして俱に竟めんとは思ふなり。先にも申すが如く、法弟の學びたる密敎は、龍猛相承のものにあらねば、自から變則なるべし。願ふは阿闍梨大悲の心を起して、當來の因を結ばせ給へ』

『さては貧道に就いて、再び灌頂の壇に入らんとは望み給ふよな』

『然なり、阿闍梨よ。是れ最澄自らの利益にあらず、四衆請益の爲めぞかし』

『なりながら、和尙は是れ山門の座主、內供奉十禪師の國師には在さずや』

『實に法弟は阿闍梨に長ずること八歲、阿闍梨に先つて供奉の員に列なりたり。されど、法弟は世に大法あるを知つて、師資に長幼あるを知らず。阿闍梨にも室山の堅慧、東大の杲隣の如き、年長の弟子を敎へ給ふにあらずや。敢て傾瀉を惜み給ふ勿れ』

敎法のために忠實なること、最澄和尙の如きは多く匹儔あらざるべし。空海は殿上にこそ出入すれ、今尙ほ一介の凡僧にして、唯だ東大乙訓の別當たるに過ざるなり。

さるを、自ら屈して師資の禮を執り、曾て自ら傳へたる五智の寶水に浴せんとは希がふなり。

『權者の胸懷は虛空の如し。己を虛うして津梁を求めんとし給ふものを、空海何とて瀉瓶の勞を厭ふべき』

阿闍梨も遂に快よく諾なひたり。和尙は歡喜に勝へざるもゝ如く、恭しく阿闍梨を一拜しぬ。

『慇懃なる敎誨を賜ふのみかな、素望を納れて灌頂に入らしめ給はんこと、深く感謝する所にて候ふ。さては、何日より其の準備へ仕まつるべうもや』

『貧道も近きにこゝの別當を辭して、山に歸らんとこそ思ひ候へ。兩部ともに今年のうちに付法を了し候ふは何如』

『そは願ふてもなき幸ひなり。さらば、阿闍梨に先ちて彼の山へ登るべく、今より東嶺に還りて、月の內に調度を備へ申すべし』

『既に一たび三昧耶に入り給へば、二部の尊像、四部の曼荼羅は知らせ給ふらん。

さりながら我が眞言の像圖をも、一見し給ふも可からずや』

『そは願はまほしき筋なれども、聊か遠慮せる所なりき。さらば、參拜を許させ給はんか』

この時は日全く西の山陰に落ちて、宵闇の黑き帷は、寺の内外を悉く包めりしなり。空海は手づから燭を秉つて眞言院の道場に進めり。最澄は身を淨めて之れが後に隨ひつゝ、二部の尊像の寶前に進めり。法界の二大明星は。燭に照らして惠果付屬の秘密圖を拜しつゝあり。

座に復りてのち阿闍梨は言ひぬ。

『吾年明れば四十歳の半期に達しなん。命の盡るも遠からざるべう覺ゆれば、一心に佛を念ずるため、彼の山に住して東西せざらんとは思ふなり。因て吾が持する所の眞言の法、和尙に付屬し參らすべければ、來る十一月十日を以て、先づ金剛界大法曼荼羅に對ひ給ふべし』

最澄いかで此の命に差ふべき。成るべくんば、山門の上足圓澄、泰範、長榮及び

こゝに召具したる光定をも、倶に入壇せしめたしなどうち語りて、彼一句、此一句、淸談水の流るゝ如くにて、冬の夜ながら更くるをさへに知らざりけり。

是の日山科に維摩會ありて、最澄和尙は自ら之に臨むべく山を降り、更に平安京を過ぎて、この長岡の乙訓寺に空海阿闍梨を訪問し來りしなりき。

爲さゞる事を語らざりしは、空海阿闍梨が人格の美點の一つなりき。最澄和尙を門外に送りたる詰旦、則ち月の二十九日を以て、乙訓寺產する所の柑橘千顆を摘み採り、これを十箇の櫃に修めて宮中に獻ずるとて、

桃李雖レ珍不レ堪レ寒。　豈如柑橘遇レ霜美。
如レ星如レ玉黃金質。　香味應堪實二盧篋一。
大奇珍妙何將來。　定是天上王母里。
應表千年一聖會。　攀摘持獻二我天子一。

一首の詩に表文を添へて奉つり、同時に乙訓寺の別當を辭し奉つりて、再び還つて高雄山寺に住したるなり。

寰澄和尚は十一月十三日を以て、函丈の智泉に宛て、薯蕷、薯蕷子、海藻、砂糖を寄贈し來り、員外弟子の例と成りて、灌頂壇場に參入せんことを請ひ置き、翌る十四日を以て山に登り來れり。續いて和氣播摩大椽眞綱、同じく大學大允仲世、美濃種人等も、法水に浴するために來りて、高雄の山は俄かに賑はひを倍しにき。

愈〻十五日を以て先づ金剛界大法曼荼羅に向はしめたるに、寰澄は因菩薩を得、眞綱は金剛菩薩、仲世は喜菩薩、種人は寶菩薩を得て、進んで灌頂を受け畢んぬ。大悲胎藏曼荼羅に臨む日は、十二月十四日と定められたれば、寰澄和尚はこのまゝ山に逗りて、修法に就かん事とし、秦範等の法務を卒へて疾く來らんことを促したり。

然るに高雄は固より一小山寺にして、叡山の崇高雄大なるに比すべくもあらず、山中甚だ食に乏しかりければ、寰澄等は付法未だ卒らざるに、早く已に命を繫ぐによしなきに至れり。是に於て寰澄は書を秦範に飛ばして、山寺に食料都て無ければ、米を乞ふて早く上り來れ、更に餘の物は寛むるの要なければ、米穀のみ速かに致されたく、他米を借りなば、五斛ばかりを至急に賴むよし懇請しやりつ。更に左衛門督藤原

冬嗣に書を致して、灌頂を受くるに其の具備り難ければ、伏て恩助を仰ぐとぞ請ひ求めぬ。

空蟬阿闍梨は、大悲胎藏界灌頂の壇を開くに先ちて、此の高雄山寺に三綱を置きたり。乃ち杲隣を上座に、實慧を寺主に、智泉を悅衆に任じて曰く、

今此の高雄の伽藍未だ三綱を補せず、人の維持するなし。緇林爵茂し、近童騏羅す、指車に因らずんば誰か曉暮を知らん。所以に近ろ衆簡に隨づて遠く渤馱の遺訓に應ず。禪師杲隣を拔でゝ以て上座と爲す。杲は雲霧を大虛に除き、光明を法界に滿しむ、隣は德を法雲の震宮に養ひ、位を大日の覺殿に紹ぐ、名此の德を含み實當に合契すべし、人皆具瞻し、上下同じく讓る。苾芻實慧を擢でゝ摩々帝に除任す。所謂實は虛を棄て僞を捨ふの義、慧は愚を剪り暗を破るの稱、實相の三昧に游び金剛の妙慧を證す。斯德斯に在り、名を省し理を會し、衆心共に許し、全亦印可す。僧智泉を擇び羯磨陀那に任ず。金剛の智。大悲の泉、既に自行化他の二德を含めり、必ず須らく緇素二衆を調和して同じく眞俗の二諦に入るべし。

此の三仁を選び彼の三德に稱ふ云々。

斯く內外の伽藍を護持し、法雷を五趣に震はんとするも道理や、灌頂の壇開かるべしと傳へ聞きて、山に來る道俗引きも切らず、寂澄和尙の催促に應じて、泰範先づ、粮米を負ふて來れば、圓證、長榮、光定等の東嶺の龍象も先を爭つて來りて、大僧衆の數二十二人に及び、沙彌衆また卅八人に上れり。この外、大唐より船を同うして歸りたる民部少輔高階眞人遠成を始め近士衆の數は四十一人、童子等また四十五人に達し、かば、十四日の大悲胎藏界の灌頂を受くべき人數都合一百四十五人とぞ計上せられけり。

嵯澄和尙は既に兩部の灌頂を受け得たり。是れよりは進んで眞言を學修し、大法の儀軌を受けざれば、傳燈の壇には入り得ざるなり。乃ち胎藏灌頂の事果てのち、師禮を執つて、今より幾月をか修行に費しなば、悉地の付法を受け得べきかを尋ねたるに、空海阿闍梨は事もなき體にて答ふらく、

『先づ三年ならば必ず功を畢らるべし』

『いかに今より三年とや？』

最澄は少しく意外の顏色にて、姑らく小首を傾けて在りしが、何をか思ひ得たらん態にて、自から微笑を帶び來りぬ。

『本來一夏を期して學敎の志を立つるなり。若し數年を經べくんば、暫らく本居に還りて本宗の事を遂げつる上、後日來りて眞言道を學ぶには若じとぞ思ふ、此の度灌頂の壇に入りたる圓證、泰範、賢榮の三法師は、孰れも修行滿位の僧にして、深く密敎を仰ぐ者なれば、明年正月を以て大阿闍梨に付屬し奉つるべし。伏て乞ふ、子地の哀みを垂れて、受法の庭に侍せしめ給はんことを』

阿闍梨の莞爾として快諾を與ふるを見て、和尙は重ねて言へり。

『こは其の砌故めて三綱政所に申し出べきにこそ。尙ほ一面には蘭惠の友たり、一面は法の師資たれば、今日までの例に因つて、諸經論の恩借を請ふことあるべし。

こは特に法の爲めに秘惜し給ふ勿れ』

是れをも空雛は快よく諾ひぬ。寂澄は素志の八分までを達し得て、欣然として西山を下り去りぬ。斯くして此の歳も暮れぬ。

僧伽とは梵名なり、翻して一味和合さいふ。意を等うして上下諍論なく、長幼次第あり、乳水の別無きが如くにして、佛法を護持し、鴻雁の序あるが如くにして群生を利濟す……性靈集。

第廿四　晴天の雷

弘仁四年は東大寺別當の秩滿ある歳なり。南院、眞言院の造立も既に成りたり。一山の儀軌も亦嚴かに整ひたり。此の際に得たる諸弟子も、便宜に應じて歸住する所を定めしめたり。空雛に在りては、今其の職を辭するとも、些の遺憾とては存らざるまでに、何事も整頓したりしなり。

彼の叡山より付屬せられたる禪師には、既に金剛界曼荼羅に入らしめ畢んぬ。寂澄和尚より頻々として來る借經の請にも、其都度毎に快よく應じ來たりぬ。其の法契に於ても遺憾なく温和に進みつゝあるなり。

空雛阿闍梨がこの半歳ばかりの事業は、かくの如く爾く圓滿に、かくの如く爾く平和なりしなり。唯だこゝに其の齢人生の半に達して、四十歳の期を迎へたれば、遺誡を垂るべき必要あるを感じ、五月晦日といふに、諸弟子等の爲めに教誡の文を作り、懇ろに出家の道を修むるは、本より佛果を期するためにして、輪王と釋梵家とを要せ

ざる所以を諭し、一心の性は佛と異るなく、我心、衆生心、佛心の三差別なくして、此心に住するが、やがて是れ佛道に住し、即身成佛に至る徑路なるを說き、師資の道は父子の如く相親しむ、父子は骨肉相親なりと雖も、但是れ一生の愛、生死の縛なり。師資の愛は法義相親にして、世間出世間、拔苦與樂、何ぞ能く比況せんと敎へ、我が敎に違へば、即ち諸佛の敎へに違ふなり。是れを一闡提と名づく、永く苦海に沈み何れの時か得脫せん、我も亦永く共に住語せず。往き去れ、住すること莫れ。往き去れ住すること莫れとぞ戒しめたりける。

前の半歲は、かくして經過しつ。後の半歲に至りては、多少の曲折なきにあらざりしかども、多くは山を出ざりしを以て、皆な文書の働らきに過ぎざりき。

特に阿闍梨を窘めたるものは、山居修禪の身に屢飢餓の難の逼り來る事なり。粮米の缺乏する事なり。燈油の盡くる事なり。筆紙の給せざる事なり。阿闍梨が眞言法の學行は、宮廷に知らるゝよりも、より多く僧侶の間に知られたり。其の祈禱、其の加持は、雲上に重せらるゝよりも、より多く敎海に重せられたり。されば、空海は唯

だ課役を免除せられたるのみにして、未だ十禪師にも陞らざるに、受戒の弟子は風を望んで座下に集り、今は他宗の法師をさへ養ふに至りても、給するものは寺領の產のみにして、一粒一錢の喜捨をも仰がざれば、かくは米鹽の資にだも窮するには至れるなり。

若しこの阿闍梨にして、一び禪關を出て四方に化を行はんか、善男善女雲の如く聚り霞の如く環つて、淨財淨穀にも乏しかるまじきに、意は唯だ練行に急にして、山住山修に他念なければ、今尙ほ多くの歸依者を有せざりしなり。唯だ寒暑の存問に幾分の志納を表する者とては、中納言藤原葛野麻呂、民部少輔高階遠成、太宰少貳田中八月麻呂その他二三の士太夫に過ぎず。偶々法衣の新らしきを得るは、智泉に賜る橘夫人の法施に由つてなりき。この山の物に乏しきこと、誠に案の外なりけり。

幸ひにして八月麻呂入京の報を得たり。阿闍梨はこの大檀那に謀りて、修禪の資を得ばやと思ひしかば、一別以來已に七年、悵戀已み難き所に、此日入京を傳ふものあり、急ぎ謁せんと欲すれども、私願あつて山房を出で難し。貧道聊か三寶に供せんと

欲すれども、山厨洗ふが如く、毎事辨じ難ければ、伏して米油等を濟はれんことを乞ふ。又、唐より將來る經疏文書等、數年寫取りて普ねく天下に傳へんとするに、紙と筆とを得難し、是も亦惠みを垂れられんことを望むとの一書を認め、之れを彼の少貳に致さしめたり。

この書に接して、八月麻呂はいかに阿闍梨に同情したりしぞ。便ち米油等の料を齎らして山寺を訪ひ、料紙の類は後より送らんと約し、が、其後二千張の紙と、四十管の筆と、二十挺の墨とを同封して寄進來れり。空雞はいかに之れを驩びしぞ。『開レ封燦然。手足無レ厝。悚媿佩銘何以爲レ喩矣』といふもの、寔に譎はりなき心の告白なりけり。

十月二十五日には、中納言藤原葛野麻呂の爲に願文を撰しぬ。こは入唐第一船に於て風波の難に遭ひし折節、一百八十七所の天神地祇を祈つて、神毎に金剛般若經一卷づつを書寫し奉らんと誓ひ、幸ひにして其の冥護に依り使命を果すことを得たりしかば、官の暇ある毎に謹寫し來りしもの、今や積んで其の員に滿ちぬ。乃ち供養轉讃し

て前の誓願を果さんがために、此の妙業を以て彼の神威を崇め奉つらんとてなり。空蟬もこの時の誓願の、今にして果さるゝを見るにつけ、歸朝の船にて發したる我が誓願の、いつ遂げらるべきかをも知らず、さすがに茫洋たる前途の思はれざるにしもあらざりしなり。

この間にも頻々として絶えず來るものは、叡山より借經の使僧なりき。十一月廿三日を以て、頃日講法のために稿を下しゝ理趣釋經を求むるに至りて、最澄和尚の經を寫すに急にして、法の文字の外にあることを忘れたるを慨き、一篇警策の文を草して、彼の座主の反省を求めたるなり。

こゝに其文意を拾はんに、夫れ理趣の道、釋經の文、天も覆ふこと能はず、地も載すること能はざる所なり。塵刹の墨、河海の水も、誰か能く敢て其一句一偈の義を盡すことを得ん。如來心地の力、大士如空の心に非ざるよりんば、豈能く信解し受持せんや。余不敏なりと雖も、略ぼ大師の訓旨を示さん、冀くは子、汝が智心を正くし、汝が戯論を淨めて、理趣の句義、密敎の逗留を聽け。理趣に三種あり、一には可

聞の理趣、二には可見の理趣、三には可念の理趣なり。若し可聞の理趣を求めば、聞くべき者は則ち汝が聲密是なり。汝が口中の言說即ち是なり、更に他の口中に求むることを須ひざれ。若し可見の理趣を覓めば、見るべき者は汝の色なり。汝が四大等即ち是なり、更に他の身邊に覓ることを須ひざれ。若し可念の理趣を索めば、汝が一念の心中に本來具有す、更に他の心中に索ることを須ひざれ。次に復た三種あり、心の理趣、佛の理趣、衆生の理趣なり。若し心の理趣を覓めば、汝が心中にあり、別人の身中に覓むることを用ひざれ。若し佛の理趣を求めば、汝が心中に能く覺る者あり、即ち是なり。諸佛の邊に求むべし、凡愚の所に求むることを須ひざれ。若し衆生の理趣を覓めば、汝が心中に無量の衆生あり、其れに隨つて覓むべし。又三種あり、文字、觀照、實相なり。若し文字を覓めば、則ち聲の上の屈曲なり、即ち是れ不對不碍なり。紙墨の和合して文字を生ずる若き、彼處にも亦あり、又須らく筆紙博士の邊に覓むべし。若し觀照を求めば、則ち能觀の心と、能觀の境と、色もなく形もなし、誰か取り誰か與へん。若し實相を求めば、則ち實相の理は名相なし、名相なければ虛空

と冥會せり、彼處には空のみなり、更に外に用ひざれ。夫れ秘藏の興廢は唯だ汝と我となり。汝若し非法にして受け、我若し非法にして傳へば、則ち將來求法の人、何に由てか求道の意を知ることを得ん。非法の傳授、是れを盜法と名づく、即ち是れ佛を誑くなり。又秘藏の奧旨は文を得ることを貴しとせず、唯だ心を以て心に傳ふるに在り。文は是れ糟粕、文は是れ瓦礫、糟粕瓦礫を受れば、則ち粹實至實を失ふ、眞を棄て僞を拾ふは愚人の法なり、愚人の法には汝隨ふべからず、亦求むべからず。子若し三昧耶を越えずして護ること身命の如くし、堅く四禁を持て愛すること眼目に均しく敎の如く修觀し、坎に臨んで績あらば、則ち五智の秘璽を旋らすに期しつべし。況んや乃ち髻中の明珠、誰か亦秘惜せん。といふにありて、嚴厲策つが如き中に、春の如き溫情の言外に溢るゝを見るべし。

寂澄和尙はこの晴天の霹靂を迎へて、いかに感じけん。尙ほ一日を隔て書を秦範に送り、空蘊の詩に和せんがために、禮佛の圖義と、其の大意とを聞しめんことを請ひ來りしを見れば、其の策勵を善意を以て釋き得たることは、いと覩易き次第なり。

かくてのち、阿闍梨は雪を踏んで山を出でぬ。直ちに平城の古京に赴きて、東大寺の南院に入りぬ。是れ四年の任期こゝに滿ちたれば、其の職を解きて、新に別當たるべき法師に、事務を引繼んためなりしが、一つにはまた、興福寺の南の一隅に、藤左衛門督冬嗣の建立したる南圓堂を、鎮壇せん法要も、此の行の中に銜まれたるなり。

興福寺は鎌子内大臣の御爲に、其孫藤原不比等の建立したる藤氏の祈願寺なり。冬嗣の父右大臣内麻呂は去年薨去ありて、同じ北家の園人進んで右の大臣とはなりしものから、良繼、百川より政權は式家に集りて、太上天皇、今上天皇、東宮に至るまで、皆な良繼の女乙牟漏皇后の皇子に在しませば、大臣の位も何となく預り奉つるやうにて、勢ひの振はざる心地するより、父の大臣の菩提を兼て、我が家の榮えを祈らんために、此の御堂は建立ありしなり。阿闍梨は師壇の契りあれば、冬嗣の意中を察して造營にも力を貸し、今不空羂索を本尊に安置して、懇ろに鎮壇の法を行ひ、尙ほ氏人住僧とゝもに持念する事いと懇懃を極めたり。

さればにや、招かざるに群衆四方より會ひて、工事を扶け、法筵を賑はし、皆な口

口に

不多良久乃美奈奈美乃岐之仁須末比志天喜多能不知奈美伊摩曾左賀由留

と謠ひはやしたり。誰が歌ぞと聞けども、誰知る者あらざれば、遂には春日の御神の神詠なりと傳へ崇むるには至りけり。

一身獨り生沒す、電影是れ無常なり。鴻燕更る〳〵來り去り、紅桃昔の芳を落す。華客年の賊に偷まれ、鶴髪旗祥ならず。古の人今見えず、今の人那ぞ長きことを得ん。……性靈集

第廿五　高雄の嶺

間僧久住雲中嶺。　遙想深山春尚寒。
松柏料知甚靜默。　烟霞不レ解幾千殘。
禪關近日消息斷。　京邑如今花柳寛。
菩薩莫レ嫌此輕贈。　爲救施者世間難。

這の七律一篇の詩は、今上天皇の阿闍梨を勅問あらせらるゝ御製なり。空海は恭しく捧讀して、これを念持佛の厨子の壇上に置きぬ。かくて名香を炷いて禮拜しながら、徐かに首を回らす時、御使ひを奉りたる、内舍人布勢海は、賜りたる綿一百屯の目錄を呈して、奉はりたる口勅の旨を傳ふるなりき。

阿闍梨は天恩の優渥なるに感泣して、山中春尚は淺けれども、幸ひに聖德の温光と渤馱の攝理とを以て、身は健かに心は寧らかに、朝夕實祚と國家と衆生との爲めに、懇念を怠らざるよしを復命し、更に硯を洗ひ筆を新にして、謹んで天韻を和し奉つり

ぬ。

方袍苦行雲山裏。　風雪無レ情春夜寒。
五綴持鍋觀二妙法一。　六年羅衣啜二蔬殘一。
日與月與丹誠盡。　覆載今見二堯日寛一。
諸佛威護一子愛。　何須レ惆二悵人間難一。

これに副ふるに一篇の表文を以てし『纔に天書を披くに字勢龍の如くに盤まり、再三詩を諷するに金の聲あつて玉の如くに振ふ、彼の魏武、唐文、豈肩を比ぶることを得んや。微僧何の幸ひあつてか此の霧霈に沐する、當に願くは之れを肌骨に銘じ、之れを日月に懸けて晝夜に精勤して、殊私を酬ひ奉つるべし。敢て布鼓を擧げて濫に春雷の響きを和し奉つり、輕しく聖覽を瀆す』とぞしたりける。

是は此れ三月の一日の事なりしが、閏七月に至りて、またもや布施内舍人を遣はされ、阿闍梨將來の雜書雜文にして、多少とも聖鑒に入るものあらば、御覽せさせられん叡慮なる旨を傳へ來りき。去年も既に献つりぬ。篋底を搜るに、尚ほ古今文字讃三

卷、古今篆隸文體一卷、梁武帝草書評一卷、王右軍蘭亭碑一卷、曇一律師碑銘一卷、大廣智三藏影讃一卷を得たりしかば、之れに曾て御意を被りし事ある梵字悉曇の字母幷に釋義一卷を添へ、清げに營繕して乙夜の覽に供する事としたりき。天皇と阿闍梨との間に通じたる文雅の交りは、詩書の唱和應酬の回を重ぬるに隨つて、愈〻深厚になり行けども、空海は深く自ら謙下して、『人は是れ瓦礫にして毎に金仙の風を仰ぎ、器は巢許を謝して久く堯帝の雲に臥せり』となし、書の趣味を說いては、『窟觀の餘暇時〻印度の文を學び、茶湯坐し來つて乍ちに震旦の書を閲る。蒼史が古篆、右軍が今隸、務光が韭葉、杜氏が草勢を見る毎に、未だ嘗て野心憂ひを忘れ山情笑を含まずばあらず』といひ、諺に『奴の口に甘きは、郎の舌にも甜し』といふ事あれば、『敢て斯の義に因て』献じ奉つるよしを奏し、此の韻雅の交りを以て傳導の緣を結び、一大飛躍を試みんとするが如き野心は、阿闍梨が心の何處にも、其の影だにもあらざりしなり。

然るにこゝに阿闍梨をして痛く心を惱せたる事ありき。そは一僧の女犯の罪に墮して、三衣の身を囚獄に繫がれたる出來事にこそありけれ。

平城の元興寺の故の賢璟大僧都の法弟に、圓璟といふ法師ありき。三年前の十二月に來つて大悲胎藏界の智水に浴し、虛空藏を得て眞言道を修めたる者なりしが、秋暑尙ほ爍くが如き炎天を冒して、親しく高雄に訪ひ來れり。請ふがまに〳〵阿闍梨は座に延いて對面するに、彼の法師は流るゝ汗を拭ひ〳〵、口重たげに請ふ所を語るなりき。

『少衲が同法の沙門中璟と申す者候ひき。既に傳澄法師位に上りて、法德も無下に賤劣なる方には候らはざりしに、性として酒を好み、夫れがために戒行を破壞する事も、往々なきにしも候はざりき。然るに過る頃より化度のため平安京に參り居たるが、一期已に盡きても歸り候はず。消息とても弗に斷えて候ひしかば、寺にても皆な心を痛めつるものを、あら無殘や、身は國典を愼まざりし罪にて、嚴かなる國法に問はれ。苛しく堀川の獄に縛められしと承まはりて候ふ。いかならん罪かは知らず候へども、寺には寺の法ありて、夫〻に執行すべければ、若し彼の法師が罪を宥めて、寺法に委

せ給はんには、自から故の大僧都が名をも顯がさず、自他の幸福之れに過ぎじと存じ候ふ。あはれ大阿闍梨、大悲の愛護を垂れさせ給へ』

汗は涙とふり交りて、圓璟は大床に額を摩り着けつゝ、其の情さすがに哀れとぞ見えける。

『そは嘸かし口惜しくも在すべし。さりながら、有司の嚴しく獄に繫ぐまでには、孰れに鞫問も重ね、罪跡をも糺しつべければ、沙門とて容易くは放つまじきぞ』

阿闍梨はかく言ひながらも、心には早や救護の手續を思ひ運らすなりき。

『さん候ふ。執らはれし身の科を、救解かん事は難かるべし。唯だ三寶に仕ふる身なれば、寺法に付して罪すべくは罪しなん』

『夫れも一わたり理なり。さて中璟法師が犯せる罪科とは、いかなる事にて候ふぞ』

『されば、其事を大阿闍梨の御前に白さんは、尊嚴を黷し奉つる虞あなれば——』

『そは無用の遠慮なるべし。其の罪の明らかならぬに、愁訴すべきやうもあらねば』

『御仰せ至極せり。其の罪過を明かに仕つりなば、死しても餘んの辜あるべく、碎

きても猶ほ飽かじとこそ思すらめ。唯だ一己の身を亡して名を喪ふのみならで、抑亦佛法を汚穢し、王法を違越すればにて候ふ』

圓璟は苦しげに胸を摩りて、深く愧ぢ厚く畏れ、いかにも言ふに難んずるもの、如くなりき。阿闍梨も其の意を憐れみて、温顏に笑を含みつ。

『春は生じ秋は殺するを天の理とし、罪を罰し功を賞するを王者の常とはいへ、冬の天にも暖かき景なくんば、梅や麥や何を以てか華を生ずべき。昔者秦の繆公晋の軍に圍まれし時、騎る所の善馬を亡ひしに、岐下の野人三百人、共に其肉を啖ひたり。吏大いに怒つて之を捕へ、將に罪に行はんとしたるに、繆公の曰く、君子は畜産を以て人を害せず、善馬の肉を食ふて酒を飲まざる時は、人を傷ふといへばとありて、三百人を赦して酒を賜りたり。されば繆公傷きて秦の軍危き時、岐下三百の野人、晋の軍に馳入つて遂に圍を解き、敵王を生擒りたる事ありき。今上天皇は仁は堯に至り、德は舜を拔き給ふ、奚んぞ繆公の美に讓り給はんや』

この切實なる慰諭を得て、圓璟も始めて大旱に雲霓を望みたる心地したりき。

『尊論によりて稍や心の寛ぎを覺えて候ふ。大阿闍梨に對して白さんは、いかにも忍び難き事ながら、一わたり御怒りを鎭めて聞せ候へ』

眼をかすむる涙の露を拳に拂ひて、深く深く面を垂れぬ。

『此の事を聞きしより腸九回して睡れども夢圓かならず、魂消飛んで口に食味を忘れ候ひき。今あからさまに申さんも、心安からぬ事ながら、中璟の罪科は、姦淫を犯したりと承まはりて候ふ』

滿身を赤童子の如くに染めて、大床に平伏したる圓璟を視やりつゝ、阿闍梨の眉はいと深く顰みつ。

『女人は是れ萬性の本にして、氏を弘め門を繼ぐものなれば、强ちに卑むべきにあらず。但佛弟子に於ては、親み厚ければ諸惡の根源となるより、六波羅密經にも、女人に親近すべからず、猶し親近すれば、善法皆な盡くとはいへり。若僧にもあらぬ身の、何とては心の迷ひけん』

『下愚は移らずとやらん、濁世の凡夫にもあるまじき事にて候ふ。殊に玉章を通はして、戀慕の闇に誘ひし女人は、宮墻深き九重の奥に仕ふる女房にて候ふ程に、有司の憤りは憎しみとなりて、遂には堀川に逐下し、役に驅使はるゝとこそ人の傳へて候へ』

圓璟は屢嗚咽びつゝも、罪の次第を逐一に陳べ訖んぬ。

『いかに、宮女の戀に落ちしとやう？』

阿闍梨が眉宇の間には、何とも知れぬ一種の笑を浮びける。平城佛敎の形式の末に流れて、根本より腐敗し來れる事は、近士として石淵に出入したる頃より、親あたり見もし聞きもして、深く慨き歎てる所なりき。殊に東大寺に別當たりし際には、之れを矯め之れを正すを以て任としたれば、其の由來する所の、平城歷代の宮裏より發せる事をも究め得たるなりき。僧徒の墮落せしめらるゝが、宮女の熱せる戀情に基く如く、宮女の淑德の破壞せしめらるゝが、僧徒の卑しき誘拐に基く事をも確め得たりき。宮嶽のなくなりにし後の平城は、自から墮落僧の數を減ぜしが如く、大伽藍なき平安京の後宮にも、此の種の宮女の員を減ぜしは、自から明かなる理なり。然るに、今中

環が罪の宮女と玉章を通はしゝにありと聞きて、此の罪案が甚だ靡麗として捕促へ處なき、浮草の戀なる事に想ひ到りしなりけりて

其點に想ひ到るとゝもに、或は宮女の間の憎惡偏執のために、既に飲酒の制戒を破したる中環の、これが傀儡は使はれたるものにはあらずやとも想ひ得たりき。斯く思ひ見れば、中環の罪にも多少恕すべき所あるやに考へられて、坐に哀憐の情さへも動き來れり。

『彼の法師の戒行を護らず、國典を慎まざりし罪は、大は則ち大なれども、帝堯の子にも丹朱が如き不肖あり、釋伽牟尼の御女にも善星比丘尼の如く、一偈一句一字の義を解せず、惡友に親近して四禪を退失せられたるあり。大樹仙人は羯若鞠闍國王の百女を見て、愛染の心生じ、阿難は婬室を經歴して婬席に誘はる。これに比ぶれば中環は凡夫なり。よし、よし、必らず罪を請ひ宥めて得さすべきぞ』

この一語圓環は深く心肝に徹して、更に感謝の涙に咽びつゝ、幾たびか伏し拜みき。

『申すも畏き御事ながら、今上天皇は慈しみ春の風に過ぎ、惠み夏の雨に踰えさせ

給へり。奚んぞ秦政の必罰を取つて、周成の措刑を去り給はんや。空蟬身に代ても、必らず刑を緩うし責を宥むるの赦を請ひ得させんぞかし』

言ひ訖ると等しく、早や筆紙を呼びて表文の案を艸するなりき。

閏七月廿六日、中環が罪を赦されんことを請ふ表を上つりしは、是れ阿闍梨が初めての請ひなりしなり。朝廷にも此の阿闍梨が燃ゆるが如き温情に動かされて、旨を有司に下して、中環を獄より出さしめ、元興寺の僧圓環が手に引渡しをぞ了せられける。

是歳も亦固く禪房を閉して、敢て山を出ざりしが、白雲深き處飛禽尚ほ來往して、常に禪關を叩く者絶ゆることなし。仲秋の頃なりけん、博士伊豫部連眞貞の、下野守の任滿ちて京に歸りしとて問ひ來たりしが、東國の國情など細々と物語りて道ふやう、下野國芳賀郡の人に勝道法師といふがありき。同國の補陀落山は、菘嶺銀漢を挿さんで白蜂碧落を衝き、魑魅も通ずること罕なれば、人蹤絶えて古より未だ攀ぢ躋るものあらざりしを、法師勇猛を仰いで意を策し、遂に去じ神護景雲元年四月、深雪を踏み峻巖を攀ぢ半腹に達し、住ること三七日にして却き還り、又天應元年四月攀陟を企

てしも果さず、二年三月諸神祇の爲に經を寫し、佛を圖し、命を弃て登攀し、信宿にして、終に其頂きを見たりとて、審らかに山の狀を語り、勝道法師は此の勝地に華嚴の伽藍を建て、神宮寺と名づけて修道したりしが、去じ大同二年雨を祈つて驗あり、是より法德天下に著はれぬ。然るに此の勝境にして記なきを歎き、伊博士に託して空海阿闍梨に文を依賴せんとの事なりき。

阿闍梨も一旦は固辭したるも、上人の偉績を思へば、文情自から湧き出て、遂に『沙門勝道歷二山水一尋二玄珠一碑并序』の一大雄篇を得たりき。乃ち龍管を揮つて綾絹に書して與へしかば、博士は斯の文と彼の山と、孰れか偉、孰れか雄とて、寡なからず感謝の意を表したりしなり。

翌る歳に至りて、阿闍梨は愈〳〵秘藏を書寫して之れを世に廣め、大いに密敎弘通の道を講じて、以て『早く鄕國に歸つて國家に奉じ天下に流布し、蒼生の福を增せ』とありし惠果大阿闍梨の遺誨を果し、佛恩師恩を報せんものとの大誓願を發したるなりき。今や諸弟子を勵し、一身を擧げて事に當らんとするに、先づ第一に心を傷しむる

ものは、紙、筆、墨の料に窮する事にぞある。

鉢を持して城中に食を乞ひ、足を洗つて趺坐して法を說くは釋尊の志なり。今金剛一乘の法を流布せんとするに、衆機の緣力に乘じて、神通の寶藏を書寫するは、正しく沙門の執るべき道なるべしと思惟し、金剛子康守を東國に遣はして、下野の廣智禪師、同國補陀落山の勝道上人、常陸の德一菩薩、萬德菩薩に、法の爲めに助力を垂れんことを請ひ、また安行をして、甲斐守藤原朝臣眞川、常陸按察使藤原朝臣福當麻呂の方を歷訪せしめ、懇書を齎らして、冀がはくは一言の風を垂れて、秘藏の敎を勸寫せんことをと請ひ遣りつ。されど、有緣の力は厚くとも、及ず所に限りあれば、更に一大勸進の文を草して、若し神通乘機の善男善女、若くは緇、若くは素、我と志を同うせんとする者あらば、此の法門に結緣して書寫讀誦し、父母所生の身をして十地の位を超越し、速かに心佛に證入せしめん。今弘法利人の至願に任へず、敢て有緣の衆力を煩らはすと結び、康守安行二人をして、途すがら勸化せしむる事となしぬ。

是歳、橘夫人嘉智子は、正良親王の故を以て、立つて皇后宮の位に陞り、智泉が

法力は愈〻篤く宮廷の信敬を得るに至りたり。この嘉聞の傳はる頃高雄山寺にはまた得難き少年の學匠を得度せしめたり。

左京の人、巡察彈正大弼正六位上紀朝臣御園は、武内宿禰十八世山城守由長の子にして、家に二人の男子ありき。兄を御豐といひて神儒の學に精しく、石清水の神主となり、弟を眞濟といひて、機悟敏慧幷なく、幼より家學を修むるに、世典に粹しく詩賦に長じ、所謂咳唾も珠を成すの秀才なりしが、志學の年に至りては、更に先氏の風を喜ばず、寂歴を樂んで、家學を屑しとせず、幽人の幽行を仰ぎ、大道の大妙に耽けり、遂に儒冠を脱して阿闍梨の室に投じ、再拜して言ひぬ。

『弟子久しく清塵に渴して、恭しく下風に到る。鐘嶺相響きて、新に控くこと舊きが如し』

阿闍梨も一見して其の器の大なるを知り、專ら大小乘を習はしめ、眞濟の名をそのまゝに、沙彌眞濟とは稱びけるなり。時に歳十六とぞ聞えし。

第廿六　高野の原

卯の花垣に釉觸れて、時ならぬ小雪のほろほろと零れかゝるを、拂ひもあへず山路行く斗藪の姿は、一鉢一瓢に身を託して、宿願のために行脚する阿闍梨空蟹になんありける。新樹に晴るゝ吉野山を見わたせば、輕き風靜かに法衣を吹いて、心の塵も自から洗はるゝ心地ぞする。雲につらなる金峰を眺むれば、氷を席とし雪を被として、極寒を葛の衣に過しつる昔の苦行も思ひ出の科なりけり。

空蟹は錫を留めて彼の嶺を飽ず眺めたるに、傍らにも亦人ありて、是れはまた空蟹がやつ〳〵しき斗藪の裝ひを、いと訝かしげに目戍り居たりき。

志ざす處は、此處邊の山にはあらざれば、いざや路を急がんと、峽の細道を歩まんとするに、件の男は却つてつかつかと進み寄り、

『大德は神靈の宿る高山を覓め給ふにはあらずや』

言ふうちにも絶えず阿闍梨が面に眼を凝らしたり。

空彗も始めて其の人の方を見るに、こは此の邊りの獵者なるべし、皮膚の色の飽までも赭くして、身長は八尺にも餘りつべく、骨高く筋太く、見るからに逞しげなる男の、青き色の小袖を着して、弓箭を身に帶したるが、大きなる黑犬と、小さなる白犬とを綱に繫ぎて牽き隨へたるなり。

『いかにも靈山聖地を尋ぬるものなるが、御身は何處の人ぞ』

『我等は今この大和の宇智郡を、獲りせんとて求るものなり。大德は何れの山を好み給ふぞ』

空彗は獵者の言容不審なれば、踟躕して素志を告げず、却つて獵者を訊さばやと思ひたるに、彼方は疾く其の氣を察しけん、赭き面に一杯の笑を堪えぬ。

『我は是れ南山の犬飼なり。常にこのあたりの山々を徘徊すれば、凡そ吉野より南の山にて我の知らざる嶺とてはなし、抑大德は何の爲めに高山を求めんとはし給ふ』

面がまへこそ怖げなれ、心の優しげなるは、語の端に隱れなければ、阿闍梨も今は踟躕する所なく、心當なる白雲の彼方を指ざして、尋ぬる嶺を物語り聞えぬ。

『少年の頃なりしかば、今は能くも覺えねども、彼の白雲のかゝるあたりに、我邦の妙高山ありと覺えたり。聊か修禪の草庵を引き結びて、心靜かに住まばやとは思ふなり』

『さては然る微妙き心願に在するにや。大德の嘗て覽給ひし靈山は、是れより猶ほ南の方、紀伊國伊都郡の內なるべし。其の山地は萬許町にわたり、其の中に於て幽平の原あり。誠に靈瑞の多き處ぞかし』

阿闍梨ははたと膝を打てり。

『實にそれよ、慥か高野の原とやらん言ひつるよ』

『夫れなり、夫れなり。和尙來り臨んで住み給へ。我また自から助成し參らすべきに』

彼の獵者も亦膝を打つて應じたり。

空彗はこの奇しき獵者より、奇しき指導を得て、心自から勇み立ちたり。今その處を示されて、二十年前の足跡、新たに心を照し來たるばかり、總ての記憶は明らか

になりぬ。

『頼みある事を承まはるものかな、貧道は太く行旅を愛したりしかば、名山大川略ぼ跋渉したれども、我が一期を終らん處は、彼の山ならではどこそ思ひつれ。さても此の處は何といふ地ぞ』

『こゝは尙ほ大和の宇智郡にて、二見となん呼べる地なり。彼處に小高く茂りたるを、亦打山と申して、大和と紀の路の國境ひにて候ふかし。吉野川も彼のあたりにては、隅田川といふよしは、萬葉集に入れられたる「亦打山夕越行支天廬崎乃隅田川原爾單身加茂寢牟」の歌にて知られけん』

『さらば一足も急ぎて行くべけれ。緣あらば重ねてこそ』

阿闍梨は直ちに錫を進めて、歩み去らんとしたりしを、彼の獵者はしばしと呼び留めて。

『此處邊は樹立ものふりて、通路とても定かならじ。我大德のために東道を參らすべし』と言ひながら、二頭の犬の綱を解き放つに、犬は欣しげに尾を掉りつゝ、阿闍

梨を顧みては、先に立ちて馳けり行くなり。

獵者の好意を厚く受けて、犬の行く跡に附て歩みつゝ、偶然來し方を顧みるに、件の獵者は何處行きけん、はや其の影だも見えざりけり。訝かしきこと言はん方なれど、犬を見失はんことを虞れて、心ならずも行く方をのみ急ぎたりき。

日の昏るゝ頃紀の大河を渡りて、其の河邊の民家に宿を求めたり。こゝに一人の山の民ありて、いと懇ろに來意を尋ぬるに、阿闍梨も今は包みて何かせん、明らさまに仔細を告ぐべしと思へば、夕の勤行果たるのち、件の山民を招き寄せて語らひぬ。

『貧道は是れ高雄山寺の空蟬なり。貧道大唐より還る時、風波起つて數漂蕩したりしかば、聊か少願を發して、歸朝の日には必ず諸天の威光を增益し、國界を擁護し、衆生を利濟せんが爲めに、一禪院を建立して、法に依つて修行せんに、願はくは善神護念して、早く本國の岸に達せさせ給へと、懇ろに祈願し奉つりしに、神明昧からずして安らに本朝に歸ることを得たりき、然る後、日月は流るゝ如くにして忽ち一紀を經たり。若し此の願を遂げずんば、恐らく神祇を詐らん。是を以て少年の頃地の靈に感

じたる事ありし、高野の原を究めたる上、若し公けの免許を得ば、こゝに一草堂を營みて修禪の院とせまほしさに、城外には出來しなり』

山民は耳を傾けて聽き居たりしが、深く其語に感じたらん氣色にて、詳らかに其の地勢を告ぐるなりき。

『實に菩薩の仰する如く、此より南方の山上に平々たる原野ありて、三面は峰連なり、山門巽の方に開けぬ。萬水は東に流れ、末派は一水に聚り、晝は常に奇雲聳え、夜は常に靈光現ずると申す。菩薩若し彼の靈區を相給はんとならば、我東道し奉つるべし』

乃ち明朝に至りて彼の山民を隨身し、黑白の犬を伴ひて山に登るに、二十年前に於て、修禪の所この外になしと思ひしに差はず、巡見するに隨づて、地の靈なることは比叡に超え、山の美なることは補陀落にも勝りつゝ、寔に國城を建立せしめんため、山神の我を待ちにしものとぞ思はれける。

時に隨身の山民は、つか〳〵と身を寄せて、密めき告ぐるやう、

『吾は是れ此の山の主なり。則ちこの領地を擧げて菩薩に獻じ、以て威福を增さんかな』

『我も亦仁の尋常の山民ならざることを知んぬ。この山の主とは、抑もいかなる神に在ますやらん』

阿闍梨が靜かに問ひ申すに對して、件の神は益々恭敬の意を表はしつゝ、

『吾は正しく伊弉諾尊の子、丹生津媛命の十二の御子の長子にて、高野明神とは稱ばるゝなり。其性山水に狎れて極めて人氣に龕なるに、今幸ひにして菩薩に逢ふ。是れ吾が德の至れるなり』

欣然として阿闍梨を禮拜したるが、降るべき道を指し示しつゝ、姿は忽ち木隱れて見えずなりけり。

阿闍梨は深く妙機の熟したるを悅びて、木立ゝを潛りて山を下り、再び元の河邊に出んとするに、彼の犬は何處にか行きけん、其の影だも見えざるより、端なくも山路を踏み迷ひて、天野といふ山に入りぬ。山林に狎れたる身なれば、敢て狼狽へ騷ぐこ

となく、心當に細き徑を辿り行くに、日ははや西に沒して、木の下は小暗くなりぬ。よく繁茂りたる山なれば、星の光りも仰ぐによしなく、足に任せて分け行くほどに、忽然として十町許の澤の畔に出でたり。

尙ほ暮れ殘る殘光に透し見るに、岸邊には茨棘いやが上に生ひ重りたるに、若菰の綠の芽を抽でたれば、水の色さへ藏はれつべし。暮色黯慘として物凄ければ、阿闍梨は彼の澤に近づかずして、少しく迂回して歩むほどに、こゝに一宇の神社あるを認め得たり。進み寄りて拜殿に額けば、微かにも燈明の光りさして、內殿の額の文字は、『丹生津媛命社』とぞ讀まれける。是れぞ正しく高野の鎭守の御神よと思ひ合はさるれば、暫し祈念して、結緣空しからず、吾が宿願を成就させ給へと念じたりき。

祈り果て首を擡ぐる處に、一人の巫祝ありて、今宵のあるじし侍らんに、此方にて憩はせ給へといふ。阿闍梨は請せらるゝまゝに、巫祝が家に宿りつゝ、此の神の緣起を聞くに、丹生津比咩命、一の御子高野明神を始め十二子、一百二十の眷屬を將て伊都郡に天降り、この天野原に宮柱立ち「鎭り坐まし、譽田天皇(應神)の御宇にこの山

の周圍万許町を寄せ奉つり給ひしとぞ物語りぬ。

時に巫祝に神憑り給ひつ、乃ち託して宣はく

『妾は神の道に在りて威福を望むこと久しかりき。方に今菩薩此山に到り給へり、妾が幸ひなり。弟子昔現人なりし時に、食國皇命家地を給ふに萬許町を以て、南は南海に限り、北は日本河に限り、東は日本國に限り、西は應神山の谷に限れり。冀くは永世に獻つりて仰信の情を表はさん』

巫祝はかく告げ訖るとゝもに、夢の覺めたらんやうになりて、いと老實て接遇にいそしみたりき。

阿闍梨は親しく奇瑞を迎へつ。現たり神の冥護を仰ぎつ。寔に密敎相應の地なることを、いと切めて感じたりしかば、直ちに高雄に還りて、一篇の表文を認め、今は主主助たる布勢海に託して、之れを傳奏せしめたり。

沙門空蟬言す。空蟬聞く、山高ければ則ち靈雨物を潤し、水積るときは則ち魚龍產化す。是故に嗜闍の峻嶺には龍仁の迹休まず、孤岸の奇峰には觀世の隱相纏ぐ、其所由を尋ぬるに、地勢自から爾なり。又、蓋

嶺の五寺には禪客肩を比べ、天山の一院には定侶袂を連ぬるとあり、是則ち國の寶、民の樂なり。伏して惟れば、我朝歴代の皇帝心を佛法に留めたまへり、金剛銀臺のごとくに朝野に比び、義を談ずる龍象寺毎に林を成す、法の興隆是に於てか足んぬ。但恨むらくは、高山深嶺に四禪の客乏しく、幽藪窮巖に入定の賓希なり。實に是禪教未だ傳はらず、住處相應せざるの致す所なり。今禪經の説に准ふるに、深山の平地最も俯禪に宜し、空雞少年の日好んで山水を涉覽し、に、吉野より南に行くこと一日、更に西に向つて去ること兩日程にして平原の幽地あり、名を高野といふ。計るに紀伊の國伊都郡の南に當れり。四面高嶺にして人蹤蹊絶たり。今思はく、上は國家の奉爲に、下は諸の脩行者の爲に、荒藪を芟り夷げて聊か脩禪の一院を建立せんと。經の中に誡めあり、山河地水は悉く是國主の有なり、若し比丘他の許さゞる物を受用すれば、即ち盜罪を犯すといへり。加以ならず、法の興廢悉く天心に繫れり。若くは大若くは小、敢て自由にせず。望み請らくは、彼の空地を賜はることを蒙つて、早く小願を遂んことを。然らば則ち四時に勤念して以て雨露の施しを答しめん。若し天恩允許せば、請ふ所司に宣付したまへ。輕しく宸扆を塵す。伏して深く悚越す。沙門空雞誠惶誠恐謹て言す。

弘仁七年六月十九日　　沙門空雞上表

朝廷にても有司に付して評議の末、遂に其の請ひを容るゝことゝなりて、直ちに符

を紀伊の國司に下したり。

太政官符　紀伊國司

空地壹處在二伊都郡以南一　四至

東限二生川和上峰一　南限二當川南長峰一

西限二應神山谷一　北限二紀伊川一

右得二僧網牒一偈。十禪師空雞牒云……

……者。右大臣宣奉レ勅依レ請。國宜二承知一依レ宣賜レ之。符到奉行。

參議從三位行左大辨　秋篠朝臣安人

左小史正七位上村主　豊田麻呂

弘仁七年七月八日

紀伊守藤原朝臣文山は、此の官符に准じて、同じく廿八日を以て國符を伊都那賀在田の三郡司に下して、こゝに此の靈山は空雞阿闍梨の禪院に免されたるなり。阿闍

梨は泰範、實慧に命じて彼山に上らしめ、先づ一二の草庵を造るべく、郡司に宛て載したる親書を、齎らして發向せしめたりき。

夫れ境は心に隨ふて變ず、心垢るゝときは境濁る。心は境を逐ふて移る、境閑かなるときは心期かなり。心境冥會して道德玄かに存す。

性靈集

第廿七　加持の水

禪居を高雄の山嶺に卜してより、既に八年の春秋を經たり。勅を奉じて一夏を乙訓寺に送りたるど、時に任に東大寺に往復したるとの外は、幽房を閉して秘敎の書寫に丹精し、子弟の敎養に盡瘁したりしかば、精進の致す所其の効果空しからず、修道の門侶山林に充ち、經王の光明朝野に輝きて、遂にその師勤操僧都をして、一旦勅簡に應じて寂澄より灌頂を受けたる身にも關はらず、尙ほ六十三の老軀を高雄の山門に運びて、更にその資空雅に就いて、三昧耶の灌頂壇に入らしむるに至りしなり。

高僧灌頂の事果てゝのち、阿闍梨は更に天皇の大命を拜しぬ。天皇の實齡の年ともに圓熟せさせ給ふとゝもに、入木道の御趣味はいよ〳〵深くならせ給ひて、主殿助布勢海を御使ひとして、五彩の吳綾に錦の緣を取りたる五尺の御屏風四帖を將ち來らせ、右今詩人の秀句を書きて奉つるべきの宣旨をぞ下されたりける。

天意の在る所は阿闍梨こそ善く知り奉れば、强ちに辭し奉つるべきにあらず、書意

の動く時を俟つて、謹書して奉つらんことを御受けに及びたり。されば、勤行の餘暇ある毎に、詩集を繙きて秀句を拔萃し、數次書體を練り居たるが、夏より秋にうつる天の常として、雨多く晴るゝこと稀なるに、況して山中は雨濕の氣絶えずして、綾を伸べて管を揮ふべき好き日とてもなく、空しく一月餘りを費したるなり。

八月十五日の朝なりき。晨起して窓を排くに、雲晴れ霧收まりて爽快なる秋霽に對することを得たり。待宵の月には尙ほ白雲のたゞよふを恨みしが、此の仲秋の名月こそ、いかに曇れる世の人心を、淸けくも照らすらめなど、旦にして夕の思はるゝまで、天の色は美くしかりけり。阿闍梨は寛の水を手に掬びて、淸淨に身體を拭ひつゝ、直ちに朝の勤行を終しが、一室を掃ひて氈を展べ、沙彌眞朗をして名硯に墨を磨らしめつゝ、拔萃せる秀句の本詩を一卷に寫し、頓て龍管に墨を銜まするや、忽ち吳綾の面に灑ぎて草蛇を走らするに、瞬間にして化して龍となり、或は雲氣仙風を起し、或は垂露偃波に列なり、鱗鳳瑞芝筆下に生ず。一點一劃目にも留らざるばかりなれば、眞朗等は磨る墨の手自からたゆたひて、憮然として目を駭かすばかりなり。

就中眞濟と眞雅とは、この超人的の筆勢に心を留めて、虛實の妙旨、橋縱の秘訣、聊かも意を用ふる所なくして、自然に法格に入り、天馬の空を馳する如き處、却つて萬斤の重きを要するあたり。目を凝らし神を鎭めて、細心に看取せんと努むるなり。實に阿闍梨が筆は神なりけり。剛柔如意にして活殺自在なれば、常に師の筆迹を學んで、多少得る所ある身にも、其の妙更に端倪すべからざるなり。殊に神旺にして興高く、筆もなく手もなく、心直ちに字を現はすの三昧に至つては、眞濟も眞雅も、更に眞朗と選ぶ所なく、殆ど夢に遊んで幻影を見る心地のみぞする。

阿闍梨は秀句を書き終つてのち、姑らく筆を案じて綾の餘白を諦視めたり。眞濟と眞雅とは、彼の餘白をいかにし給ふらんと、師の面と屏風の面とを見比べてありき。阿闍梨は目を瞑りて句を練るものゝ如くなりしが、筆はいつしか墨池に浸されたり。開かれたる眼は屏風の餘白に注がれたり。莞爾として筆を役すれば、咄嗟にして一篇の詩は成れり。

蒼嶺白雲觀念人。　等閑絕却草行眞。

心遊二佛會一不遊筆。
豈謂明皇交二染翰一。
祥雲濃淡御邸出。
青山翠嶽見二翔鳳一。
更有懸針與倒圭。
龍管臨レ池調二漆墨一。
異風驟雨莫二來汗一。
松巖數霧庵中濕。
畫虎畫龍都不レ似。
翰墨の妙は言はずもがな、咳唾も珠を成す韻華の致に至りては、斯道に深き眞濟も、只顧鬼工とするより外はなかりき。阿闍梨は揮灑し了へたる墨の乾く間に、又一篇の表文を艸して、直ちに之れを献じ奉つりぬ。
天皇はいと待ちわびさせ給ひける御時とて、之れを清涼殿に建てさせて御覽せさせ

不レ顧二揚波一爾許春。
鵠頭龍爪爲レ君陳。
瑞草秋冬感二帝仁一。
華苑瓊林望二走鱗一。
切思相伴竭二丹宸一。
烏光忽照點二豪賓一。
此是君王所二愛珍一。
恐レ汗望晴經二月旬一。
心寒心暑幾逡巡。

給ふに、淋漓たる墨痕今にも流れ出ん如く、筆端看る〳〵風を發さんばかりにて、其の精絶妙絶、寔に筆も言も及ばざりけり。さすがに實翰に於ては古人にも讓らじと思召す天皇ながら、是れには所詮及ぶべからじとて、只顧御感在らせられつゝ、空海が奉つる表文を、御手づから叡覽あるに、

空海聞く、物類形を殊にして事群慣を分つ、舟車用を別にし文武才異り、若し其能に當るときは、事則ち通じて快く、用其宜きを失ふときは、勞すと雖も益なし。空海元觀牛の念ひに耽り、久しく返鵲の書を絶つ、達夜數息す誰か穿被を勞せん、終日修心す何ぞ墨地に能へん、人曹喜にあらず謬つて漢王の邸に對へり、辭せんと欲すれども能はず、强て龍管を揮ふ。

古人の筆論に云く、書者散也、但だ結裝を以て能と爲るのみに非ず、必ず須らく心を境物に遊しめ、懷抱を散逸して法を四時に取り、形を萬類に象るべし、此を以て妙と爲すと。是故に蒼公(蒼頡)が風心は鳥跡に擬して翰を揮ひ、王少(羲之字逸少)が意氣は龍爪を想ふて筆を染む。蛇字は唐綜(唐終)より起り、蟲書は秋蟠(秋胡妻)

に發す。軒聖(軒轅)雲氣の興、務仙(務光仙人)風韭の感、垂露懸針の體、鶴頭偃波の形、騏麟鸞鳳の名、瑞草芝英の相、是の如き六十餘體は、並に皆な人の心物に感じて作れるなり。

或の曰く、筆論筆經は、譬へば詩家の格律の如し。詩は是れ聲を調へ病ひを避るの制あり、書も亦病を除き理に會ふの道あり、詩人聲と病とを解せずんば、誰か詩什に編まん。書者病と理とを明めずんば、何ぞ書評に預らん。又詩を作る者は古體を學ぶを以て妙と爲す、古詩を寫すを以て能と爲さず。書も亦古意に擬するを以て善と爲し、古跡に似るを以て巧なりと爲さず。所以に振古能書百家體別なり。蔡雍(邕字伯喈)大いに笑ひ、鍾繇(字元常)深く歎く、良に以あり。

空蟬儻解書の先生に遇ふて、粗口訣を聞けり、然りと雖も志す所道別にして曾て心に留めず。今聖雷の震響に賴つて心地の蟄字を拔く、六書の萃楚を折り、八體の英華を摘む。轉筆を鼎態に學び、超翰を草聖に擬す、山水を想ふて擺撥し、老少に法つて終始す、君臣風化の道、上下の畫に含み、夫婦義貞の行ひ、陰陽の點に藏

めたり。客主揖讓し、弟昆友悌あり、三才變化し、四序生殺す、尊卑愛敬し、大小次第あり、隣里和平し、寰區肅恭なり。此等の深義悉く字々に縕めり。功を書地に謝すと雖も、竊かに雅趣を庶幾ふ。

又、夫れ右軍功を累ねて猶未だ其妙を得ず、衆藝(善知衆藝童子)も沙を弄んで始て已に其極に會へり。自外の凡庸何ぞ點畫の奥を解せん。何に況んや空蟬耳に其義を聞いて心に理を存せず、空しく筆墨を費して忝なくも珍屏を汙す、一びは悚き一びは懼れて、心魂飛越す。

于時堯曦光を流して葵藿自から感ず。山に對つて管を握るに、物に觸れて興あり、自然の應、覺えずして吟詠す。輙ち十韻を抽て敢て後に書す。伏て乞ふ天慈其罪過を宥したまへ、幸甚幸甚、……

……

御覽の後あまたたび叡感在らせられしが、遂に御賞美の餘り、爲めに宸翰を染めさせ給ひて、御製の詩一篇を賜はりぬ。

深山居住振二奇名一。氷玉顔容心轉清。
世上草書言爲レ聖。天縱不レ謝張伯英。
暫乘二雲嶺一念繰一。書得綾羅四帖屏。
初見筆精鸞鳳體。倩看墨妙虬龍形。
高峰墜石未レ動レ地。絶澗長松豈揚聲。
亂點乍疑舞鶴起。相連還似旅雁行。
花苑正開春日色。月天遍照秋夜明。
對レ之觀者目眩曜。共賞二草書一笑二丹青一。
絶妙蠶能不可レ測。二王沒後此僧生。
既知風骨無二人擬一。收二置秘府一最閑情。

心を眞如の明月に住して、世間の毀譽の外に立つ阿闍梨とはいへ、この御製を拜しては、いかで聖恩の隆渥なるに感泣せざらん。殊に二王沒して後此僧生ずと叙感在せられ、秘府に藏めて時に天情を慰め給ほんとの玉音を拜しては、是れ偏へに身三寶に

仕ふる佛徒なればこそ、此の榮寵を擅まゝにすることを得るなれ。否らずんば京貫にも膺らざる草莽の微臣の、いかにして天威に呎尺し奉つることを得べき。この至大至厚なる君恩に沐するも、偏へに佛恩の致す所なり、師恩の賜ふ所なり。この恩に報せんには、一日も速かに大哘盧遮那の光明を傳へて、上は君上の奉爲に、國家の奉爲めに、衆生の爲めに、萬生の爲めに、拔苦與樂の途を講ぜずばあるべからずとぞ思ひ入りける。

爾る時、天の一方より驚くべき礫飛び來りて、したゝかに空海の心を打ちたるなり。雲井を洩れて高雄の山に通ふなる風の便りに、弘仁天皇の聖體御不豫のため、重陽の節會を停め給ひしよし、明らかに聞えわたりしなりき。

阿闍梨は心神主を失ひたらんばかり、痛く心を惱ましゝが、加持祈禱はかゝる時の爲めなりとて、諸弟子を隨へて壇上に藥師瑠璃光如來を勸請し、十月八日より一七日夜を結期とし、護摩の火烟は晝夜に接し、持誦の聲響は間斷なく、懇念を凝らし、丹誠を抽んで、天窮の平損を佛陀の神護に祈り、己を剋めて肝を爛らしたるに、感應未

だ審らかならず、いとゞ心許なかりしかども、十四日の朝に至り、加持したる神水一瓶を捧げて、眞朗を使ひとして宮中に參らしめ、この加持したる神水を以て、藥石を聞食させ給ひ、速かに不祥を除却せさせ給へと奏させたり。

阿闍梨が忠誠の心を佛陀の納受在しましてや、加持水もて聞食しつる藥石の、内外より病疫を攘ひまつりけん、一期の御祈禱畢りて、神水を藥石に添へて奉つりしより、さしもの御惱も漸次に勝れさせ給ひて、後の一七日には、早や後假床を拂はせ給ひけり。

大同の御祈りといひ、今また聖體除疫の御祈禱といひ、空海が行ふところの行法は諸天善神感應ありて、靈驗立ちどころに顯れしかば、天皇の御崇信は、其の詩書に於るよりも、更に幾層の御恭敬を加へつるなり。されども、空海の心は常に山居山修にありて、殿上に出入して威儀を飾るを喜ばざりしかば、天皇いかに御崇敬在らせらるるとも、俄かに僧綱に任じ給ふべくもあらで、已むなく其のまゝにさし置かせ給へりしなり。

阿闍梨はこれをこそ上もなき聖恩とは感謝せめ、心には彼の高野の原の伽藍建立を畫きつゝ、寸を得れば寸を化し、尺を得れば尺を度し、偏へに秘密經王の基礎、確實に定まるをのみ樂しみ居たり。

曾ては秋の頃を以て、再び高野に登らんと思ひしに、未だ得果さゞるうちに雪已に彼の嶺を閉して、實慧泰範等は下り來れり。泰範は曾て叡山の上足として、最澄の爲めに選ばれて眞言道を修せんため、高雄山には來りしなるが、學ぶこと愈深くして、密敎の幽旨愈邃きを感じ、斷然一乘顯戒の門を脫して、三密專修の行者とはなりしなり。之れがために最澄の嚴責を受けたれども、阿闍梨の範に代つて復書を送りしより、澄上人も慍りを遺れて歸依の篤きを悅び、許して眞言僧とはなしゝなり。されば、臘といひ學といひ、自から門侶の重んずる所となりて、三綱に綴いて此の沙門を推し、阿闍梨も亦其の圓滿の法德を愛して、實慧とゝもにかゝる役義をも命じたるなりき。

次の歳の夏、漸く智泉を伴ひて彼の山に登れり。二三の草庵膝を容るゝに餘りあれ

ば、先づ四至を究め、次に山上の八峰を究め、中原の地を相して、こゝに伽藍建立の基礎を定めたる上、初めて結界の法を修して、東西南北四維上下七里の中、一切の惡鬼神は結界を出で去れ、所有一切の善鬼神等、利益あるものは隨意に住せとぞ啓白したる。更にまた壇場を建立する結界を修して、此の伽藍如來像の前に於て、諸佛子等同法一心に佛法に住持し、四恩に報じ奉つり、有情を饒益せよと啓白し、金剛軍荼利菩薩法に歸命して、七日七夜懺悔禮拜したり。是れなん後年高野山金剛峰寺の興るべき第一の起手なりける。

無邊の生死いかにして能く斷たん、唯願那と正思惟と有るのみ。……心經秘鍵

第廿八　以呂波歌

弘仁九年の春、いかにして天の時序狂ひけん、常ならましかは人は野遊に心も空なるべきに、寒き日は玄冬の夜の如く、暑き旦は三伏の晝かとぞ疑がはる。殊に上下の心を寒からしむるは、時を定めぬ地震の災ひにて、氣も魂も身に添はぬは、天地に轟く霹靂の荒びなりけり。いかならん世の末にかと、營業も手に着かぬ折から、空むづかしくかき曇りて、日毎に夜毎に降りくらす雨は、宛然五月雨に異ならず、雨霽れば炎暑煽くが如くにて、疫癘猖獗じく行はれつゝ、都の内外は死人道路に充ち滿ちたりけり。

此の頃の例ひとて、疫癘に羅りし者は、家の内にて病ひを養ふことを憚かれば、孰れも洛外の野末に運びて、富めるものは小屋のさまも見よげに繕ひ、煮炊の世話より藥餌の通ひを勤むるものあれども、貧しき者は雨露を凌ぐ小屋とても得結ばず、僅かに一枚の莚を布きて露けき草の上に臥し、尙ほ一枚に身を蔽ふて、饑と病ひとに呻吟

き苦しひを常とす。假令眷族の者ありとても、我が玉の緒の惜しければ、感ることを慎れて足近く訪ふものもなく、固より藥石にも乏しければ、病苦を綏ぶるやうもなし。死に瀕みたる者こそ、かくして死を速むるを易しとせめ、さまでに重からぬ者、若しくは病ひの稍や癒りし者は、雨の旦、風の夕、死したる人、死せんとする人の周園より、襲ひ來る穢しの物、奇しの香に、心地死ぬべう曇えつべく、疲せたる脚を力に、勞れたる身を運びて、枯枝を拾ひ、水を汲み、唯だ一盌の粥を煮るにさへ、幾干の辛苦は積むやらん。哀れなるは野末に朽つる疫癘する人の上なりき。

阿闍梨空海は、この世からなる地獄の慘狀を見て、哀憐の心禁めあへず、曾て唐より持ち歸りたる藥草を頒ちて、この人々を救はんとするに、病ふの人は其の數限りもなく、我が請來せる藥草には、固より一定の量あれば、所詮これにて救はんことは思ひも由らず、さればとて此の憐れむべき黎民を、見殺しにせんは尙忍ぶべき事にあらねば、きと心に決する所ありて、大納言藤原冬嗣の邸に訪れたり。

歸依深き阿闍梨の、請せざるに山を出て來給ひし事なれば、家の人々うちも置かず

欵待し參らするに、阿闍梨は曇りたる面を和らげんともせず、主の卿と膝を交へて、いとうち濕りて懇談するなり。

冬嗣は阿闍梨の意見を聽き果てのち、徐ろに涙を拭ひぬ。

『微妙も冬嗣に誨へ給ひつるよ。聖人には家の運命をさへ擧げて任ね候ふものを、いかで大慈大悲の御誓願を空しうすべき。冬嗣が力にだも及ばんには、如何も御誓願を果たし參らすべし』

『そは欣しき御誓ひを承はるものかな。情は人の爲めならぬに、疾く施藥院を開きて、癒えざらん病者にも、切めて一調の藥を服ませたきものにこそ』

『施藥院を開かんことは易かるべし。いかにして多くの病者に施すべき藥草をか得べき。難かしきは此の一件にこそ候らへ』

阿闍梨はさもこそと期しつれば、こゝに始めて莞爾としてうち笑めり。

『貧道にも聊か大唐將來の良藥の候ふが、是れとても限りあれば、衆くの患者を救はんこと思ひも寄らず。さらば、施藥院に於ては、藥のみ施さずして、請ふ者には煎

じて與らすべし。凡そ體内の病ひは藥石能く之れを癒さん、されど、心の病ひは唯だ加持のみ能く之れを癒すといへり。即ち貧道は山に在りて懇念に神水に加持し、之れを藥院に送るべければ、これにて藥を煎じて與ふる時は、一帖にして三人を癒すべし。斯して丹精を抽でなんに、何とて志を遂げ得ざるべき。貧道が思ふ所は唯だ此れのみ』

『聖人の加持し給はんには、神水のみにても人を救ふに餘りあるべし。さらば、九條坊門の邸には、相應しき家もあれば、速かに彼處を開きて施藥救濟の悲院とは仕つらん』

阿闍梨は普ねく病者に代りて恩を謝し、眞濟をして此事に當らしめ、自らは持念の爲めに急ぎ山に還りたり。

天皇にも此の惡歳を痛く慮れ思召され、朕に何の咎ありてか、かゝる天譴を被るらんと、宸襟安からず思召されば、陰陽博士に命じて占はせ給ひ、また『昔天平の年にも亦斯の變あり、因て以て疫癘宇内を凋傷す。前事忘せず取鑒遠からず。竊かに

惟みれば、佛旨冲奥大悲を先と爲す、又疾病を拔除するは、抑前典あり。宜しく天下に令して齋を設け僧を屈して、金剛般若經を轉讀せしむべし』と宣らせ給ひしが、猶ほ悲哀の御心切にして、遂に御親手から紺紙を展べて金泥を筆端に染め、一字三禮、一日にして般若心經を頓寫し給ひぬ。

乃て空蟬を召して之れが慶讃を命ぜさせ給ひき。阿闍梨も主上の叡慮の難有きに感泣して、廣澤の池の畔、嵯峨院に於て開題供養し奉つる事とせり。

當日は、天皇にもいと御潛ばせにて、嵯峨院に臨幸在せられ、便殿にて御休息遊ばさせらる。間もなく御供養始るべきよし、奏しければ、寢殿に出御遊ばさるゝに、此時阿闍梨は常の如く香の衣を着すして、金色の衣を一着し、徐かに壇上に對つて進めり。主上はこゝに左右を遠け給ひて、唯だ御一人のみ對の座に着御なり、玉笏を持して御聽問在らせらる。阿闍梨は水瓶を前に置き、卓の上に宸翰の大般若波羅密多心經を奉安し、姑らく法衣の袖をかき合せて、契印を結びたるのち、右手に劍を執り、左手に念珠を持し、聲朗らかに心經を讀誦し、更に開題供養に移れる頃より、碟を飛し

枝を鳴らしたる風聲も、いつしか靜まりて、遂に進んで、

『我秘密眞言の義に依て、略して心經五分の文を讃す。一字一文法界に遍し、無終無始にして我が心分なり。翳眼の衆生は盲て見えず、曼儒般若は能く紛を解く。斯の甘露を灑いで迷盲を霑す、同じく無明を斷つて魔軍を破せん。』

と、結びたる刹那、卓上の御筆より赫々として黃金の光りを發つよと見る間に、阿闍梨の金衣も亦光明を八散して、宸殿の裡は見る目眩ゆきばかりなりき。

時しもあれ、暗暝なりし黑雲は天の一角に藏まりて、麗らかなる春の日は、野をも山をも溫かに照すなり。淸き風は軟らかに人を撫て、疫癘の神を國の外に穫ふかと疑がはれ、人の心も自から勇み立つことを得たりしなり。

かゝりしかば、天皇の御願空しからず、遠からずして疫癘の地を拂ふべく思はれければ、叡感斜めならず、件の金字心經と、阿闍梨の秘鍵とを窟に納め、一殿をこの嵯峨院の園中に營み、こゝに之れを安置して心經殿とは號け給ひてけり。

阿闍梨は水瓶に神水の良藥を滿して、郊外の患者を見舞ひしに、稍や癒たりしもの

は、衣を改めて立つて之れを迎へ、今猶ほ枕に臥せるものは、首を擡げて再拜し、其の面上には、孰れも言ひ知らぬ喜びを浮べたり。阿闍梨は瓶より藥水を注ぎつゝ、陛下の御哀憐深く在しまし、宸翰を揮つて金字の心經を寫させ給ひたる御功德によつて、さしもの疫癘も今は跡を絕ちたりと說き示したりき。

天時順に復して、疫癘既に熄みたれば、久しく停め給ひし宮城十二門の修營を急ぎて、頓て其事も畢りしかば、新たに諸門に榜額を打たるべき擧になりて、先づ殿閣宮門の號を選び、其の筆者を定めらる。則ち陽明、待賢、郁芳等東面三門の額は、主上親ら宸翰を揮はせ給ひ、安嘉、伊鑒、達智等北面三門の額は橘逸勢、談天、藻璧、殷富等西面三門の額は小野美材勅を奉じて之れに書し、殘る南面の三門、即ち美福、朱雀、皇嘉の三門、並に太極殿の前面に當る應天門の額は、空海阿闍梨詔旨を畏みて筆勢を揮ひたるなり。殊に應天門は正殿の御門なれば、其體に心を注ぎ一種の筆法を以て揮灑したりき。

天皇には一々に叡覽ありて、其の能書を賞させ給ひ、かゝる名迹を以て門額を打た

んには、渤海よりいかなる使節來朝すとも、彼を驚かすに足るべしと思召されけるが、特り應天門に至りては、結搆の奇古なる、柘本に就ても未だ御覽せさせ給はざりし書風なりしかば、此の書態は何に倣ひしぞと勅問ありけり。其時阿闍梨は其の筆路を說き明し奉りて、是れぞ即ち拋筆の法にて候ふと奏聞したりしに、主上は申上ぐるに及ばず、列坐る諸公卿も、今に始めぬ阿闍梨が筆の精妙さよとて、殿上殿下擧りて歎稱したりけり。

この事いつしか關外に傳はりて、高雄の空海和上こそ、應天門の額を書かせ給ひしに、かみまろの點を忘れ給ひて、門に打ちて後見つけ給ひ、驚きて筆を濡して拋げ給ひしかば、その處につきにき。見る人手を拍ちあざむこと限りなく侍りけれなど、訛りて言ひ罵しりたるなり。

十一月十六日、辛うじて宿志を果して高野の草庵に登り來れり。智泉、眞紹及び東大寺より附屬し來れる圓明、其外沙彌等の多く扈從して移り住まりけるに、今まで曾て人の住むものなかりし南嶽の冬は、時ならぬ人の香に春めきて、番匠等も小屋を列

ねて、丁々の音勇ましく、草堂には住侶聲を和して、梵唄の調嚴かに、降り積る深雪をも、襲ひ來る寒威をも、冒しに冒し、凌ぎに凌ぎて、苦もなく越年するを得たりき。翌年に至りて金堂の造營成り、新たに山を高野山、寺を金剛峯寺と稱する事となれり。其の五月三日には、地主兩社並びに、百二十社を勸請して、先づ伽藍神を崇尊し、六月朔日には、大塔の心材を虎が峰の深林より伐り出して、同じ廿八日を以て、諸れを壇上に曳き運ばしむる事とせり。是れ實に伽藍の根本なれば、假にも穢れあらせじとて、實慧をして之れが奉行たらしめ、杣大工十六人を選んで、これを一大法師、二大法師と稱び做したり。此の如き役人等にも結緣の料として、面々に眞言を授けぬ、此の緣に依つて工事にも障碍あらしめじとの用心なりき。

一大法師の組に授けられたるは、「ア、ビ、ラ、ウム、ケム」にして、之れに「バ、サラ、ダ、ト、バム」の假名を付け、また二大法師に授けられたるは、「[illegible]」にして、之れには「ア、ビ、ラ、ウム、ケム」の假名を付けられたるなり。十六人の大法師等は一心に其眞言を誦してありしが、夕方に至りてはたと此の眞言を失念し畢りて、いかに考ふる

ども、更に心に浮ばざりき。

一大法師も二大法師も、共に太く當惑したれば、恐る〳〵實慧大德が草庵に抵りて、阿闍梨より授け給ひし眞言を忘失したれば、何卒今一遍御敎へ賜はるべし、這たびは心に銘つけて得こそ忘れ候ふまじけれと言ふ。實慧は當惑の色を察して、其の賜りたる眞言を取つて見るに、一大法師に授けられたる『阿羅婆羅吽欠』には、何故にか『バ、サラ、ダ、ト、バム』と假名を付けられ、二大法師の『婆羅陀羅』には却つて『ア、ビ、ラ、ウム、ケム』とありしかば、假名の付きやうを心得難く思ふまゝ、杣大工等を待たせ置きて、急ぎ阿闍梨が方に赴き、其の所以を問ひまつりしなり。

空蟬は訝かる實慧を微笑して見やりつゝ、

『女にも骨あり、男にも肉あり』

實慧は立どころにして其の意を領解して、はつとばかりに叩頭き拜しつ。

實に金剛界は智を表して男に形り、胎藏界は悲を表して女に形れども、金胎兩部は寔に不二不離にして、金界にも胎藏を具すること男にして猶ほ肉あるが如く、胎藏にも金界を具すること、女にして猶ほ骨あるが如くなり。斯く心着かざりしは、傳法灌頂をも受けたる身にて、いと愧かしき事よと思ひしなりき。

實慧が歸り行けるのち、阿闍梨は圖らずも結緣の動機の甚だ不備なりし事を悟り得たりき。阿羅婆羅吽欠、婆羅陀羅と唱ふる聲は、熟れたる身にはいと易く覺ゆれども、眞言に心なき身には、唯だ異やうの音を怪しみて、却つて心に入り難ければこそ、彼の番匠等の朝に聽きて夕には忘れしなれ。僅かに四句の眞言を授くるにだも、民情に背けば此の如し。密機を普ねく弘通して、一切衆生をして眞言道に入らしめんには、今少しく平易なるものを造りて、知らず識らず口に上り、知らず識らず覺王の殿に進ましむるには若じと、深く此の一事に思ひを潛むるに至れり。

* * * * * * * * * * * *

是れより先、空蟬は文章の訓點を施すために、古くより作製られたる萬葉假名、吉備大臣眞備の製し創めしといふ片假名の二つを採りて、一定せる用法を定めんには、

内外二典の孰れを問はず、初學のために益する所大なるべしと思ひて、遂に悉曇の組織を應用して、こゝに五十音の圖を作り、母音子音の關係を明らかにしたりき。是までは漢字の音を採りたるもの、意を採りたるもの、或ひは熟字の上の義を採りたるものありて、中には義之の名をそのまゝにてし(手師)と訓ましむるが如きの類ひあり、之れを學ぶに別に師を要するが如き不便ありしを、流傳し來れる片假名を約めて、其の數を五十と定め、總てアイウエオの母字より生み出せる事としたれば、爰に始めて正しき音字の譜を得たりしなり。

されども、這は却つて學者研磨の用には至極すれども、上下一般を通じて用ひんには、重音多くして簡易なりとは言ひ難きに、空棄自身の立場より考ふれば、唯だ悉曇に基きて音字を五十に約めたりといふに過ぎずして、此れを以て佛法弘通の捷徑とはならざるなり。教法は本なり、文字は末なり、假令文字を習はしむるとも、其の意は佛陀の眞言ならざれば不可なり。一偈を解せず、一字を知らざる愚夫愚婦、婦女、童幼に至るまで、口より口に傳へて、自から佛法に結緣するものならざれば不可なり。

いかにせば可ならんか。

空棄は彼の動機を逸せずして、深く此の微妙の方便を起さんことに腐心したりき。或時涅槃經を讀誦したるに、圖らずも、

諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅爲樂

の四句の偈に接着してけり。是れ人生の最期なり、歸趣なり、常住なり、不斷なり。輪王と釋凡とを問はず、凡そ生を此の天地間に得たるもの、誰か涅槃の一路に入らざるものあらん。無常道に歸らざるものあらん。寂滅緣を結ばざるものあらん。春の花は時を得て匂へども、時去れば空しく散りぬべし。我がこの人の世も、誰か無常を免かれ得べきぞ。嗚呼人間は有爲にして、人世に常住のものなしと悟らば、速かに妄念の迷夢より覺め來つて、無明の醉を知らざる淨土に急がざるべからず。是れ實に釋尊一代の教旨なり。今この四句の偈に由つて衆生を諭さんには、利濟の功は萬卷の經に勝らんとぞ想ひ到りぬ。

同時に天華は頭上に燃えたり。梵唄の調格を假りて、長短八句の歌は、心水の鏡

上に落ち來れり。試みに筆を採つて書き列ぬるに、かくなん成りにける。

色は匂へど、　散ぬるを、
我が世誰ぞ、　常ならむ。
有爲の奥山、　今日越て、
淺き夢見じ、　醉もせず。

『嗟！　嗟！　是なり、是なり』

是に於て創めて『以呂波』歌の製は成りぬ。

（諸行は無常なり）
（是れ生滅の法なり）
（生滅滅し已つて）
（寂滅を樂と爲す）

第廿九　ふたら山

中元を過ること僅かに十一日、殘炎尙ほ雲を焦がして、秋意未だ水に動かざるに、山深ければ白露夙く草を霑し、境幽なれば凉氣淸く膚に徹り、蟬の聲旣に木梢を去りて、蟲の語晝も叢間に絕えず、異人の都する所、靈物の產する所、雲霧も亦世を隔つるの帷とぞ疑がはる。樹間を洩る、瀑の聲に谿の深きを想ひ、峽路を挾さむ樹の姿に山の高きを察しつ、杖を運ぶ空華が目には、此の嶮嶽峻嶺を踏み破りたる勝道上人の、精力と法力とのみ、現前晧るが如く映ずるなり。

東道に立てる道珍法師は、初めより勝道上人に扈從して、此の補陀落の絕巘を究めたる沙門なれば、四本瀧寺を出てより、其の跡に就きて其の昔を語ることいと詳らかに、頓て導いて山上の湖畔に出でたり。

峻坂に喘ぎ來て、忽ち平坦の廣土を得るのみならず、意ひの外にも漂渺たる一大湖の開かれし事なれば、隨行の沙門等は脚の勞れをもうち忘れて、阿呼とばかりに聲を

放つて歎賞したりしなり。道珍法師は直ちに阿闍梨等を神宮寺に導びきて、齋を供へて山路の疲れを勞らひたり。上人の遺弟子敎旻、尊鎭、仁朝等、皆な誠實を盡して、阿闍梨の山遊の一日も長からんことを努むるにぞある。

空蟬は去年七月高野の山を下りて、高雄山寺に歸り、更に杲隣、眞雅、並に大安寺の幹海を率ゐて、東國の古迹を巡禮すべく、平安京を發ち出でたるなり。行き〳〵て伊豆國田方郡走湯縣に着きぬ。こゝに桂谷といへる地ありて、溪水中を流るゝに、川の中より溫泉の湧き出して、疲れたる體を養ひ、病る身を癒すべき奇瑞著るしければ、此の勝境に由りて修禪せんに、其の効果空しかるべくも思はれずと、遂にこの谷に一宇の修禪院を營み、桂谷山寺と號して、こゝを杲隣大德に付屬したりき。

桂谷山寺落慶の時、楠の良木を得て、自ら丈六の金剛力士の尊像を彫み奉つり、之れを本尊として金剛界大灌頂を與行したるに、遠近の緇素傳へ聞きて、速く密灌に預からばやとて、隨喜結緣するもの雲の如くなりき。阿闍梨は猶ほ此の山の社頭を巡禮して、壇を結んで念誦すること三日三夜に及びしが、忽ち走湯權現の王子來影して、

權現形を隱さんと欲するに、先づ此の神鏡と寶鉢とを、二所の神窟に藏め給ひてよといふ。乃ち王子に東道せしめて、松ヶ岳の南の崛に鏡を藏め、東の谷に鉢を藏めたる上、法華經二部を書寫して兩穴に安置したり。夫れより指頭を以て空中に魔事品を寫し、心經秘鍵を講じて四域を結界したりしかば、是れより永へに奇異の跡を斷ちしといへり。今の所謂修善寺にして、其の記は眞濟親しく目睹するまゝを、筆を染めて作りたるなり。

桂谷山寺は既に杲隣大德が修禪の道場としたり。今は錫を阪東に飛ばさんとて、杲隣に引き別れて行くほどに、相摸の國鎌倉の里近く來れり。只看れば海中に小島ありて、島の形決して凡ならず、夫の『綠樹影沈魚上レ木、月浮ニ海上一兎奔レ波』と興じたりし淡海の竹生島と、伯仲の間にあるべき趣き見ゆれば、浦人の肩に負はれて、淺き海の瀨を沙りて到り着きたり。島人の語る所に據れば、此の島は靈龜の背に負はれたる蓬萊の浮島にて、神女あり惡龍と交りて棲み、時に妖禍を作すことありとなり。

島山を踰えて彼方に下れば、谿然として大海脚下に開け、巖を嚙む怒濤は碎けて雪と散るあたり、漫に土左の室生戸を懷はれぬ。巖角を攀ぢて岸の盡る處を見んとするに、忽ち身は一洞の靈窟の門に立ちたり。島人に問へば、是れぞ惡龍の窟にて、龍穴と稱へて人の近くものなしといふ。又一人は之れを卻けていふ、此の窟こそ神女の在す處にして、蓬萊洞とは申すなれ。昔し役行者來りてこの島を開き給ひ、後年また泰澄法師、道智律師等巡錫の序、神女をこの窟に崇め給ひて、惡龍の荒びを鎭め給ひたりと語りて、島の名は浮島とも、又、江島とも申すよしをも告げ聞えぬ。阿闍梨は斯くと聞きて、吾のこゝに來ること、正しく宿緣の然らしむる所なるべし。さらば、永く國家と住民とに利福を與ふるやう、件の天女を此の窟内に勸請し得させんと言ひつゝ、深く窟の内に進みて、讙摩を焚き經を修して、殊勝に行ひ畢りしなり。

此行の主なる要務の、固より東國の古跡を順拜して、其の四衆をして密敎に結緣せしめん爲めなるは、言ふまでもなき事なれども、一つには、去じ甲午の歲伊豫部博士が餘義なき賴みに應じて、勝道上人の爲に補陀落山の碑文を認めにし、下野國都賀

郡の名山を訪らひて、吾が耳より得たる文章と、目より得べき奇勝との幾干の差ひあるや、勝道上人が開き得たる補陀落山と、寰澄和上の草創せる比叡山と、今吾が入定の處としたる高野山と、孰れか遙く孰れか幽かなるやを、親しく目睹せんことも、主なる目途なりしことは、疑ふべからざる事なりとす。

爾るを以て、房總を經て常陸に入るや、直ちに路を野州に取りて、彼の山の麓なる四本龍寺に投じ、故上人の上足の弟子道珍等が款待を受けしは、七月廿六日にして、夫より龍生の瀧に於て一七日の念誦を修したる上にて、更ためて山頂に登り來り、今しも神宮寺に安着したるなり。

寺の後に雲を摩して山ゆる二山は、是ぞ二荒の神の鎭ります陰陽兩體の峯なるべし。此の山神を祈りて、こゝに其の勝益を增すべく、この神宮寺を造り得たる道勝の功德は、境ひに臨みて更に偉大を添へたるの感なからず。寰澄の比叡と道勝の補陀落とに對して、我が高野も決して讓るべき境なっず、これを三山三寺とすれば、果していづれの山が最も山修の禪居に適すべきか。之れを後代に徵するも、亦趣味なき案ならじ

など思へば、神旺んに興高まりて、勃々たる雄心の自から禁じ難きものあり き。

次の日は舟を湖上に浮べて先づ南の岸に到りて、歌の濱より千手崎に向ひ、千光眼を禮拜して、こゝに『補陀落山發信壇門』の門額を揮毫し、更に往いて神宮寺の艮位に當れる羅刹窟を見たり。

『この窟は山中一の魔窟にて候ふ』

道珍が足を停めて窟を指ざすに、阿闍梨は窟近く杖を進めて、

『毒龍山魅は、故上人によりて結界せられつと覺えしに、尙ほ魔所の存れりとや』

『さん候ふ、此の窟には及ばざりしと覺しく、毎年春秋の兩度には、此の坑穴より大風吹き起りて、寺中國内を破壞して候へば、二荒の名はこれにも呼び例はされて候ふよ』

『そは極めて難義なるべし、不敏ながら空雅、爲めに辟除の結界を修し進らすべし』

『大阿闍梨の法力もて、結界を行ひ給はんには、寺中のみかは、下野一國の幸ひ之れに過ぎ候はず』

『さらば、今より直ちに修法致すべきぞ、急ぎ壇を建き申さるべし』

敎旻等は眞濟を請ふて共に寺に歸り、三寶の献供、建壇の法器を、式の如く調へて、船をこの崎に回したれば、眞濟と幹海とは共に密壇を建きつゝ、直ちに讀經三昧に移りたり。此の時秋の癖として男體山の頂に一簇の黑雲の現はるゝと見る間に、湖上一面を罩め盡くして、汀をうつ波漸く高く、吹く風漸く荒れ增りつゝ、今にも天地瞑晦、霹靂震轟せんず愴景と變り果たり。道珍等は修法の席に列りながらも、故師に隨身して攀登せし昔の狀を想ひ出て、心自から慄然たらざるを得ざりしなり。

果せるかな、黑雲は窟の上に垂れかゝりぬ。風は枝を碎いて地に打ち下しぬ。波は巖に激して跳つて雲を洗ひぬ。護摩の烟は高く煽ちて、火は屢消えなんとせり。眞濟が讀經の聲は、風に抗ふて愈〻高く響けり。かゝる中に在りても、阿闍梨は右手に五鈷杵を執り、左手に念珠を持ちて、泰然として法を修せる狀、肉身のまゝにしてこゝに金銅の毗盧遮那佛に化したらんが如し。折しもあれ、一陣の魔風壇上に落し來たると見るや、迅雷轟き驟雨襲ひて、天氣益〻嶮惡を加へたるが、阿闍梨は更に犇む色

なく、咄嗟の間に作り得たる結界啓白の文を捧讀し、伏て乞ふ一切の冥靈晝夜擁護して、此の願を果さしめ給へ、敬つて白すと讀み訖る時、何處の霄に雲破れけん、日光燃々として窟の裡を輝かし、雨霽れ、風歇み、雷鎭つて、天は宛然縹の帷を張りたる如く、水また藍を溶きて滿したる如く、濕れたる樹々をわたる風は、心の底をも清めつべくぞ思はれける。

現象この奇瑞を見て、道珍等は、大阿闍梨の行法の神變不思義に驚歎せり。只顧其の恩を謝しまつるを、空猟は笑ひながら制しつ、

『この魔穴の惡鬼神は、結界の外へ出去りて、後へは日光菩薩を勸請したれば、もはや魔風の害は跡を絶つべし』

『唯今の感應を拜し奉つりし上は、何をか疑ひ申すべき。是れにて山中一の惡所もなく、二荒の山は補陀落伽山となりて候ふ』

『されば、補陀落の文字は補陀落伽の聖地に思ひ寄せて認めつれども、二荒の音のニクワウをそのまゝに、今より日光山と稱ばんはいかに』

『こは佳名にこそ候へ、菩薩永く跡を垂れ給ひて、愈々山の靈をや增しなん』

道珍等はこの日光の佳名に隨喜して、二荒の神をも二荒明神と稱へ、山の名は長へに曇りなき日光として傳へられたり。

阿闍梨は尙ほも勝景を看廻りながらも、道珍等に物語りぬ。

『仁等の師勝道上人には、吾顏を向けたることなかりしも、國司と頃年の故ありしを以て、便ち碑文を請はるゝまゝに、管翰の拙さを恥つと雖も、背命の辭なきに依つて、粗ぼ之れを注ぎき。頂の景を叙するに『怳怳惚惚として夢に似たり窟るに似たり、棧に乘るに因らずして忽ちに雲漢に入り、妙藥を嘗めずして神窟を見ることを得たり。一びは喜び、一びは悲んで心魂持ち難し。山之狀たらく、東西は龍の臥せるが如くにして、彌望するに極りなし、南北は虎の蹲るが如くにして、棲息するに興あり、妙高を指して以て儔と爲し、鐵輪を引いて而て帶と作せり、衡岱の猶ほ卑きことを笑ひ、崑香の又劣れることを哂ける』としたるは、敢て私に形容したるにあらねど、稍や實に過ずやと氣遣はれしが、今既に見聞する所、靈勝誠砌、比類あるべしとも思

はれず、唯だ益文の拙きを恥たり』

道珍等も恩を謝していへり。

『故の師も申して候ひき。『四面の高岑影を水中に倒にす、百種の異莊木石自から在り、銀雪地に敷き金華枝に發く、池鏡私なし、萬色誰か逃れん、山水相映ず、乍ちに看て腸を絶つ、瞻つゝ佇めども未だ飽かず、風雪人を趁ふ』とし給ひしは、親く其境に在して寫し出されしが如く、阿闍梨は神通力にて在するよと、常に道珍等に誨へ給ひき』

『勝道未だ『華藏を心海に觀じ、實相を眉山に念ずる』の法德を具へねども、『池中の圓月を見ては、普賢の鏡智を知り、空裡の惠日を仰いでは、遍智の我に覺る』は、之れ居る處の氣に感ずるなり。『蘊羅寒を遮り蔭葉暑を避け、菜を喫ひ水を喫つて樂み中に在り、乍ちに行り乍ちに干きて塵外に出づ』るは、是れ法師の本分なり。努々この文を身に體して片時も忘るべからずと白されて候ひき』

敎旻も亦た故の師の遺誡を說くなりき。他の二人も碑文を口吟みては、同じく故上

人を語るなりき。

山上を極め、湖畔を極め、靈地にして堂を備へざる處には、寺院を起しなどして、八月の下旬四本龍寺に歸り來り、般若理趣三昧、加持如意法を道珍に授けてのち、

『吾此の勝形を翫んで久住の思ひありと雖も、皇家の御修法に暇なければ、是より華洛に歸りなん。仁等一心に道師の跡を繼ぎ、盡未來際過失せしむること勿れ』

此の嚴誡を後に留めて、日光山を立ち出でしが、中山道には賴らずして、山越に奥の會津郡に出で、こゝにて德一菩薩と對面し、これが爲に惠日寺を興して、更に雪早き越路を踏みながら、北陸道を平安京に歸り着きしは、歳の十二月盡なんとする頃なりき。

高雄山寺に歸りて見れば、十月廿六日を以て、皇帝親しく宸翰を染め給ひ、傳燈大法師の位記を賜はり、更めて內供奉十禪師に任ぜられ、勅して東山の鹿野寺に住せしめられたり。時に歳四十七なりき。

第三十　照闇の光

明れば弘仁十二年四月、讃岐國萬濃の池の築池使刑部少丞路眞人濱繼より、表を上つて請ひ申す所ありき。そは、傳燈大法師位空海は、部下多度郡の人にて、行ひ離日より高く、聲彌天に冠たれば、山中に坐禪して鳥巣ひ獸狎れ、海外に求法して虛く往て實て歸りぬ。茲に因て道俗風を欽び、民庶景を望み、居れば則ち生徒市を成し、出れば則ち追從ふもの雲の如し。今久しく舊土を離れて常に京都に住み、百姓の戀慕すること實に父母の如し。若し師の來ると聞かば、部內の人衆履の倒にして來り迎へざるは莫けむ。伏て別當に宛て其の事を成さしめ給へといふにありき。

時に大法師は、自ら指揮して智泉をして尊像を圖畫せしめつゝありしなり。從來の佛像を見るに、諸尊の形狀區々にして、釋迦如來は阿彌陀如來と相混じ、藥師如來は大日如來と分別する所なく、現に寂澄が靈木を以て等身の佛體を彫り奉つり、之れを內陣に安置せんとして、三體每に讀經して御名を稱奉つり、其の點頭せ給ふを見て、

そは藥師如來、こは阿彌陀佛と別ち奉つりし程なれば、一見して其の何佛に在ますかを判ずるは、最も至難の業なりしなり。空海は密敎の儀軌に由つて、嚴密に之れを正さんとするの志ありしものゝ、廣宣流布に急にして未だ指を染るに至らざりしが、今度少しく閑を得たれば、智泉に命じて新たに諸尊の威儀を圖寫せしめ、相好、態度より印契、道具、或は寶冠、法衣に至るまで、經に準じて夫々に殊別し、一目にして何の如來、何の菩薩たることを、見別け奉つるに至らしめんため、此の大誓願をば發じたるなり。

朝廷にても密々其の事を知し召されしかば、別に高雄三綱に御諮問までもなく、件の和尙他の障あるに依て、遣はすべからずとぞ仰せ渡されける。然るに國司重ねて解狀を申し請ひければ、先づ大法師に諮ねばやとて、讃岐國司が上表の旨を仰せ渡されぬ。

斯くと承まはるや、大法師は自ら進んで其の任に當らんことを請ひ申したり。已に去年より勤めて修築を加ふるに、池大にして課役の民少ければ、築成の期いつを終り

ども知れざる事を聞きては、空雅が意氣に於て、默して止むことを許さゞるなり。況んや其の池は父母の國の千町田の生命にして、而も故郷の隣郡にあるをや。また空雅は此の池の由來をも悉く知れり。池は三十六谷の溪水を注いで、宛然に汪洋たる湖の如く、灌ぐ處の田萬許町に及ぶを以て、眞野の郷の池なるを、萬農の池とは稱び傚せり。歌に十千の池と詠めるも、同じく萬の意なり。此池一たび決する時は、三郡の耕池は磧となるべく、堤を築くは病る人に藥を投ずるよりも急なるべし。殊に那珂一郡は、晴天五日に經れば水澁の潤ひなく、霖雨二日に及べば洪水の難ある地なり。二年にして尙未だ堤の築かれざらんには、民の憂ひ幾干なるべき。よし、さらば、進んで此の職を奉ずべしとて、法衣を褰げて蹶然とし起ちたるなりき。

特に空雅をして進んで此の任に當らしめたるには、尙ほ他にも已み難き事情ありしなり。そは比叡山の寂澄法師、山門に戒壇を建き、圓頓一乘戒を授けんことを上表したるに、平城七大寺にては奮つて之に反抗し、寂澄をして遂に顯戒論を著すに至らしめしが、双互の法論熾烈を極め、互ひに火華を散して相爭ふこと、空雅が東國巡禮の

頃より發りて、今尙ほ治らざれば、空雅は之れが渦中に捲込まるゝことを憂ひて、此の嘱請を機として、避けんとするの念慮も、亦た之れなきにあらざりしなり。

朝廷にても大法師の義心を嘉して、右大臣の宣を被つて、勅を奉はつて宣しく請に依らしむべきの符を下し、其の供養料は正稅を宛て用ひ、路次の國々は食馬を宛て給ふべき旨をも、併せて承知せしめたれば、濱繼等は歡喜して速かに入京し、恩を謝して大法師を迎へたるなり。

空雅は既に勅を奉まはりぬ。即ち吾が甥にして大安寺に於て得度せしめたる沙彌眞然を隨へ、童子四人を率ゐて彼の國に發向したりき。

實に濱繼等の計らひし如く、入唐求法の大知識として、勅賜傳燈大法師位の大德として、國人の渴仰一方ならず、船の岸の着する頃より、早く其の慈顏を拜さばやとて、集ひ來る者雲の如く、野も山も人を以て滿さるゝばかりなれば、池の側らに壇場を建立し、愈修法を開始すれば、遠近の農民等、孰れも望んで築堤の課役に就き、今まで屢成らんとしては、人の少き爲めに破られたる箇所も、見る間に高く土を盛られ

て、風雨も爲めに破壞する力を失ふに至れり。殊に日々數萬の民衆の堤上を往來する事どて、新に盛られたる土も固く踏みしめられ、周圍遙かに遠くして、幾里にかわたれる堤も、高きこと丘の如くに築き成されて、今は萬代經ともこの堤ばかりは崩れじとこそ見えたりけれ。

公家にても大法師の德を賞して、七月廿六日、勅して富壽神寶（弘仁九年所鑄新錢）二萬貫を賜ひたれば、是れを以て三寶を供養し、役民を慰め、隄上の壇場は土の僧を して三箇年間祈禱を繼續し、甘雨を大地に湛えしめたりしかば、蓄水いつまでも絶ゆることなく、田畝に炎旱の愁ひなくして、農民長なへに豐稔の慶びに浴したりき。五年の後、大和監察使藤原三守、紀伊守末等の請ひに依つて、大和高市郡村井の益田池の碑文を製したるも、畢竟この功に感得らんとてなりしなり。

九月に至つて京に歸りて見れば、智泉が圖像の功は既に畢れり。空海も亦毫を染めて龍猛菩薩、龍智薩埵の影像を謹寫し、讃を敬書したる上、襦者青龍寺より請來したりし、善無畏、金剛智、一行、不空、惠果五祖の影を重修して、之れにも讃を題し、

この七祖の影讃と、智泉が圖する所の大悲胎藏曼陀羅、金剛界大曼陀羅、五大虚空藏、五忿怒尊、金剛薩埵、佛母明王、十大護天王、藥魯拏天像等二十四鋪と、もに、九月七日を以て懸ろに供養し奉つり、又、四年前の十一日、空海の高野に在りて冬籠りしたりし折、園人の右大臣と前後して薨じたる、故の中納言藤原葛殿麻呂のために、其の贈られたる紫綾の文服を以て地となし、金銀を彩となして、十七尊の曼陀羅一鋪三幅を圖し奉つり、別に大樂金剛不空三昧耶理趣經一卷を書寫して、香華を設けて供佛開演し、聊か知己の恩に酬ひ得たるを悅びたり。

翌年は平城の太上天皇の宣を被つて、曾て東大寺に營みたる南院をば、密敎敷揚の灌頂道場としたるに、俄かに上皇の御幸ありて、灌頂を受けさせられんとの宣旨なりき。我が朝にてこそ天皇灌頂の例しなけれ。大唐にては屢行はれたる事ありて、現に吾が師惠果大阿闍梨の如きは、三代灌頂の國師たりしかば、空海も謹んで宣を奉じ、太上天皇並に廢太子高岳親王に對して、佛性三昧耶戒灌頂を授け奉つりき。是れ則ち、我が朝に於ける帝王密灌の始めなれば、其の作法嚴かにして、內外の